

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

特 216

752

尊王正議

始



特216  
752



王  
正  
議

田中智學居士述



## 尊王正議の首めに

故北白川宮成久王殿下の兇報、萬里の空を破て吾國に達す。朝野震駭し億兆痛哭して此大故を深悼す。予は特に其變故の由て來る所の禍因に想到して、深く戰慄を禁ぜざるものあり。即時當局諸大臣に注意を促し、直ちに同志に檄して、別時追弔の大會を開き、故殿下の英靈を弔慰し奉ると共に、殿下に因せて廣く一國上下に告ぐる所あらんとして、當日國柱會館に於ける祭壇尊牌の御前に於て、當日千有餘名の參列者に對して、尊王正議の一論を講述せり。實に大正十二年六月十日なり。本篇はその筆記にして、五分の三は速記に據り、五分の二は追記に據る。全稿七月二十六日を以て製版に付し、校正將さに竟らんとする時、不幸大震災によりて、印刷を阻障せられ、荏延以て

今日に至る。然るに本篇の期する所、専ら國民の深き反省を求むるに在り、即ち國家の兇變に因みて、覺醒を緣起せんとなり。故殿下の兇變に緣りて講出せられたる本篇が、その幾倍の大兇變たる大震災の國難を跨いで後に開版を見たるは、宛かも國民警覺の機を濃熟せしめて其領會を深からしむる天の籌算に似たり。今よりして之を見れば、故殿下の兇事は、震災大國難の序分に擬すべし、三災七難並び起て、天の警鼓太だ急なり、舉國眠を破て蹶起すべきの秋。請ふ先づ尊王正議に聽け。

大正十二年十月

智學 田中巴之助識す

# 尊王正議 目次

## 緒論

- 一本講の緣起……………一
- 二論斷の基準……………二

## 本論

### 第一日本の君民

- (一) 國とはいかなるものぞ……………三三
- (二) 國の二種別……………三七
- (三) 撰ばれた國……………三〇
- (四) 先天の王道……………三六

(五) 日本立國の五大要素……………五五

(六) 君民一道と君民一徳……………五七

(七) 君民一致の史的根據……………五六

(八) 先天の民命……………六九

(九) 四海一家の實現……………七三

(十) 「あきつのとなめ」は世界統一の瑞語……………七五

第二 護國と尊王

(一) 正しき護國の意義……………七七

(二) 尊王と勤王との別……………七八

(三) 尊王論の基準……………八〇

(四) 宗教的解釋に依りて得る世界的價值……………九六

(五) 皇室の存在は直ちに日本の存在なり……………一〇〇

第三 履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし

(一) 外來思想の履霜

    (其一) 階級闘争説……………一三三

    (其二) 相互扶助説……………一三三

    (其三) 衝説……………一三六

(二) 吾國過去の社會的變遷に於ける履霜……………一四六

(三) 現代思潮の諸缺點……………一四九

(四) 偉大なる忘れもの……………一五三

(五) 霜の後氷の前寒心すべき古今の三兇……………一五五

(六) 尊王護國の體驗……………一六三

第四 濁亂の世に放つべき光輝

(一) 荒蕩濁亂の世相……………一六七

(一) 濁亂の世を救ふべき唯一の法……………一七一

    (其一) 醇精簡要の法……………一九一

    (其二) 即妙の圓益……………一七三

第五 世界的覺醒と國民的覺醒

    (一) 世界を擧げて日本國體を研究せよ……………一七七

    (二) 國を擧げて神武天皇に還れ……………一九二

附記……………二〇七

國民警護團創設の議……………二〇八

# 尊王正議

## 第一 本講の緣起

### (一)

本日國柱會並に天業青年團の主催を以て、故北白川宮成久王殿下の御追弔の儀式を執行し、併せて茲に一場の講演を以て、殿下の御尊靈に御手向申すに就て、國柱會の各支局及び天業青年團の各支部からも代表者を上京せしめられて、甚だ嚴肅で且つ誠意の充實した、一場の大弔祭を執行し得たことは、誠に貴い事である。殊に今日は、故宮殿下に取て御兄弟に當らせられ、殊に北白川宮家の御分家である二荒伯爵閣下が、特に宮家を代表して御參拜の上焼香のあつたことは、此の會の發願者たる予、及び主催者の甚だ満足に堪へざる所、尙ほ又各方面に亘つて、朝野の名士諸君が來弔せられたことも、これ又深く甚だ満足する次第である。

(III)

おん手向けに撰んだ講題は、「尊王正議」である。そもく此の講題を撰んだ譯は、故殿下の御遭難といふことが、實に空前の變事であつて、金枝玉葉の御方が、御三方までも、海外異境に在つて、測らざる奇禍によつて非常な御怪我をなされ、殊に成久王殿下の如きは、これが爲めに御薨去になるといふことは、我國開闢以來曾つて無いことで、又世界の古來にもあまり類例のない變事と思ふ。そこで此の兇變の來つた事柄に就ては、殿下がみづから自動車を操縦あそばされて、これによつて不慮の御奇禍に罹らせられたといふことが、如何にも殿下が平民的であらせられて、萬事眞率で御氣輕であらせられた事を察し、奉り、その寛容簡素の御美德に對しては、吾々臣民の感激に堪へざるところである。皇族がこの平民的であるといふ事は、甚だ美風であることは申す迄もなく、殊に近時攝政宮殿下に於かせられても、萬事非常に開放的に遊ばされて、専ら御謙讓の美德を以つて、吾々民衆に御接しになるといふことは、何とも有難いことである。のみならずこ

れは日本の國體、國性の眞實を顯はしたものであつて、たゞ流行を趁ふといふやうな意味に解してはならぬ。然るを時代の潮流とのみ考へて、只西洋の眞似に、ワケもなく、「平民的」だの「平民主義」だのといふ淺薄な言葉の中に閉ぢ籠めて置くべきものでない。要するに皇家の眞面目が、時に應じて顯はれるので、國民の方からは、一層深い重い意味で受取らねばならぬ理由がある。

(III)

而して此の皇室の方々が、萬事開放的になさるといふことに就ては、國民として、之を軽く解して、只々御手輕である、開放的であるとのみ考へて居てはならぬのである。皇室が國民に對して、萬事御手輕に開放的になさるといふに就ては、さうなさればなさるほど、吾々人民に於ては、皇室に對するところの尊敬の精神およびその行動が、それと正比例して發展して行かなければならぬ。その調節を謬つた意義に於ては、或は國家の危機が此の間に藏して居ることになる。今回の事變に就て、彼をおもひ、此を想つて、甚だ甚大の感激に撃たれた爲め、單にその御兇變を哀悼し奉

るといふのみでなく、國民的反省といふことのうへに、深く省察せねばならぬところから、追弔として本講を叙するに至つたのである。予は當時御兇變の號外を手にするなり、直ちに總理大臣をはじめ、内務大臣、外務大臣、宮内大臣、陸海軍大臣等へ向けて、時刻を移さず、一片の感想をば我が同志と俱に、即日電報、ついで書面を差出し、同時に國民重大の意義としての奉弔大會を思ひ立ち、全國の同志及び海外に在る各支局に通知して、こゝに此弔祭を開催したのである。

元來、吾々人民が皇族の御不幸について、特に弔祭をするといふやうなことは、これは差出た話でもあり、且又皇族方の御不幸のある度に、吾々が斯ういふ事を爲すべきか否かといふことは、大いに考へなければならぬのであるが、特に北白川宮殿下の御不幸に對しては特別の意味がある。吾々は何等の御知遇を故殿下に蒙つたこともなく、お目にかゝつたことさへない。それであるに拘らず、茲に此の一場の追弔大會を開いて、遠くは滿洲朝鮮北海道等の遠方からも、我が同志が集つて、茲にかゝる莊重なる追弔をしなければならぬといふ理由は、此一事が深く吾等の報國的良心を刺激して、這の中に重大の反省資料あることを思つたからである。此の殿下の兇變といふこと

背後には、國民的用途の缺陷があつたといふことを痛感したのである。それを考へて見ると、此の殿下の不可思議千萬なる御奇禍は、これは吾々に向つて一つの警告を與へられた天意である。即ち天意の警告であるといふやうに吾々は直感した。そこで此の御菩提のためには、何が一番よからう、どういふ事をしたら一番御功德になるであらうかといふと、故殿下に對する御手向としては、此の國民的用途の缺陷の源を塞ぐ、即ち尊王心の充實といふ事は我が同胞に訴へて、聊かも此尊王思想の上に一步を進めるところの計ひをしたならば、これに増した御功德はなからうと斯う考へた。即ち國民覺醒の急所を衝くのは、此の尊王思想の正しき解釋を與へて、尊王心の充實を圖ることに在る。皇室の美しい平民的御寛容と相待て、國民の美しい尊敬が昂進して、よく其調子が合ひ、よつて以て眞の君民一體の意義を體達して、國の相が圓滿に發達して行つたならば、皇室に於て此の頃の風紀を開發なされた此の平民的の御振舞、これをますます順當に發揮して戴いて、蕩々たる先天の王道を宣揚して戴くことも出來よう。



(四)

昔は、天子様を拜むと眼が潰れるといつて、「これを九重の雲の奥深く閉ぢ籠めて、さうして君民の間を隔てたものである。ところが日本の國の成立は、舉國これ君であつて、同時に舉國これ民である。君民の二つしか我が國には眞の階級はなかつた。それが途中から、其の民衆の中から或る一つの政治家だとか、或は貴族だとか、豪族だとかいふものが理不盡の膨張をして、それが自分を衛るために、自分の周圍に牆壁を築いて、遂に君と民との間を割くやうになつたのである。蘇我藤原の専横より、降て武家政治の世まで、長い間に國の眞の相が失はれて居た。然るに明治天皇が開國中興の政をば明かにせられて、此の國は元の建國の時の相に復ることになつた。

(五)

明治の中興は、日本の眞面目を内に整へたのである、同時に外に向つても、眞相を明かにしな

ければならぬ。それは此日本國の建てられた由來が、此國を中心として、終に世界の大平和を建設しようといふのに在るからである。故に吾々は

國を擧げて

神武天皇に還れ！

世界を擧げて

日本國體を研究せよ！

といふことを、日本國の使命、人類の歸着として、この方針で人生を意義あらせようとして居るのである。國民は、國を擧げて神武天皇に還らなければならぬ。世界は、世界を擧げて日本國體を研究しなければならぬ。これが現代に於て、國民としても世界の文化としても、一番正しい一番なまねばならない緊要な大きな仕事として遺されて居る。「遺されて居る」といふ言葉は、今日の人が顧みないから「遺されて居る」といふ名が附いた、實は遺してはならない、やらなければならぬことだ、それが遺されて居るのである。日本國民は悉く國體の自覺に還らなければ、此の日本は、いくら社

會の改造や、民風の向上を論じて、政治家や學者がどの位骨を折っても、力を入れても、この根本義を閑却して居ては、決して國運は發展しない、國民は建國の精神に還ることが、國民として唯一の務である。今世界は、世界を擧げて混亂状態になつて居る、此の混亂状態はいろいろな因縁理由からして起つて居るけれども、根源は人生の歸着を得ない、文化の標準を得ない所に在る。今の世界は、一番の缺陷が何であるかといふと、「不安」といふ事である、不安を治するのは「平和」だ。だから、人類は自然天然と常に平和をくと求めて居る、渴する者が飲を求め、飢えたる者が食を求むるが如くに、平和を求めつゝあるに拘らず、平和は來らない、平和を來らせようとして計ふ度毎に、だんくその平和を攪亂するといふのが、今日世界の状態である。かるが故に、今日の世界は、その平和を求むるといふ仕事の上に於ては、平和の第一標準たるどころの世界的解決の價を有つたものを探し出さんければ、いくら騒いでも眞の平和は來ない。此の點に於て、モウ議論は後として、最後の斷定を下せば、世界を擧げて日本國體を研究するといふことが一番である。國民に向けては神武天皇に還れといひ、世界に向けては、日本國體を研究せよといふ、此の二ツが

吾等の根本の主張である。今日斯うして講演をするのも、追弔會のお祭りをするの、日々に新聞(天業民報)を拵へて出すのも、此席に居る講師達が年中宣傳のために講演をするのも、吾々の同志が精神的若くは物質的にいろいろな貢献をして、法の爲め國の爲めに不屈不撓の御奉公をして居るのも、皆その爲めである。

(六)

先づそのお膝元たる日本の國民が、國の價値を知らずにフワクして居るといふことは、國民としても非常な損害である、況してや此の國の有するところの使命は、世界の平和のために建てられた國であるとすれば、吾々日本國民は、平和を世に齎し來るところの任務を持つた天職者である、その天職の自覺に復つて、さうして國民たるの實を完うし、人類救済の美果を收めるといふことは、何から出發するかといふと、みづから國を知ることから始まるのである、それが即ち第一の急所である。さうするには、先づ日本の國の何ものであるか、日本の皇室の何ものであるかといふことを知らなければ

はならぬ。皇室といふものは、人民のほかに別に在って、吾々と關係の無いものが高きところに別に在る、といふやうな考へてはいかない、皇室は即ち、吾々國民の事業をまとめたものが皇室である、國民は、皇室の事業を分擔するものが國民である。斯ういふ關係が明かになつて、はじめて國民の一體といふことがわかる。その君民の一體を事實に顯はして、國の使命を果さうといふには、正しき尊王思想を充實しなければならぬ、正しい尊王思想が充實して、初めて民徳厚きに歸するものである。であるから皇室に於ては、まずく正しい平民的の意義を助長して、王道を宣揚せらるべきであると同時に、國民に於ては、正しき尊王思想を充實して、さうして民徳の向上をはからなければならぬ。その事を述べようといふので此の『尊王正議』を講するのである。「正議」といふのは、世の中にいろくな議論(この尊王といふ事に就て)があるから、その中で斯ういふ風に考へるのが本當だといふことを話すのが「正議」である。而して此議論は、予の私見ではない、一はら國聖の指南に則つて、その義を敷衍するのである。かくて此の正しき解釋を世に周遍して、世間の冥闇を除いたならば、これによつて人類も歸着を明かにすることが出來て、非常な功徳になると思ふ。即ち此の

大功德を故殿下の御尊靈の御手向として、御回向をしたいと存するのである。

(七)

そこで此の尊王といふことに就て、これは今始めていふのではなく、古來から、いくらかも尊王の義を述べた先賢もあるが、それとどう違ふかといふと、違はないところもある、また違つた點もある。要するに尊王の解しかたが、從來あまりに淺露であつたから、それに深い力を有たないため、往々にして時代の潮流に浚はれそうになる虞れがある。今日の如き思想混亂の時代に在つては、確乎不拔の論旨が立って居らねば、民心の深い理解と感銘とを賦與することが出來ない。

世間で言つて居る多くの尊王論は、モウ一息……といふやうなところ迄往つて、どうも徹底しない。それ故その把住がしつかりしない。此の尊王思想が、不徹底のまゝで扱はれて居るといふことは、深く考へると、實に國家のために太だ危険である、であるから之を一つ徹底的に解釋しなければならぬ。その徹底的に解釋するに就ては、茲に尤も大切な標準がある。これは此論談ばかりでない、

一切の解決に亘つての標準であるから、その事を一寸話して置く。

## 第二 論断の基準

(1)

總じて此の尊王および君民關係、或は國家の組織とか、此の頃謂ふところの民主主義だとか、或は社會の改造だとかいふやうな、すべての議論は、一切を通じて、その根源に於て、確たる判断の基準がなくてはならぬ。そこでいろいろの間違つた考へに、その根本の振出しが一つある、又これを正しく解釋するところの標準も一つある。此の標準の是非得失を辨へてかゝらなければ、千萬語もたゞ徒に喧騒を醸すに過ぎない。今は騒々しい世の中である、新聞でも、雑誌でも、或は書物でも、毎日のやうにいろいろなものが出て、殆ど應接に遑あらざる程に、理窟が賑やかになつて居る辯論の徒、文筆の徒、或は文藝に訴へ、或は美術に訴へして、いろいろな方面からいろいろな思想が、世に續出して居る、然るに此いろいろ雑多な思想や議論が、出れば出るほど、昌へれば昌へ

るほど、だんくこんがらかつて解らなくなつてしまふ。それは根本の標準が立つて居ないからである。そこで予は、此の議論の初めに、その間違つた標準と、これを正しくする標準とを二つ簡單に約んてしまはうと思ふ。

(II)

それは何であるかといふと、物の間違つて來る標準といふものは、事物を隔て考へるところの思想である。これを偏見といひ、「隔歴思想」といふ、「隔歴」とは物がへたたるといふことである。それから之を解決して、各々その處を得せしむるところの準律はどういふことかといふと、それは事物の隔たりを超越して、まごまりをつける「圓融の思想」である、「圓融」とは圓かに融することだから、物が隔別しないことである、別々であつてもかまはない、別々であればあるほど、その別々のものが、根底に於て、一つの意義を成して、一つの體系を成して居るといふ原理である、その原理の上に吾々の全生命をつなぐといふことが、即ち此の「圓融思想」である。

○「隔離思想」は争ひの法

○「圓融思想」は解決の法

此の二つである、此の圓融思想によれば、世の中は治まる、隔離の思想によれば、どんな立派な文化があつても、此の隔離の上に根の生へた文化では、どこまで進んでも、只争ひがこんがるはかりで、決してまとまりはつかない。今の思想の大體は、すべて此の隔離思想である。我と彼とをへだてる、自分さへよければ、他はどうでも可いといふやうなことは、皆この隔離思想である。例へば今日、「愛」といふことをさかんに主張するが、そのいはゆる愛は、自我を基礎として、感情から割出すので、隔離から出て居る愛だからいけない、圓融の意味から生じた愛でなければ駄目だ。圓融の意味から生ずれば、もろくの邪見でも悪事でも、すべて根本の圓理に陶冶されて、悉くみな來つて正義の用をなすやうになる、所謂「毒藥變じて藥となる」といふ如く、毒が變じて藥になるといふのは、圓融の思想に在る。今日はみな此の隔離の思想に悩まされて居るのである、世の中は隔離といふことによつて闇が深くなつて居る。此の闇を破るには圓融思想をさかんにしなければならぬ。此の圓融思

想といふものは、釋尊が法華經に於て説かれた、極めて高尚な、極めて周匝な、而も切實に且つ端的に、吾々の時勢に直ちに用に立つやうに遺された、法華經の「一念三千」の道理である。毒を藥にする、死んだものを蘇かす、此の圓融思想を原則として一切を論ずるのである。

(三)

それから又、斯ういふ疑を起す者がよくある。「お前はしきりに國體といふことを言ふけれども、その國體といふ言葉の下から、直ぐ日蓮聖人だとか、法華經だとか言ふが、法華經と國體どう關係があるか、法華經は佛教で、印度で釋迦が説いた教である、日本の國體と何の關係がある、恐らくは佛教と國體とを、無理に結びつけるのは「いか」といふ様な、月並の批評を耳にするが、素より論辯する價はないが、一應言つて置かんと癖になるから言ふが、一體天竺だの日本だのといふ、そんな小さな考が吾々にはわからない。此の天の日の照すところは皆な一つである、日本だとか、印度だとか、英吉利だとか、アメリカだとか、其れは地上に於て纔に限界をしてある小さな區

分であつて、道理といふものから見れば、何でもない。道理といふものは、天の日が此の大地に臨むやうなもので、何處へ行つて薄くなるとか、濃くなるとかいはことではない、日本の日は熱いけれども、亞米利加の日は冷たいといふ理窟は決してない、これが道理ナンである。法華經は道理を説いた經典である、日本の國體は道理を實現したものである、悠久なる天地の理から言つて同系のものである、道理は一つの根で、國や民族はその枝葉のやうなものである、違つた場から同系のものを證明するのは、立證上一段の價値があるといふものだ、即ち日本の國體を、他の國の聖人が説明し證明したのである、「説いた法華經、説かれた日本」と見れば、何でもないことである、日本には立派な國體はあるが、その完全な説きあかしがない、法華經には完全な理法はあらはしてあるが、その實地の見本がない、その實物は日本であるから、これを一具して考へるのが、双方の眞價をあらはす所以である。譬へて言へば、日本國體は玉である、然しそれはまだ磨いて無い璞である。磨かなければ玉は玉でも光らない、光らないでも玉は玉であると言つて、いつまでも磨かずに置いては、珠玉の用を現はすことが出来ない、磨けば必ず光が出る筈の玉は、磨かない内から尊いのである。日

本の國體は、終に法華經の大道理と一致すべき素質を有して、世界の最大至寶であるから、當然この大道國は、この大道理の證明によつて光らねばならぬ。故に磨く必要がある、若し磨いて光らせなければ、玉の効用をなさない。いくらダイヤモンドでも、磨かない石ころの様な物を指環にはめても一向をさまらぬ。日本の國體は即ちその粗玉の如きものである、磨かない玉のやうなものである、これを法華經の一念三千といふ大眞理によつて磨いて、初めて光をあらはすのである。日本國體の心を説いたものが法華經（一念三千）、法華經を形であらしたものが日本、脚本と劇との關係である、いよく磨けばいよく可い。斯くてこそ日本が世界的意義を爲すのである。

(四)

即ち印度に釋迦如來といふ方が出て、法華經といふものを説いて、さうしてその中に斯ういふ日本國體の内容を明かにすべきところの道を傳へて居る。それを、日本民族の血を享けた日蓮聖人が、一面は日本國民として、一面は釋迦如來の弟子として、さうして此の一念三千の妙理の

光で、日本の國體の内容を照らして、茲に初めて函蓋相應して、圓滿の光輝を放つに至つたといふことは、法華經も日本を得てますます光り、日本も法華經を得てますます輝くといふ、ちやうど函と蓋と合つたやうなものである。故に吾等は、公々然として此の法華經の圓融思想といふものを以て、日本の國體を磨き出して、その固有の光をあらはし、さうしてあらゆる世界にもやくして居るところの、朝に起り夕に倒れるやうな片々たる思想もあるし、或はその流毒深きに入つて、蒼生の腸を腐らせるやうな悪思想もいくらかもある、どんな悪思想でも、どんな愚な思想でも、皆この圓融思想の光明を以て照せば、一遍に埒があいて来る。現代はいろいろの悪思想が世の中に蔓つて、民心を攪亂して居る、たいこれに觸れさせまいとし、之を聞かせまいとし、これに難辨をつけて寄せまいとするやうな方法を探つて行つたならば、いつ迄經つても、こつちで防げは向ふへ出て来る、やり様が悪ければ、だんく紛亂を長じて、國民遂に適從するところを知らなくなるに至る。それより一番はやいのは、之を解決する完全な標準を得ることである、歸着する標準さへわかつて居れば、どんなものが出て來ても、立どころに之を解決し了ることが出来る。そこで吾々の主張すると

ころは、今日の此の講演ばかりではない、萬事みな此の圓融思想の充實を圖つて、一切を明斷するのに在る。尊王論に就ても、これ迄の考へが或ひは違つて居たり、或は淺く解したり、又中には尊王を必要としないやうな邪惡の思想もある、さういふものはいづれも皆違つて居る、五十歩百歩である。であるから此の圓融思想の、理義正しく根抵の深い標準によつて、尊王の義を斷じて、どうしてもグラつかない、後戻りをしないやうな尊王心を喚起して、篤く國を護り世を救う木鐸としようといふのである。その功德を以て——これは大正十二年六月十日、今日此處で一時間なり二時間なりお話をし、此處にこれだけの方々がお寄りになつて、これだけの方々の耳に聽いて、これだけの方々の撃節共鳴を得たらそれで濟むといふ譯でない、今日此處で講じたことが、今こゝでお聴きになつた方々が甲より乙に、乙より丙に傳へて、だんく弘まり、或は此の筆記が又世の中に出て、此の『尊王正義』の鼓吹によつて、斯の如き思想の標準を興へたならば、少くも今日の中で紛亂の上に於て、一つの解決の曙光を得ることになる、此の功德は甚だ大きい、此の功德を以て、故殿下の尊靈に御回向をしたいと思います。

(五)

故殿下は所謂平民的といふ事をは極度まで御實行なされた、金枝玉葉の御身を以て、みづから自動車を操縦なされた、かゝる平民的のことをば、御みづから御實行をなさつて、痛はしくもその犠牲とならせられた、その犠牲とならせられたことの裏面には、殿下としてはまことに天晴れなおん振舞ひであつて、これが爲めに奇禍を買はれたのは、平民的御實行の貴い犠牲として、皇室の美風が、長へに民衆を善導し刺激して、吾が特有の皇徳仁風を身を以てお示しになつたものであるが、吾々國民としては、殿下をして此の奇禍に陥れしめ奉つたことに於て、御警護上國民的用意が缺けて居るといふことを考へなければならぬ。此に想ひ到つて、國といふもの、皇室といふもの、國民といふもの、その一切の徹底的諒解を普及して、眞の國家的安心を得なければならぬ。殿下の御奇禍を動機として、國民は大に目覺めなければならぬ。此の意味に於て、殿下の犠牲は甚だ高貴な犠牲である。その高貴な犠牲に奉酬し奉るには、これに應じた深い吾等の反省を以てしなければ、此大損失の埋

合せがつかぬ。

(五)

四十餘年間一日の如くに、身命を國家に捧げて、常に護國の運動に従事した我が國柱會の會員は、今日全國及び海外の各局より皆代表者を出し、又最近に出來た天業青年團も、出來たてのホヤ／＼ではあるけれども、これに参加して、各支部からそれ／＼代表者をば上京せしめて、數日來斯く式場の裝飾なり、或はこれに關するいろ／＼な用務にいそしみ、虔んで殿下の御菩提のために御奉公をしたことは、如何にも尊ぶこととおもふ。この至誠の行ひは、一つは自分の御報恩の修行として、いはあるが、今日新しい一つの意味は、單に自己の修行ばかりでなく、偉大なる報國の感情から發して、全國民になり代つて、國民の當然有つべき至誠を代表した意味から成立つた清淨の弔祭である、然し敢て別に我が同胞の全體から頼まれた譯でもない、又帝室からおさしづがあつたわけでもない、即ち只々吾等の赤心として、やむにやまれぬ至誠の表現として、茲に嚴肅なる



追弔會を以て、一は殿下の英靈を慰し奉り、一は國民を警醒して、國運の上に一步の進境を示したいと思ふからである。どうぞ諸君は、此の講演に就て、深い敬弔の心を籠められて御聴取りあらんことを希望する次第である。

これから揭示してある五節に亘つて講述する、即ち

- 第一 日本 の 君 民
- 第二 護 國 と 尊 王
- 第三 履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし
- 第四 濁亂の世に放つべき光輝
- 第五 世界的覺醒と國民的覺醒

斯く五段に立論する所以は、吾々のいふ尊王觀念が、單なる感情的に立脚したものでなく、根柢の深く理義の正しい主張から出て居るといふことを力説したいからであつて、一面には是れが國體學上の部分講究ともなるのである。

### 第一 日本 の 君 民

(一) 國とはいかななるものぞ

日本の君民！、特に「日本の君民」といふのは、ほかの國と違つた君民關係があるからである、日本は日本の特有の君民關係がある、これを話さんければならぬ。その話の前に、先づ第一その前提として、「國」といふことを話さんければならぬ。

一般に考へられて居る「國」と、此日本の國と同じものであるかどうかといふに、これは大體國の成立が違ふし、随つてその構造も違つて居る。であるから世の中の、たゞ國だとか國家だとかいふ考へを、そつくり持つて來て、日本の國家を解釋することは出来ない。先づ普通に言へば、國といふものは、「領土」即ち土地があつて、そこに居る民族「人民」があつて、これを統治するところの「統治者」がある、民主で統治するとか、君主があつて統治するとかいふ統治者がある、「統治者」と、「領土」と、「人民」と、これだけを具へて、それが國家といへるといふのが先づ一般の國の解

釋である。この三つがあつて初めて國家があるといふならば、日本はそれで解釋して行くと、日本といふ國の成立は、此の三つの算盤では弾き出せない、否、弾き切れない。それで日本の國は、さういふやうな粗雑な、粗製濫造の國と違ふことを、一つ先きに考へなければならぬ。

先づ「くに」といふことを、ちよつと字に就て見ると、「國」ともかき、「田」或は「園」或は「園」或は「園」ともかく、又「國」といふのもある、それから「国」又は「國」ともかく、支那の字は、義や形を以て顯はしたものでから、中々面白いものだ。

○國 田 園 園 …………… (土地に約す)

○國 國 …………… (民族に約す)

○國 国 …………… (統治者に約す)

「くに」といふ字に、こんないろくな字がある。中で□の中に「或」といふ字が書いてある、これが先づ普通だ、「或」といふ字は「域」なりといつて、區域の域と同じことである、「或」として見ても、いくつもあることをいふ、一つでは「或」と言へない、これは、その一つの構への内にいろくのが入

つて居るといふ意味である、さういふ考へは「民」の方につく。それから區劃、境を立てるといふ意味からいふと、これは「土地」につく、それが□の中に「土」の字があつたり、「八方」とあつたり、「八土」とあつたりする、これは同じ義理であるけれども、これではいかぬといつて其の字しか用ひないのである、例へば水戸の光圀といふ人は、必ず此の「園」といふ字でなければ使はない、京都に本園寺といふお寺がある、此の本園寺も「園」でなければ使はない。義理は同じでも、そこに夫々の特徴があるからである。「八土」といふのは、その内にいろくな土地の分界を包含して居ることをいふのである。それから□の内に「民」の字のあるのがある、これは人民の團結を「くに」と名けた意味から來た。それから最後に□の内に「王」の字のあるのがある、これは統治者を以て國をあらはしたものである、次に□の中に「玉」といふやうな字があるけれども實はこれは玉ではない、やはり「王」である、「王」の字に點を打てあるけれども、「玉」といふ字とは點の打ちところが違ふ、「玉」は下に打つてある、これは上に打つてある。この點は賞美點といつて、佛法でいふと、王の功德莊嚴を證明した場合に打つのである、日蓮聖人のお曼荼羅には、「何々天王」とある「王」の字のところに、皆この

點が打つてある、これは功德を成就して果報を表彰した意味で、功德の結晶としてあらはれたものであるといふわけで、此の點が附いて居る。それで此の王の字の「国」といふ字によると、國といふものは一つの君主、即ち統治者があつて、その統治者の領有するところであるといふことになる。それから玉に似た字の「国」の字の義理になると、同じやうな意味だけれども、これは君主が正しい道を布いて、さうして民衆を正義で指導する場所を國とすることになる。

それでは日本はどんな國であるか、これを話すに就ては、先づ國の成立といふことから話さんければならぬ。たゞ茲に一定の場所があつて、そこに一定の人間があるとか、或は外からいろいろなものも寄つて来たとか、とにかく大勢の者が寄つて来た、それが不規則でゴタ／＼して居ては困るから、申し合せて、誰と誰はこちらの方の仲間、誰と誰はこちらの組でないといふことをきめて、さうしてその組の者だけの守る約束をこしらへて、その約束を守つて波風のないやうにしよつちやないかといふ意味から成立して来たといふのが、先づ今日一般にいふ國である。であるから、何のわけで國が出来たといふことはない、わけも何もない、たゞ出来たから出来てしまつた、どの國でも皆な斯ういふ意味

である。それで斯ういふ國は、國そのものに意義がない、出来てしまつてから後には何とも意義が附けられるけれども、國の出来ることに就ての意義がない、たゞ何かなしに、出来たものである。だから今これを判別して、これを「無意義の國」といふ。然らばこれに反して、「何のために此の國をつくり出した」といふ意義のある國があるかといふと、これはあいにく何處にもない、世界にたゞ一つ、「日本」があるきりである。一つでもナンでもある、變つたものがあるのだから、どうしても、世界の國といふものを分けて見ると、無意義にして出来上つた國と、有意義にして出来た國との二つがあると解釋しなければならぬ。これを學問として證據を立てるならば、立派に學問上の證據として

○無意義にして出来た國 (他國)

○有意義にして出来た國 (日本)

と分けて掛らねばならぬ。

(II) 國の二種別

そこで日本の國はこの「有意義の國家」である、一般の國はたゞ集團を名けて國といふのであつて、これは「無意義の國家」である。だから集團の出来ない前は、たゞ蟲か何かゞヨク湧いたと同じで、所謂生物的にたゞ集まつて居る、仍つて其民は「遊牧の民」といつて、たゞ食はずには居られないから、何か兎を捕まへて食ふとか、鳥を捕まへて食ふとかいふことのみをやつて居つた。それも初めは弓矢ぐらゐの道具で、個人的にやつて居つたのが、だんくその遊牧の方法が進歩して來た、いろくな機械も考へだしたり、遊牧の方法にも、一定の制限を置くことを考へたり、追ひく利巧になつて來て、その内にいろくな他の生物のもつて居る特長などを見て考へ出した。例へば極小さいものだけでも、蟻ナンといふものは、頗るかしのもので、人間より先に發達して集團的にやつて居る、人間がまだ集團の心を發しない前から、蟻は一つの仲間を拵へて共同作業をやる、又貯蓄もやる、それを見て人間も集團や貯蓄を考へ出して來た。此集團が仲間喧嘩の種となつて、新しい争闘智識を産んだ、元來一般の生物は、虎は虎同志喰ひ合はない、猫は猫同志喰べない、他の自分より劣つたものを捕まへて食ふ、弱いものを強いものが食ふ、所謂弱肉強食とはなるけ

れども、仲間同志ではやらない。ところが蟻は集團力があるから、仲間同志喧嘩する、戦争をやる、随つてその一方を滅ぼして、その有つて居る財産を奪つて、先の蟻が捕へて來た蚯蚓や何かを、今度は征服した方の蟻が行つてそれを奪つて、村中總出で引ツ張つて來て、自分の仲間を持つて來て貯へるといふやうなことをやる。この集團だとか貯蓄だとかいふやうな事柄を、だんく人間も見習つて來て——まア蟻から教はつたといふ譯でもなからうけれども、先づ「集團性」と「貯蓄性」といふものを發揮して、慾はることをだんく考へ出すやうになつて來た。爾う發達して來ると、茲にまたいろくな約束をしなければならぬから、法律や規則も出て來るやうになる、さうして兎に角まア初めは一種の部落的のものになる。それがだんく進歩して、彼はどうも外から來た奴だから入れまいとか、毛色が違ふから入れまいとかいふので、毛嫌ひをするやうになつて、今度は民族的になつて來る。同じ種類の仲間だけが寄るやうになつて、そこに國家といふものがだんく發達して、遂にそれが今日のやうな工合に國際的にまでなつて、一個の法人的状態のやうなものは、いに進歩して來た。これがまア普通にいふ國家である。即ち無意義の國といふ團體がだんく出來て來て、その内にいろ

く文明といふものがその國家に發生して來たから、此の文明が後から逐ひかけて、種々なる理窟も拵へ、文化政策を布いて、今では打見たところでは立派な國がいくらもあるけれども、其の元の起原を考へて見ると、今の「蟲の集」が發達して、事後承諾的に文明で裝飾した迄のものである。切言すれば「人間の集」である、これが無意義の國で、この國でも皆さうである。如何なる國を見ても、何のために此の國を拵へたといふ先天の意義のある國は一つも無い。

(三) 撰 ば れ た 國

ところが日本だけは、此の國をつくる初めに於て、此の國を撰ぶといふ初めに於て、何の理由によつて撰んだといふ理由が一つある。それは、天照太神が此の國を撰んだといふ記載から起つて、これが日本の歴史の原頭をなすやうになつたのである。此頃西洋人の何とかいふ人が、天照太神は一種の神話の作り物である、それを日本の皇室の先祖だとか、國民の先祖だとか考へて居るといふことは、甚だ蒙昧の至りであるといふやうなことを演説したさうであるが、それは神話の性質を辨へない

謬見である、神話には必ずその民性の理想や特徴が含まれて居るのみならず、傳統的にその祖先の面影も存して居る大切なものである、故にいつれの國にしてもその國のはじまりは皆な神話的のものである。それは何故かといふと、ズツと古い時代のことは、記載がはっきりして居ないから、解らない、解らない間にいろいろな説で固まるから、それが神話的狀態をなしてしまふ。やはり現實のことがちやんとあつたのであるけれども、その記載が明瞭でない、記述が明瞭でなかつたといふことによつて、神話的にコーぼかされてしまったものナンである、けれどもそれがどういふ主意であつたといふところの、中心の精神だけは解つて居る。然らばその中心の精神が、神話的になつて傳はらうとも、お伽噺になつて傳はらうとも、經典になつて傳はらうとも、その中の精神、その中の理義の中心といふものが、吾々の國民性の原頭であるのだから、天照太神が三種の神器を以て瓊瓊杵尊にお授けになつて、此の日本國を撰ばせられたといふことだけは、首尾一貫し、理義整々として世に遺されて、それが日本の建國の初まりとなつて居るのであるから、これが神話であらうが傳説であらうが、決してかまはぬ。吾々國民の血の縁つて起るところはそこに在る、それから出來た國であつて、吾々御先祖から

その意味で代々傳はつて、吾々の民族そのものもそれによつて發達して來たのであるから、これを歴史の原頭とするに於て、聊か差支ないことである。

然らば此の有意義の國はどうして出來たか、又何の爲めに出來たかといふと、それは外でもない、道のために撰ばれたのである、國といふものが出來て、それからあとで道を拵へたのではない、「道」のために、即ち「道」を護り行かうために國を撰んだのだ。然らばその「道」とは何であるか、道とは即ち天地の公道で、人類を一つの正しき筋に攝收する所の「王道」である。「王道」とは、人の勝手な争ひのないことだ、その争ひを無くなすことだ、初めに申した所謂圓融思想、その圓融思想を事實にあらはすものが即ち「王道」である。その實行の機關として國が入用である、此の仕事を行ふ場所として、天照太神が國を探されたところが、日本といふ國が可い、千五百秋の瑞穂國、葦原の中國といふ此の國が可いといふことになつた。名前でわかる、「名は實の實」といひ、「名は體をあらはす」といふから、名から推測することが出来る。天照太神が御覽になつた日本といふものは、「千五百秋の瑞穂國」として映つた、「豊葦原の中國」として映つた、「千五百秋」といふことは、數の永い時

代の意で、即ち永久不變の意味をあらはして居る、「瑞穂」は、「瑞」はめでたいことである、「穂」はさかんなことである、「瑞穂」といふのは、その國が靈氣に富んで、吉祥で、いろいろの物成があつて、さかえて豊かであるといふ、吉祥豊穰の意味を「瑞穂」とあらはしたものだ。又「豊葦原の中國」といふ、「豊」もやはり盛んな「ゆたか」といふこと、「葦原」といふのは繁くさかんなことをいふ、「中津國」といふのは「中和」の意味である。斯の如く中和といふ意味、および吉祥豊穰といふ意味、或は萬古不變、永久といふやうな意味に考へられて解釋なされた、その意味で撰ばれたのが日本である。斯ういふ國であるから、中正の道、中和の道、吉祥豊穰の道、萬古不動の道である所の「王道」を敷き行ふのに尤これが適して居る。

『葦原千五百秋瑞穂國は、是れ吾が子孫の主たるべきの地なり。爾皇孫就いて治すべし。』  
此國に於て、天上の文明たる「王道」を、人間の上に實際に行つて、人類を救うやうに、俺の志を實行しろ、とあつて。

「行けや、實祚の隆まさんと、當に天壤とともに窮りなかるべし。」

と神勅があつて、これで建國の基礎が定つた。即ち天地とともに盡きないといふ、此の道、天地とともに窮りなしといふ、此天津日嗣の位、これは何であるか。たゞ天照太神がさういふことを誇大妄想的に考へになつたのではない、天地とともに朽ちない理由があるから、天地とともに朽ちない、その内容があるからそれを仰しやつたのである。天地とともに朽ちないといふものは何であるか、富も、位も、身も、力も、或る場合には皆な盡きるものである、天地とともに盡きないものは即ち「道」である、天地とともに盡きない、天地のあらん限り朽ちないといふものは、此宇宙の「真理」である、その真理を實行的に意識したものが「道」である。その道を行ひ、道を護るといふ仕事のために建つた天津日嗣の皇統の位は、この意味に於て「天壤無窮」であるといふことを、天照太神が宣らされた。神勅は甚だ簡明にしてほとんど經典的である。

これによつて出来上つた國である、即ち此の「王道」を布かんが爲めに撰ばれた國である、道のために國を撰ばれたのである。そこで此日本がお見立にあつかつて、此國が可いとなつて、天孫瓊瓊杵尊が、天照太神の御手より三種の神器を戴いて、その仕事に取かゝるべくお降りになつた、その目

的内容が、この「王道」である。

この「王道」といふことに就ては、支那でも「王道」といふことをいふ、西洋には「王道」といふことはなく、霸道ばかりであるが、いづれにも眞の王道は傳へられてない。支那では、「王」といふ名はあつても、「王道」といふ實はない、それはたゞ「霸道」へ「王道」といふ名をつけただけのことである。支那では「王道」「霸道」といふ名はあるが、その所謂「王道」は「霸道」に對した王道であつて、纔に霸道を免れた意味の「王道」にすぎない。日本では「王道」といふのは、さういふ不細工のものでない、相對的の意味のものでない、絶對的の意味のものである。そこで吾等はこれに「先天の王道」と「後天の王道」といふ名を命じて居る。日本の王道は、先天の王道である、「先天の學」と古人が稱したそれと同じである。支那の王道は、霸道と相對して、功利専門の低級政治から殆どく一步を免れたといふに過ぎない、人造の意味のものであるから、これは「後天の王道」である。西洋では此場合に宗教的意味を以て代用するが、それは一國建設の特殊の意義を爲さない、先づ全然無いと言つて可い。

(四) 先天の王道

それでは、その「先天の王道」といふのはどんなものであるかといふと、天地の中に自分といふものがある、自分の都合のために、何處から何處までをどうするといふことはない、自分の一切を擲つてしまつて、天地と同化して同體になるといふことが「王道」である、この意味の王道でなければ、先天の王道といふことは出来ない。

支那では、天子が天を祀るといふことがあるが、必ず「郊祀」といつて、天を祀るには野天で祀る、青天井のところで行うのである。それから「廟」といふのは家の内に在るのをいふ。廟とは貌なりといつて「かたち」といふことである、形式Hにちやんと斯ういふ館なら館を拵へて、その内で祭るのを廟といふ、先祖や何かはさうして祭る。天子には、別に自分の先祖といふものがないといふので、天子は直ちに天を以て先祖とするのだといふ、そこで天を祀るには、そんな家の内で祀つて居るより、外で祀らなければならぬといつて、野天で祀る、斯ういふことが、支那の王道を表示したところの、天

子の祭といふ理想であることは、「禮記」にも出て居る。日本では應神天皇以後、儒教がだんくど日本へ入つて來たけれども、神武天皇時分には、さういふことは決してまだ日本へ入つて居らぬ、然るに支那の文物が傳はる前に於て、神武天皇は、鳥見の山に於て「無疇」を立てられて、郊祀の大禮を行はせられた、而してそれは一時の思ひ付でなく、一國施政の根元大法として、甚だ重い意味で行はせられたのである、その時の天皇の勅語に(即位の四年二月)

『吾の皇祖の靈や、天より降鑒して、朕が躬を光助したまふ。今もろくの虜すてに平きて、海内無事なり。以て天神を郊祀して、用て大孝を申ぶべし』

武を收めて文政を布く首めの大仕事として、祖先を祭る、それが郊外たる鳥見の山へ「靈疇」を建て、行はれたのである、「天神を郊祀して用つて大孝を申べん」と仰せられた。今我が天子の位に即いて、此の國を治めるといふことは、これは我の徳ではない、即ち天の神の徳が自分に憑りうつつて、天の神の仕事を行ふのであるから、その根源に御挨拶を申さんければならぬ、さうしてその根源の徳を尊ばなければならぬ。仍つて「天神を郊祀」する、野に於てまつる所の「郊祀」、それは鳥



見の山へ靈囀をお立てになつた。これは支那の書物を見て急に思ひつたものではない、聖徳太子以後のものや、又は大化革新前後のものは、多く支那の風に據つたけれども、神武天皇の御時代にあつたことは、決してさういふことはない、これが即ち「先天の王道」が傳はつてあつた證據だ。神武天皇は、彼の長髓彦御討伐の時、初め東の方へ向いてお攻めになつて敗軍なされた、その時に、三軍に向つて、我は日の神の子孫であるのに、日に向つて戦争をしたから敗れた、今度は日神の威を背に負うて、影に随つて彼等を壓躡つたならば必ず勝つ、我は大いに誤つたといふことを仰せられた。三軍これを承つて「實にも……」といふので、幾何の難關を踏破して、紀州の方から逆まに逆撃して、長髓彦を御討伐になつた。神武天皇に斯ういふ大きな精神的感化といふものがあつたのは、何であるかといふと、我は日の神の裔である、即ち天地と體を一にし徳を同じふするものであるといふ大きな御理想の下に、この公明正大、一點の私のない、所謂「惟天を大と爲す、惟堯之れに則る」と聖人も言はれたやうな、大きな正しいお考へが理想の中心となつて居るから、此敗軍を機として、それを説き示されたのである、これを三軍の者が皆實にもと服して、その大

なる眞理の同化性に共鳴したといふ、如何にも神々しい立派な精神態度に於て、聖徳を表現したものである。

支那の禮では、天子にあらざれば天をまつることは出来ない、諸侯が天をまつるといふことはない、たゞ春秋の中に、魯の一國だけは周公の裔であるといふので、これは天をまつることを認容してあつた、その他の諸侯にはない。たゞ秦の始皇のズツと前の、未だ統一しない前の秦が、五帝の中の白帝をまつつた、(此の白帝とか五帝とかいふのは、皆な天地四方の神のことをいふ)それは僭上であるといふことになつて居る。どうせ秦の始皇のやうな人物が出るくらゐの國だから、可なり僭上暴慢なことをやつたのであつて、正しくは之を認めてない。兎に角天子でなければ天はまつれないことになつて居る。ところが日本では、抑々我は天と一體である、皇祖皇宗の威靈が朕の身に逮んで、朕を佑けられたものである、であるから今此處で天神を郊祀して用つて大孝を申べる。「大孝を申べる」といふのは、天の神は即ち自分の先祖である、先祖に對する孝行を申べるといふことが、政治の源である。「報本反始」、始に反り、本に報いる、これは今の思想などの上からいつたならば正反對

ナンである、今の思想は、先祖のことなどはどうでも可い、過去ッたことはどうでもかまはぬ、自分さへよければ可いといふのが、今日の一般の思想のやうになつて居るけれども、それは家も國も自己もすべて亡び行く思想であつて、破滅を意味する魔見であるから、今日の様に、その思想の洗禮を受けた國々がガタビシして亡びに急ぎつゝあるのである、親や先祖を慕ひ敬つて、その恩徳を追懐し、それに厚くするといふ考へが、これが子孫にも及び、八方にも光のおよんで行く源になるといふことを知らない。これは皆個人主義の崇だ。

祖先を祭るといふ、その祖先が大神であることは、國としてすでに尊貴の至極である。故に自然と祭政ともに天の意から出て、確にその傳ふところの正しい、嫡々相承して天の文化の及んで居る證據である。日蓮聖人も、「日本の天子となるのは天照太神が頭に宿らんければ天子になることが出来ない」といふことを断定されてある。天照太神が頭に宿らんければ、日本の王になることが出来ないといふことは、即ち日本の皇室は、代々此の天照太神より相承して來た王道を延長したものであるといふ意味を斷じたものである。

であるから「王」の字は、三本横の棒を引いて、一本真中に縦に引いてある、この横の三本は天地人の三才である、その天地人の三才をば中央の棒で貫くのが、これが天子である。天子は天の意を以て人に臨んで居る、この天子といふものを通じて、天地人の三才をば一貫して統一することになる。であるから天子の位は、下は民に臨んで、頭には神を戴いて居る、即ち「神人一如」の關係である。

さうすると、此の神と人間とが一つになる機關が天子であるとすれば、モウ一つ之を横に擴げると今度は心と物とが一つになるといふことになつて來る。神人は之を縦に見たのである、今度横に之を見れば、縦に人間と神とが一如して一つになる機關は、その作用を轉じて、今度は横に心と物とが一如するといふ意味になる、それでは圓融ではない。これを圓融の思想から見れば、「神人一如」は、即ち「物心圓融」の前提である。物心圓融であるが故に「天地同體」といふことが立つて來る。吾々が大地を踏んで歩くのでも、誰もうツかりして踏んで歩いて居るけれども、この地代の高い家賃の高い世の中に、天は地代も光りや熱の料金も徴らない、とにかくそれで地主よりも

電氣屋よりも一番餘計厄介になつて居る、その天地だ。斯う考へ來つたならば、別に催促をされな  
いから平氣で居るけれども、其天地は、これはどうしても地主の地代以上のものを拂はんければ濟まぬ  
譯であつて、この太陽の光に對しても、電燈會社以上の料金を拂はんければ濟まぬ譯である。其事  
を考へて見れば、ナニ一つの物でも、皆な自分の尊い資料にあらざる物はない、その天地の恩に感  
謝すると同時に、天地の徳を讚嘆しようといふ考へが起つて來る。その考へが積極的文化となつて、  
萬物を融妙同化するのである。同情のない者は——人間ばかりではない、花にでも月にでも、山にで  
も水にでも如何なるものに對しても同情のない者は、その道を領解することも出來なければ、開發  
することも出來ない。學問でもさうである、同情のない者は、決してその道を得ることは出來ない、  
天文學者は、やはり日月星辰などに對する同情がある、或は生物學の學者であるとか、生理の學  
者であるとかいふ者でも、その自分の學ぶところの對象そのものに深い同情があるから、それが識見透  
徹して遂に天地の靈妙を啓くことが出來る様になるのである。理解でも感情でも、同情の決算であ  
る。詩も藝術も政治も經濟も、すべて同情の結晶でなくてはならぬ。同情が缺けた者は、さういふ

圓解——圓融の解領のあらはれて來るといふことは出來ないものである。

天地法界と同一體であるといふところの、物心融通の道が、この王道からあらはれて來るとすれ  
ば、それが即ち「仁」といふものゝ徹底したものである。この徹底した「仁」が、即ち絶大の同情  
となる。それで日は我と一體である、或は神武天皇が、難戰の時に、その從軍した者が、或る山  
中の大きな樹の中にかくれて敵の襲撃を免れたといふことをお聞きになつて、それは樹であるけれども、  
命を拾つたのであるから、この樹の恩は母のやうなものだといふので、「恩、母の如し」と仰せあつて、  
それへ「母木」といふ名をおつけになつたといふやうな、その絶大の同情は、一切のものを美化し、一  
切のものを惇化して、各々意義あらしむるところの、何物に臨んでもこの惇真なる感化を及ぼし、  
公明なる精神を充たして、一切を善化し美化しなければ熄まないといふ徳が含まれて居る。これを佛  
法では、

「一佛成道して、法界を觀るとき、草木國土悉く皆成佛す」といふ。

一人の佛が覺を開けば、如何なるものでも、人間はもとより、世界中のものが皆な佛に成

ツてしまふ、草木國土でも、皆なその佛の眼から照されば佛に成るといふのは、この道理を言つたものである。

「常に知るべし、身土一念の三千なり、かるが故に成道の時此の本理に稱つて、一身一念法界に遍し。」

と妙樂大師も言つた、この「徹底仁」、「徹底同情」の心が、一切の萬物におよぶ時に、その萬物は皆なその處を得る、それが成佛である。詩人が月に對し、花に對して深い同情を持つた時、その月や花はその詩人の思想を通じて、天地の靈妙を發揮する。科學者が一切の物象に對して深遠なる學問の力を加へるとき、あらゆるものが、皆な頑冥のものまでが物を言ふやうになり、歩くやうになるといふ、例へはこの電氣の發明であるとか、汽車の發明であるとかいふやうなことも、皆な天地萬物に對する理智的同情のあらはれてある。

天地同體物心圓融の大明心を出發點として起つた王道が本で、日本の國は建てられた、その「先天の王道」それが此國の内容である。先天の王道といふことは、後から作つた王道でない。

天と共にあらはれたといふ程の王道であつて、その王道のために撰ばれ、そのために組織づけられた國であるから、徒の國とは全然成立が違つて居る。然し撰ばれただけでは、まだ本當の國家といふことは成さないが、神武天皇が初めて天孫瓊杵尊以來廣大なる天上の文化を擴張することに於て、いよく處を大和にお求めになつて、さうして茲に紀元元年辛酉、即位の大禮を行はせられた時から、完全に組織された國家といふものは始まるのである。

(五) 日本立國の五大要素

であるから此の日本國の創立の完き體系といふものは、以上申したやうな主意であつて、無意義の、たゞ集團から出來上つたものでないから、日本の國家は、領土と統治權と人民の三つだけではどうしても勘定が出來きらない。そこで日本の完き體系はといふと、左の五つの要素から出來て居ることを知らねばならぬ、此うちのどの一つでも缺いたら、日本といふ國は、金輪際解らないことになる、即ち

〔神〕 眞理の自然發動 〔能撰の神〕 (眞理)

〔道〕 眞理の構成的發動 〔神の心〕 (正義)

〔國〕 正義實行の依地 〔所撰の地〕 (物と力)

〔君〕 繼承的代表綜合機關 〔統治の主〕 (中心)

〔民〕 擴充的代表分業機關 〔天業民族〕 (體形)

先づ「神」と、それから「道」と、「國」と、「君」と、「民」と、此の五つの要素があつて、初めてそれが日本の國家といふことになる。であるから、日本の國家を論ずるに、その御先祖の「神」といふものを閉却することは出来ない、神といふと、基督教の神様や佛教でいふ神様といふものは、何か幽幻的奇怪な、別のものになつて居るけれども、茲でいふ「神」とはさういふものではない、即ち此國の撰び主で、此國の統治者の御先祖のことである。即ち完全に道を體して、人類に臨むところの實行的先覺者をいふのであつて、即ち眞理を代表するところの開導者である、その「神」の心、即

ち「眞理」が構成せられて發動して來たのを「道」といふ、「道」は即ち「正義」である。それからその正義を行ふのには「物」の力が要るから、食物とか武器とか、いろいろの物質的材料が具はらなければ、完全に王道を布くことが出来ない、そこで其等を産出し供給する所の「國」といふものが要る、實行機關として「國」が要る、それが前に言つた「神人一如」が同時に「物心圓融」といふまでに行つて、「物」の方まで「心」の作用が及んで行くといふ道理が茲に在る。「正義」の實行機關として茲に物質を攝取する、山川草木あり、鐵もあり、金銀もあり、米もあり麥もあり、種々様々なものがある、さういふ物質的力用を收め整へて、これが道の力になり、道の護りとなり遂行力となる、それが物の成佛である。

山岳河海はいふに及ばず、金石草木、みな夫々の用がある、それ等を道の用とする所に物心圓融の妙がある、故に國土の力は、直ちに道の力と成り得る。金銀銅鐵が要れば地から採る、鹽が要れば海から採る、金銀や銅が文化の具となり、鐵や火藥が武器となりして、あらゆる物質が正義護持の用をなして行くといふときに於て、初めて「國」が正義の運用機關となる。即ち「神」の心

の「道」を傳へて、それを行ふ立脚地の場所が「國」であるから、道を大事とすると共に、國が同じ意味で大事のものとなつて来る、だから、一徒の國と違ふといふのである。それから今度はそれを繼承して行くものが無ければならぬ、その仕事を綜合して行くものが無ければならぬ、それが「君」である、それが「帝室」である、それから此の仕事（「神」の心、「道」の正義）これを行つて往々に付て、その事業を分擔して行く者がなければならぬ、それが「民」である。それで「帝室」はその道を神から傳へて繼續して今日に及んで、永久にその大柄を握つて居るところの繼承的代表者である。「國民」は之をそれとに分けて行つて往かなければならぬ、これは擴充性を持つたものである、この「道」に對する擴充的代表者である。さうして此の道を廣く永く宇内に及ぼして、人類をして咸な齊しくこの正義（真理の門戸）に入らしめるといふことが、日本の建てられた仕事の根源であるから、その目的を達するために、人民は分業的に此「道」を保護し長養恢弘し宣揚してゆかなければならぬ。

そこで「神」は即ち「真理」、「道」は即ち「正義」、それから「國」は「物と力」である、それから「君主」は即ちその仕事の「中軸」「中心」であり、「國民」はその「體形」である。

斯ういふ工合な五つの關係があつて、これが内面一つになつて居るのが日本の國家である、これを譬へて見ると芝居のやうなものである。一番手ツ取り早く話すと、斯ういふことになる。

神 (作者)

道 (脚本)

國 (舞臺)

君 (座主、興行主、舞臺監督)

民 (優人)

先づ、芝居には戯曲の筋がなければならぬ、それを拵へる者が「作者」である、それは即ち「神」である、それから作者が書いた戯曲の「脚本」が「道」である。それからそれを行ふところの「舞臺」がなければ芝居は出来ない、それが「國」である。この舞臺の中には劇場もあれば、大道具小道具も衣裳も皆な含んで居る、一切がなければ出来ない、どんな名優でも野原で一人て裸で眼を剝いて見たところ仕方がない。それからこれが出来る上ると、此の舞臺を監督して行く「舞臺監督」といふものが無

ければならぬ、作者の心をつぎ、脚本の意を失はないやうに、さうしてその事柄をヨリ良く表はすといふ最善の方法を執つて、進んでその役者共を監督して行く者がなければならぬ、それが「舞臺監督」で、それが「君」である、日本の帝室は、座主たり興行主たる上に、舞臺監督を兼ねて居るのである。さてこれだけ揃つても、いよく舞臺を開けて芝居をやる者がなければならぬ、作者があつて、脚本があつて、舞臺があつて、舞臺監督があつても、幕が開いた、舞臺がいつ迄も空っぽで居つては仕方がない、「優人」がそこで眼を剝いて何かやらなければならぬ、それが「國民」である。斯ういふ五つの關係は、どうしても此の中のどれを一つ閑却することも出来ない。

日本の國といふものは、斯ういふ關係によつて成つて居る。而かもその五つが有機的統一の意味で成立して居る。であるから日本は、國といふものを舉げれば全部が「君」である、又國といふものを舉げれば全部が「民」である、舉國これ君、舉國これ民といふ性質になる。その中間にものではない、君と民のほかにものはない。あればそれは例へば貴族なら貴族といふものがあるけれども、それはちやうど肉といふと贅肉の様なものである、あつても大して邪魔にもならないけれども、併ながら瘤も額の眞

中にあつたり、頬ペタにあつたりしたら可なり邪魔だ、どツか蔭の方や背中にもあれば、敢て邪魔にならない、又これはあつても可いこともある、「出世瘤」ナンといふ瘤がある。貴族の如きは、これは帝室に對する由緒とか、それから何か國家に對する特殊な勳功のあつた者とかいふやうな意味合のものを、少數存して置くことはかまはない。けれども「貴族」といふ名前は、私は一體よくないとおもふ、「貴族」といふと、「貴」は「貴賤」と對して、一方に「賤族」といふものがあることになり、どうも此の日本の國民は非常に大切な貴いものナンだから、「賤しい」といふやうな意味の言葉は斷じていけない、これは反國體的の稱呼であつて、中古の誤つた政治時代の置土産であるから、よろしく撤廢すべきである、それから、「平民」といふ言葉もいけない、これは一つ議會か政府にでも注文して、あの「平」の字を除いて貫はうとおもつて居る、「平民」といふのは、「太平」の「平」ではない、あれは「平凡」の「平」だ、オヘラ平凡の意味の「平」だから甚だよろしくない。國體上この尊い吾々國民をつかまへて、天子様の片棒を擔いで行かうといふ國民に、「平凡の民」ナンといふ名をつけたのは、怪しからんことだとおもふ。議會の「貴族院」「衆議院」といふ、對稱も

面白くない、或る人が「上院」「下院」とか、「第一院」「第二院」とかしたら可からうと言ったが、それも妙でない、予はこれに「東院」「西院」とか、「南院」「北院」とかいふ名をつけたら可からうとおもふ。であるから今のやうに、餘りに貴族がどツさりあるといふことは考へ物だ、それは瘤が澤山あり過ぎるやうなもので困る。帝室のおん別れとか、藤原氏とか、やんごとなき舊家名族ぐらゐにとめて、新しい勳功は勳位などで賞することが出来るから、餘り多くの世襲貴族を造らない様にしたとおもふ。貴族を皇室の藩屏なぞと稱へたことは、國體に目覺めない夜迷言である、皇室の唯一の藩屏は國民でなくてはならぬ。

それから金持といふもの、此の金持といふものが今のところ或る方面から大變邪魔にされて居る。あまり澤山金を持つと、ときどき安田善次郎君のやうな目に遭ふが、吾々の様な一文なしは安全だが、世の中に金持が尊敬されないで、ひとく呪はれる様な風があるといふことは、要するにとちらにも缺陷があるので、畢竟「國」といふものが、どちらにも克く理解されて居ないのである、即ち國體の諒解が社會に行亘つて居ないから生じた社會的缺陷である。殺すものも悪いが、又殺される金持

の方も良くないこともある。此の間も「朝日新聞」に出て居つたが、或る富豪が大變な財産があつて、それに税を出すのが惜しいといふので、保全社を拵へた、保全社を拵へれば税が課からない、その保全社は、一定の期限を置いて金を積み立て、それから後に社會事業をやるとかいふので、内務省へ願つて許可を得たといふ、併しそれがどうも本當らしくないやうな話であるから、天業民報社へ調査を頼んで置いたが、その出願の期限といふのが、何でも「三千五百年」といふので、それを内務大臣が許可したと記してあつて、而かもその大臣の名まで出て居たが、その金額は二千萬圓だといふ、それを三千五百年間は据置で、三千五百年後の、三千五百一年目から、社會事業に使用はうという意味で許可を得たのだといふ。これを勘定して見ると、まあ私共は算盤が疎い方で、なかく面倒でわからないが、先づ十の上が百で、百の上が千で、千の上が萬だから、一萬、十萬、百萬、千萬……「億」まではよく知つて居るが、それから先は十億、百億、千億、萬億、それが、一兆、その上が「京」とか「秭」とか「垓」とかで、ずつと上が「極」といふのだそうだ、ところでこの二千萬圓の三千五百年後の元利積立が何極とかいふ數で、その金を勘定するだけでも、人間



幾代か、ツても出来ないといふ大數になるといふ。それが脱税のためだと書いてあつたが、嘘らしい話であるが、然し世の富豪の中には、かういふ心のものが數多くあるのは事實だといふ。何と情けない根性ではないか。これは世の中の無産階級の怨みを買うばかりではない、第一にこの國體に背反した大邪見である。こんなはかくしいことをやつて、さうして脱税をはかるといふやうな事柄は、どうも小説的だとしても、富豪の心理を諷刺した矢張一種の皮肉てがなあらう。若しもこれが事實ならばよほど變なものであるから、只一種の諷刺と見て、今度國性文藝會の劇のときに、『三千五百年』といふ狂言を拵へようとおもつて今考へて居る。

さういふやうな事柄から、一般無産階級が、富豪に對して反感を懐くに至るといふのは、一應尤もなことである、無産階級の反抗心もよくないけれども、多くは富豪それ自身がつまりさういふ禍を招くのである。富豪といふものは、みづから造つたのでなくとも、親から貰つたとか、ひとりてに殖えたとはいつて、自然に有して居る富を、まさか焼いてしまふ譯にも行かないから、已を得ず富豪になつて居るとか、又は一代に大成金になつて、金を持つて居るとかいふ人々は、先づ富といふものゝ

性質を考へなければならぬ、これは金を持つた人の觀念のしようである。つまりこれは國家の富を管理して居るので、即ち國の餘裕を代表して持つて居るのである。所謂「國の力」である、國の力は即ち「道の力」であることを考へたら、義理にもその富を國家のためにするやうに使つて行かねばならぬ。學問であるとか、慈善であるとか、美術だとか、工藝だとかいふものゝ發達は、富豪が一切自己の責任として負擔するといふことになれば、働く者はどんく働いて、その力で國を持ち、學問藝術等の事業は、富豪によつて發達して行き、相俱に美しく國家を經營して行くことが出来る。富は即ち國家の餘裕であつて、自分の餘裕ぢやない、國家の餘裕を、自分が代表して持つて居るのだと考へれば、いくら金があつても、聊かも邪魔にならない、さうして其富には光りがあることになる。要するに道を離れては、人も金も力もないといふのが、日本の成立である。

それから官僚だとか、閥族だとかいふもの、軍閥だとか何閥だとかいつて、大層悪く言ふが、これもサウ悪く言ふほどのことはない。これは事業の上にはどうしても「閥」をつくる必要がある、たゞ今はそれを事業の上でなく、個人的に人間の私の上にその閥を移して來るから、軍閥だとか何閥だとか

いふことが可くないといふことになる。政黨もやはりさうである、政黨も一つの「閥」だ、これが眞面目に、國家をおもふといふ上から、政治の意見を同じふする者が寄つて居るといふならば可いけれども、さうでなくして、その集團の力を利用して、これを私しようといふことになる、この瘤もあまり大きくなると困る。

斯ういふ工合に、政黨だとか、富豪だとか、閥族だとか、或は貴族だとかいふものが、矩を踏えて跋扈したものであるから、大事な國の根本の成立たる君と民の間を隔て、終に意義の止しい善良なる接觸を缺いてしまつた爲めに、民はたゞ奴隷の如くになつてしまひ、君はたゞ九重の雲深く閉ぢこめて、拜めば眼が潰れるといつたやうなあんはいに隔て、しまつて、民意は上に通ぜず、君意は下に通じないやうな形になつて、國家が病的状態に悩む様になつたのである。そうして時々發作的に尊王論が出ると、それが又變態心理的に迸發する、故に何か事件があると、高山彦九郎式の間が出て來て、慷慨悲歌の連中であらば勤王は出來ないやうな、はかくしいことになつてしまつて、尊王思想を特殊の意味に扱ふ様な、けしからん考が世にわだかまつて居る、慨はしいことだ。

大體此の尊王だとか勤王だとかいふ思想は、發作的でなくて、一般的でなければならぬ、即ち國民のすべてが勤王家であり尊王論者でなくてはならぬ筈なのに、それが特別的の意味になつて、「あの人は勤王家だ」「あの人は尊王論者だ」といふやうなことを言ふのは、實にをかしい話である。以上述べた様に、君も民も、悉く一つ道の上に融攝して、その現はれが「國家」となつて居る、その國家は直ちに「道の結晶」であるといふのが、日本の國の成立であるから、先づこの國の成立をわきまへて掛らねばならぬ。

(六) 君民一道と君民一德

君も民も、ひとしく道の爲めに終始する國體であるから、その「君民一道」の結果が、「君民一德」となつて、此の國家の光輝を成して來る、それは最後の目的たる人類濟度である、道義的世界統一である。その出發は、道を護るとからはじまる、故に明治天皇は

「斯の道は實に我が皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の俱に遵守すべき所、之を古今に通じて

謬らず、之を中外に施して悖らず、朕爾臣民と俱に拳々服膺して成其の徳を一にせんこと  
多庶幾ふ。』

と仰せられた、即ち「斯の道」である。斯の道は皇祖皇宗の遺訓であるから、朕も守る、朕の子孫も守る、人民も守る、他に道はない、此の一つの道を成して守るのである、同じく守るのである。爾臣民と俱に拳々服膺して、成その徳を一にしようぢやないかと仰せられた。行ふときに「道」といひ、得るときに「徳」といふ、これが國家の目的である、はたらきてある。そのはたらきは、此の五つの國家の要素が統一し圓融して居るところに存して居る。此の一揆の體の中から此の妙活のはたらきが出て来る。所謂「先天的同致の君民」である。即ち吾々の先祖が「先天の民」で、帝室は「先天の君」である。

(七) 君民一致の史的根據

その先天の王道を握つて世に立つた先天の君と、先天の民の歴史的事實はどうあるかといふと、

これは日本では空想でなく、ちゃんと神典に記載してある。その譯は、天神が此日本へ天孫を派遣なさるのに、二通りお降しになつてある、一方は瓊瓊杵尊をお降しになつて居る、一方は饒速日命をお降しになつて居る。これは古來別に何とも深く考へられて居ないやうであるが、どうもこの二通りの天孫を御派遣になつたといふことは、何か理由のあることのやうに思ふ。一方瓊瓊杵尊の方は、三種の神器を傳へて日向にお降りになつた、饒速日命の方は、十種の神寶といつて十通りの寶を傳へて大和にお降りになつた。天下を統御する爲めの御派遣といふわけならば、統御者を二通り出すといふ筈はない、天に二日無してある。そこでこれは何の理由で、天孫が斯う二方に分けられたかといふことを、深く考へて見なければならぬ。

瓊瓊杵尊の方は、日向の方へお降りになつて、後にその御子孫の神武天皇が大和へお出でになつて、天下を統一なさることになつた。饒速日命の方は大和へお降りになつた。この方は十種の神寶を奉持して、さうして從屬の神様として三十二柱の神をお伴れになつた。その神々を見ると、種々の職務や從屬がある。天祖の御子正哉吾勝々速日天押穗耳尊が、高皇產靈の神の子、思兼ノ神

の妹 栲幡千千姫ノ命を妃として生けたまへる御子饒速日ノ尊、此神を降したまふ時に授けられたる十種の神寶を天璽端實と申して十品ある、それは「贏都鏡」「邊津鏡」「八握劍」「生玉」「死返玉」「足玉」「道返玉」「蛇比禮」「蜂比禮」「品物比禮」の十種である。古來これを鎮魂歸神の根據として、一種の迷信的に解釋して居たことだが、予の考へては、此十種はすべて國用民物の重なるもので、民の産業を表したものと思ふ。これに就ての「布留」の神詞の如きも、單に禁厭式のものばかりでなく、悉く寓意表現の神文だともう、その「一二三四五六七八九十」と唱へることは、事物の提要は十の滿數に約する義で、境界で「十界」、法則で「十如是」といふのと同じ意匠のものであるから、その「ユラ／＼トフルへ」といふことも「フルへ」は周遍運用の義、「ユラ／＼」は活動進行の義で、圓融理義の表示であらうとおもふ、「如此爲之者死人反生矣」とは、これにいふ煩惱即菩提婆娑即寂光の道理で、「妙」を蘇生の義と釋したの同意匠で、彼のユラ／＼と振へは、これにいふ「十如是の三轉」と意義相通するものであらう、死者の屍を十如是を讀んで撫で、身體の硬直を治する風習などは、この神典と相類した仕來りて、大に味ふべき點

だと考へるのである。

そこで此十種の神寶は、一方神武天皇の傳來したまへる三種の神寶と相對して、國土經營天業光揚の根本意義を爲したものであることを考察すれば、日本君民のふたつながら先天的使命に基ける尊貴の傳來だといふことがわかる（此事に就ては、予嘗て一篇の論文を草して、この研究を世に問はうと考へて居たが、思ふ所ありて、これを建國史劇の戯曲に作り、近日世に發表しようと思へて居る）

扱てかく天神が此日本に天業を扶殖するに就て降された從屬の神々は

- 天ノ香語山ノ命
- 天ノ鈿賣ノ命
- 天ノ太玉ノ命
- 天ノ兒屋根ノ命
- 天ノ櫛玉ノ命
- 尾張ノ連等ノ祖
- 猿女ノ君等ノ祖
- 忌部ノ首等ノ祖
- 中臣ノ連等ノ祖
- 鴨縣主等ノ祖

天、道根、命  
天、神玉、命  
天、樅野、命  
天、糠戶、命  
天、明玉、命  
天、牟良雲、命  
天、神立、命  
天、御蔭、命  
天、造日女、命  
天、世手、命  
天、斗麻彌、命  
天、背男、命

川瀬、造等、祖  
三島縣主等、祖  
中跡、直等、祖  
鏡作、連等、祖  
玉作、連等、祖  
度會神主等、祖  
山背、久我、直等、祖  
凡河内、直等、祖  
阿曇、連等、祖  
久我、直等、祖  
額田部、湯坐、連等、祖  
尾張、中島、海部、直等、祖

天、玉櫛彦、命  
天、湯津彦、命  
天、神魂、命  
天、三降、命  
天、日神、命  
天、乳速日、命  
天、八坂彦、命  
天、伊佐布魂、命  
天、伊岐志邇保、命  
天、活玉、命  
天、少彦根、命  
天、事湯彦、命

間人、連等、祖  
安藝、國、造等、祖  
葛野、鴨、縣主等、祖  
豐國、宇佐、國、造等、祖  
對馬、縣主等、祖  
廣瀨、神麻績、連等、祖  
伊勢、神麻績、連等、祖  
倭文、連等、祖  
山代、國、造等、祖  
新田部、直等、祖  
鳥取、連等、祖  
取尾、連等、祖

八意思兼神ノ兒天ノ表春ノ命

信乃ノ阿智ノ祝部等ノ祖

天ノ下春ノ命「八意思兼神ノ兒」

武藏ノ秩父ノ國ノ造等ノ祖

天ノ月神ノ命

壹岐ノ縣主等ノ祖

副ニ五部ノ人「爲レ從天降供奉」

物部ノ造等ノ祖天津麻良。

笠縫部等ノ祖天曾蘇。

爲奈部等ノ祖天津赤占。

十市部ノ首等ノ祖富富侶。

筑紫ノ弦田ノ物部等祖天津赤星。

五部ノ造爲ニ伴領一率ニ天物部ニ天降供奉。

二田ノ造。

大庭ノ造。

舍人ノ造。

勇蘇ノ造。

坂戸ノ造。

天物部等二十五部ノ人。同帶ニ兵仗ニ天降供奉。

二田ノ物部。

當麻ノ物部。

芹田ノ物部。

鳥見ノ物部。

横田ノ物部。

島戸ノ物部。

浮田ノ物部。

巷宜ノ物部。

足田ノ物部。

酒人ノ物部。

田尻ノ物部。

赤間ノ物部。

久米ノ物部。

狭竹ノ物部。

大豆ノ物部。

肩野ノ物部。

羽束ノ物部。

尋津ノ物部。

布都留ノ物部。

住跡ノ物部。

讃岐ノ三野ノ物部。

相槻ノ物部。

筑紫ノ間ノ物部。

播磨ノ物部。

筑紫ノ贄田ノ物部。

船長同共率ニ領梶取等ニ天降供奉。

船長跡部ノ首等ノ祖天津羽原。

梶取阿刀造等祖天麻良。

船子倭鍛師等ノ祖天津眞浦。

笠縫等ノ祖天津麻占。

曾々笠縫等ノ祖天津赤麻良。

爲奈部ノ祖天津赤星。

此の三十二神といふのは、どういふ神であるかといふと、いろくな仕事をする神である、仕事をする方の御先祖である、それが三十二人の神様があつて、方々へ散らばつてそれらの仕事をやつて居る。これは何の意味であるかといふと、此の天孫の事業を分擔して、文化の開發をするといふために、饒速日命をお降しになつた、さうして天孫從屬の分布を圖つて、文化の發展を謀られたものである。そこで後に此の饒速日命のお子様は、神武天皇が國務大臣になつた時に、此の後裔をば「物部氏」といふ姓を賜はつた、物部大連などといふのがある、あの物部氏である、「物部」といふのは「物」だ、「民物」だ、即ち事業である。瓊瓊杵尊の方は、天下を治めるところの「道」を以て立ち、饒速日命の方は即ち民業を開發するために天から降されたから「物部」だ、即ち物的負擔奉仕の意味である。そこで神武天皇が、日向から大和へお出でになつたといふことに就いても、これは此の「先天の民」の先祖が大和へすてに降つて居る、さうしてモ一吾が仕事(即ち天業)の下地をつくつて居るから、そこへ行つた方が早いといふので、日向から大和へお出でになつた、即ち「先天の君」が「先天の民」と合すべきためにお出でになつた。さうして此の道を以て世界を統一する天業の

第一歩を踏み出したのが、「神武天皇の東征」である。

そこで吾々臣民は、即ち天孫の御事業を分擔することに於て、其の片棒を擔ふといふことに於て、事業として服従しなければならぬから、今度は從屬的に名けた「民」といふ名前が、事業的の「臣」といふ名前になつて、「君臣」の關係といふことになる。これは事業化したものである。從屬的にいへば、帝室は吾々の「親」であり、事業的にいへば、帝室は吾々の「主人」であり、文化の開發の上からいへば、帝室は吾々の「師匠」である。此の「主師親」の三つ、主人なり、師匠なり、親なりの三つが、即ち吾々國民の帝室に於ける關係である。

それから神武天皇の方の從屬には、「大伴氏」であるとか、「久米氏」であるとかいふ姓が出来た。「久米」は歸順の義である。「大伴」はやはり「お伴」の義で、伴屬の義である。「物部」は今申す物的奉仕の義である。斯ういふものが集まつて、これが天子の御事業を輔佐するといふことになつた。別して此饒速日命の方の天降つた主意は、斯ういふ物の開發に在るから、平時でも戦時でも、文武二道の政治のため、いよくといふ時には、兵事動員でも、工業動員でも行ふ、即ち總動員

を行つて、國家の仕事に貢献するといふ國家的準備にあたられたのが、饒速日命であつて、これは「先天の民」の基礎を示現されたものである。

(八) 先天の民命

吾々のいふ「民」といふものは、斯ういふ意味から來て居る、根源由緒の明確な正しいものであつて決して途中からフワク湧いて來たものでない。であるから「天壤無窮」と仰せられた天照太神の御言葉は、百鍊碓鏝を経た争ふべからざる事實の上に於て、「皇統連綿」となつて、その偽りでないことを證據立て、來る。即ち天壤無窮の道あるが故に、「皇統連綿」なのである。偶然の出來事では斷々乎としてない、こゝを考へなければならぬ。「天壤無窮」といふことを背景としない「皇統連綿」は日本の皇統連綿ではない、某學者が水戸の某所での演説に、萬世一系と言つても、過去は證し得るが、未來は受合へまいとか言つたといふ語を耳にしたが、「天壤無窮」を一桁忘れたから、そんな事を思想するのである、氣の毒の人たちだ。



凡そ世界中、日本の如き皇統連綿の事實を有して居る國はどこにもない。まア英吉利であるとか、最近では伊太利であるとか、其他いろいろ君主國もあるけれども、その今の王統を考へれば、英吉利は僅に二百年ぐらゐの王統だ、或は六十年ぐらゐのもあれば、中には十年ぐらゐのものもある。何百年何千年といふ舊い王統は一軒もない、その間に何度もく變つたり、いろいろな興廢起伏があつて、纔に命脈を保つて居るといふ状態である。中にはとても保ちきれなくなつて、最近には獨逸や露西亞や、支那のやうな、覆滅を來したこともある、つまり瓜の種はどこ迄も瓜である。それは天壤無窮といふ道から出たのでないから、當りまへだ。若しも是等の國々と比べて、日本が皇統の長い久しいといふだけをして、國體を立稱しようとするものがあれば、それは明かに國體を汚瀆したものである、長い短いといふことは、相対的比較であつて、不變の眞理ではない、日本の皇統連綿は、長短を超越した絶對連綿である。即ち「天壤無窮」の大道から發するから、眞の「皇統連綿」といふことがあらはれて來るのである。

そこで西洋諸國の如き、或は支那の如きは、元とく建國に意義がない、無意義の國は、即ち寄り集りの國であるから、別にこれといふ代表がない、故に當然民主主義でなければいけない、それへ君を立てるといふことが一體不自然ナンである。切り取り強盜の仕上げたのでなければ、押ツ付け仕事の委員的君主に過ぎない、不自然を含んだ後天的君主である。然るに日本では君民ともに先天の約束由緒より成立つて居るから、君と民との關係といふものは一身同體である、君の尊い通りに、民も尊いのである。仍つて皇室では昔しより人民を稱して、

「元 元」

といひ、又は

「大 御 寶」

といつて居る。物の元である、大きな寶である。これを或る博士が、「人民のことを大御寶などといふのは、人間を何か器物の如く道具扱ひにしたものであつて、不都合な言葉である」と言つた人があるけれども、「寶」といふことは、尊いから「寶」といふので、「器物」といふ意味ではない。「佛様」や「法」や「僧」を佛法では「三寶」と言つて居るが、これは決して道具扱ひにしたのではない。畢竟國民

といふものは、國家の事業使命にとって大切な尊いものであるといふことを、皇室から珍重的意味で「寶」と言はれたのである。

(九) 四海一家の實現

日本の君民組織は、世界統一の理想に立脚したもので、即ち四海一家の見本である。宇内の終局は、必ず遂にかういふ玄妙なる文化の下にあつまつて來るに相違ない。宇内統一といふことは、世界が却つて日本に向つて要求をするところの聲である。日本は道を以て世界を統一するのである、干戈を以て世界を統一し、人の國を掠奪するといふ意味のことは、神武天皇の昔から會つて無いことである。神武天皇は、即位の劈頭に於て、王道の本領目的を提唱なされて、「八紘一宇」といはれ、又「六合一都」と仰せられた、これは侵略の意味でなく、道義感化的意味で申されたのである、即ち

八 紘 一 宇

(人類的統一)

六 合 一 都

(社會的統一)

この大目的を地上に建設するための國家であり皇統である。世界を一つにするといふ神武天皇の思召は、「道」によつてすることであるから「八紘一宇」、世界を一軒の家としようといふのは、これは徳に就て「人類的」に言つたものである、「六合一都」といふのは政治に就て「社會的」に仰せられたことである。「都」といふのは、すべくよるのであつて、世の中の仕事を一つにまとめることである。これは皆な神武天皇のお言葉であつて、その次に此國の精神を明かされて「養正」と仰せられ、「道」を以て世界を一つにするといふことで、又御代々の洪猷を指して、「重暉」といはれ、「積慶」といはれてある、即ちこの「積慶」「重暉」「養正」は、日本建國の三大綱として拙者が常に絶叫宣傳する所の、神武天皇の勅宣で、日本國といふもの、唯一の説りである。「正」「暉」「慶」の三綱は國の體で、「養」「重」「積」の三要是國の用である。「正」「暉」「慶」の三綱は國の「體」(本體)であつて、「正我」と文化」と「道徳」の三つである、これが目的で出來た國なのである。それを長養し擴大し累積して、ひろく世界人類のすべてに普及徹底しよう

とて出来た國なのである、故に「養」「重」「積」の三要は國の「用」(使命力用)である、こんな立派な理由で出来た國は何處にもない。尤もヤタラ無いのが本當だ、世界を通じて一つだけあれば可いのである、世界の唯一の必要を荷つて、日本といふ國が一つあるのである。左に圖して示すと

- ▲積慶 (徳義に對する積極的實行)
- ▲重暉 (文化に對する積極的普及)
- ▲養正 (眞理に對する積極的護持)



かういふ正々堂々たる立國の大綱から出發した國であつて、皇室は其事業の元締、國民はその仕事事の分擔責任者であることを知て、天職の重く且つ貴いことを自覺しなければならぬ。

(十) 「あきつのとなめ」は世界統一の瑞語

神武天皇が國見ヶ丘に於て、國の姿を御覽になり、蜻蛉の譬を甜めて居る貌であるといふので、「蜻蛉の譬甜せるが如し」と仰せられた。これを古來何だかどんぼの形をして居る國だといふことに考へて、「あきつしま」は形状から取つた名といつて居る様だが、予の思案する所によると、爾うでないと思ふ、この前のお言葉に「内木綿の眞込國と雖」といふ語があつて、狭い國だけれどもとある、然し形がいかにも妙だと仰せられて、その形状の寓する意味を理想なされたのである、即ちこの「蜻蛉の譬甜」といふことは、頭と尻と一つになる形を指したので、とんぼといふものは、よく譬をなめて、頭と尻と圓くなつて居るものであるから、その形状に比して、今に本と末と一つになるぞといふ意味を祝ひこめたまひ、「本末究竟等」して世界が一つになるといふことを仰せられたものであると考へる。

即ち世界統一の壽詞であらうと思ふ、そこで予は曾てこの事を考へ定めた時、紀念に試みた腰折が一つあるから、それを披路して置く、無論歌にはなるまいが、只志をいふまでである。

蜻蛉聲甜

となめせる蜻蛉を見てもおもふかな

本末終に一つ世なりと

以上は即ち、此の日本の君民といふものは、粗製濫造的の意味の君民でない、斯ういふ深重な意義があり、正確な根據のあるものであるといふことを基礎として、眞の尊王觀を確立して行かねばならぬいふことを論證したのである。

## 第二 護國と尊王

### (一) 正しき護國の意義

以上の所論で、大體、日本の君民關係といふものは、さういふ根の深い、意義の正しい組織によつて成つて居るもので、帝室と人民との間柄といふものは、切つても切れない、深い尊貴な關係があるものだといふことが略ぼ解つたことと思ふ、そこで斯ういふ堅固な土臺の上に築いた尊王思想でなければならぬといふことを是れから一步進んで論じようと思ふ。

吾々は税を納める、徴兵にも出る、或は帝國議會に議員をも送る、斯様なことは、國民が寄つて國を護るの意味であるに相違ないが、今日一般の考へて居るところでは、是等は皆自分等の安心のために護るのだといふ風に、安賣勘定をして居るやうであるが、吾々の見る所からいふと、國を護るといふのは、そんな浅い意味からではないのである。

即ち此の日本といふ國は、元々世界を救濟するところの、高貴なる目的によつて建てられた國で

ある。その國の主人たり、その國の負擔者たる、帝室なり國民なりは、實に此の國に對しては、深重な意義を有つたものであるから、此の國を護るといふことは、其の目的を遂行する意味に於て、それを護る必要があるのである。であるから、「護國」は即ち「護道」で道をまもるのである。而して「道」に就て大切な所の「人」をも護る、この「人」といふ中には、「君」も「民」も含んで居るから、同時に人をもまもるの意味である。道と人と人法相對していふ時、人の中でも、その中心となるものは「君」であつて、「民」は其君の中に攝在されて護られるのであるから、「尊王」の必要がこゝに生じて来る、故に護國の最も大切な意義は、「尊王」といふことを通じての「護國」でなければならぬ。たゞ借りて居る地面の地代を拂ふといふやうな意味の「護國」ではいけない、「尊王」といふ意義をなさない護國は、眞の「護國」にならぬ。依て「護國」と「尊王」との関係を考えることが、本論の必須條件となつて来る。

(二) 尊王と勤王との別

其の前に、世の中によく「勤王」といふことを言ふが、「尊王」と「勤王」とはどう違ふか、これも少し話して置かなければならぬ。

「尊王」は即「勤王」である、「勤王」であるが故に「尊王」であるには違ひないが、茲で私に分けて言ふと、此の「尊王」といふことは、順理的である、理にしたがつていふ、随つて絶対的である、「勤王」といふのは仕事につく、これは所作的である、随つて相對的である。或る場合に、或る特殊な仕事をしたといふことを、「勤王」といふ、例へば楠木正成なり、名和長年なりが、君の御召出によつて、その戦亂の眞只中に出て、帝室を保護し奉るといふ特別の仕事をしたといふ、それ等を勤王の義戦を起したといふ。併し今茲でいふ「尊王」といふのは、さういふ、變事があつたら出て行つて働くといふ意味でない、部分的のものでない、國民の全體を通じて、寝ても覺めても、始終そのことを考へて、それが自分の頭の一つの主人になつて、我が精神、生命になるといふほどの意義での「尊王」でなければならぬ。であるから、「尊王」は即ち國民性に通じて、普遍的に名けたものである、尊王であれば、何時でも事があれば勤王といふことが出来る、併し此の「勤王」といふ方は、ことに

よると臭いがある、時に皇室の爲めにどうとかいふことを言つて、皇室を笠に着て何かやるやうな者が、昔から無いこともない。それで慷慨悲歌の士には、多く勤王家といふものがあるけれども、それが時あつて何か事件がないと、稀釋されてしまつて忘れるといふことがあるやうな傾向も無いではない、そんな頼母しくない思想は取れない。「尊王」といふ精神は、造次顛沛にも、吾々の皇室に對する根本的概念が、自分の血になつて漲つて居るといふ、非常な高貴なものだ。勤王は或は一時的部分的でも有り得るが、尊王は永久的全部的のものである。且つ根本的徹底的に國民の心識とも氣習ともなつて居る所の國民精神でなくてはならぬ。

(三) 尊王論の基準

そこで此の尊王に就いては、國學者や歴史家が古來お手の物のやうに、さかんに稱道論議して居るが、其の可い議論は皆な可いのであつて、それを非難はしないのだが、それが日本の國家組織といふものゝ根本に就ての考へが、そこまで往つて居るか否か疑問である、不幸にして日本國體の

淵源から發した、理義正しい尊王論でなく、單に感情的に走つた慷慨悲歌級の頭から割出したものが多い様に思ふ、要するに國體に對する深解を缺いたといふことが、いろくのたゞりを爲して、國論を紛亂し、民性を荒化するに至つたのであるから、深く國を念ふものは、第一こゝに留意しなければならぬと思ふ。國學者流の尊王論も、やゝ感情的な點が多くて、基準が堂々として居ないものもあるが、又茲に近時西洋思想を輸入して、さかんに日本の文物の改造をはかつて功あるといふ福澤論吉翁の「尊王論」を見ると、根本の基準を取り外づして居ることが書いてある。然しその所論は、一時紛亂した世論に對して、惑ひなき様に指導を與へようといふ極めて穩健な、而かも親切丁寧な所論で、後に來る者をして突飛な背本思想を起させまいと力めた點は、流石に福澤論吉翁であると、深く此の福澤翁の精神には感謝を捧げる次第であるが、その論據のあまりに淺近にして、今一メスといふところを缺て居るのを遺憾とするものである。

そこで翁の書かれた「帝室論」なり「尊王論」なりを見ると、斯ういふ事を言つて居る、「何が故に帝室は尊いか、何故にさう帝室を尊はんければならぬかといふことの理由を、古來誰も説明したも

のがない、たゞ帝室なるが故に尊い、尊いが故に尊いといふやうな議論であるが、理由を明かにしないといふと、此の理窟の多い世の中だから、後戻りをするといかぬから、そこで其の理由を説明する」と名乗って、立派に説明をして呉れた。翁の議論はどんな事かといふと、それは即ち「尙古懷舊」といふ意義である、舊いものには價値がつくといふ、此の尙古懷舊の情から、我が國民は帝室を尊はなければならぬといふ意見である、即ち「世界中で日本の帝室ほど舊いものはない、舊いから尊い、道具のやうなものでも、時代がついて舊くなれば、それが理由があらうがあるまいが、舊いといふ意味に於て尊重する、一幅の畫に何千兩、茶入一つに何萬兩といふ金を出したとかいふことは、その舊い意味に於て尊重するのである、或は勝れて大きな樹なぞも、たゞ舊いといふ意味に於て、樹が大きくなると注連などを張って人が大事にする、此の人情、この舊いものを大事にするといふ人情、これが吾々國民の皇室を大事にする所以で、一口にいへば、我が所有欲的に誇り尊はんければならぬのである」……翁は斯ういふことを理由として、尊王を奨励されて居る。

それからモー一つは、「今に社會の組織がいろいろ面倒になつて來ると、政治のことはかりては治まらぬことになる。そこで日本の人情風俗からいつて、古來尊王思想といふものがあるのだから、萬一の場合の葛藤や面倒やさういふやうな事柄、政治の力でいかないこと、政黨などのゴタ／＼が起つて始末にいけないことは、帝室の力で緩和することが出来るから、帝室は尊ばねばならぬ」といふやうなことを、翁は言つて居る、まア一口に言ふと、其の政治上に於ける面倒葛藤の避難所として、帝室をそれに擬したのである。

右の論斷に對して、予はその論據の基準が違つて居るといふことを述べねばならぬ。「舊いから尊い」といふやうな意味ならば、それはたゞく舊かつたから尊いといふに過ぎない、日本の帝室が今まで兎にも角にも二千何百年……「兎にも角にも」といふやうな名前がついて、さうして舊くなつたからといふその舊くなつたといふことを基礎として尊ぶといふことは、その論據が甚だ空疎で淺薄であると思ふ。舊い新しいの議論でない、萬古を超絶し、國境を超越して、常住不變の眞理に立脚した建國であることに於て、吾々は之を徹底的に尊ばねばならず、吾々はさて措いて、世界各國の人類が、皆な、あらゆる自分等の持ち傳へて居る多少の文化を差控へても、一齊に渴仰して、皆な

此の日本の皇室を奉戴して、日本の根本文化に渴仰讚歎を捧げなければならぬのである。「舊いから」と言はずに「正しいから」と言はねばならぬ。又「民論の避難所」といふ意味での尊皇條件も頗る感心しない。畢竟民意は君意から出發しなければならぬ、民論はすべて王道から出て居らねばならぬ、これも標準が違つて居る、但し翁が「尊王論」を書いた、その精神は甚だ諒とするが、この不徹底な標準で、貴い尊皇論をかう安價に換算されては實に困る。

それから次に、最近東京の市長になられた永田秀次郎君の「平易なる皇室論」、これも此の間取寄せて一應拜見したが、まことによく行き届いた、極めて常識的な、萬人が異存のないやうに書かれてある結構な書であるが、大要福澤翁の所見と同じく、一切に常識を主とされたところが、この書の眞價の存する處であつて、永田君みづから斷つて、『宗教的に解釋してはいかぬ』といふことを言つて居る。勿論それも一理であるが、予は又むしろ大に宗教的に解釋し、且つ宗教的に尊皇意識を高調させねばならぬと思ふ、そこが論據の岐れ目である。或は爾うであるかどうかは知らないが、此の永田君が曾て警保局長をして居るときに、當時予の發行して居つた「國柱新聞」を、安

寧秩序を害するの意味を以て發賣禁止をやつたことがある。それはどういふ譯かといふと、予の筆ではないが、記事中的一節に

『皇統連綿萬世一系といふことが日本の皇室の尊いところであるといふことを皆な言ふけれども、決してそればかりで尊いのではない、それ以上に尊いものがある』

といふ意味の記事に就て、後藤内務大臣や水野次官、又永田局長が見て決した譯ではあるまいが、何れ下役の近眼の人か何か、前後を通讀しないで、皇統連綿を非認した者とても早合點して行つたのだらうけれども、「國柱新聞」を秩序紊亂の名の下に、内務大臣は發賣禁止を命じたのである。役人たちの解釋といふものは不思議なものである。皇統連綿萬世一系を行つたりとのみ考へて居てはならぬ、その奥に日本國體の尊い要素があるといふ議論を、秩序紊亂だと言つて發賣禁止をした、いかにもをかしい事だ。吾々の主張は、世のすべての淺解者流を警醒して、皇統連綿萬世一系の由つて甚く所を覺知させようといふので、根元なしに只萬世一系とばかりでは、所謂偶然論に墮ちるから、爾うでない、是れには其の然る所以の大原因があるといふことを指示して、必然的結



果としての萬世一系なることを説くのである、それがどうして秩序紊亂であらう、此内務省の解釋で行けば、偶然論でなければ秩序が保てないといふことになる。事は過ぎ去ったが、不審は今猶存して居る、日本の官僚が、こんな淺薄な考を以て國政を執つて居るなら、それこそ秩序紊亂の甚しきものである。

第一に奇怪千萬なことは、自分をはじめ我が一門同志の人々が、四十年來一日の如く、身命を國家に捧げ、巨多の私財を投じて、晝夜不斷の宣傳經營に没頭して、曾て一介の官爵支給をも國から受けて、一意専心常に此の國體の正義を普及し、帝室の尊嚴を命懸けになつて世に唱導鼓吹して居る、此獻身護國の大主張が、事にもよれ、秩序紊亂の名に於て、その機關紙が發賣禁止の厄を受けるとは、世にこの位の矛盾はあるまい、例を古今に求めたら、昔し孔子が陽虎に背て居るといふので賊と間違へられたのと、東西一對の大喜劇とも言はうか。世には随分と不思議な事があるものだ。

そこで、あまり變な事だから、早速内務省へ出掛けて往て文句を言つた、さうして『よく前後を讀んで見るが可い』といつてやつた、それから讀んで見ると、『成程それもさうだ』といふことになつた。『それでは發賣禁止を取消したらどうだ』といつたところが、『どうも役所として一遍やつてしまつたら取消せない』『何故取消せない?』『どうも政府の仕事だから、一遍やつたことは取消すわけにいかない』『いくら政府だつて、神さまでないから、間違がないとは言はれまい、若し間違ひがあつたら改めるといふことは差支ないぢやないか、それを取消せないといふなら、裁判を起すことは出来ないか』『裁判を起しても駄目だ、行政裁判所で取上げない』といふ。行政裁判所で取上げない、取消せといつても取消さないとすれば、それは政府は過ちを犯しても過ちきりて、國民に向つてさういふだらしない間違をして、尙ほ非を文ツて剛情を張るといふやうな結果になつて、甚だ人心感化の上にも面白くない、間違ならば間違で、これは役人がうツかりして間違へたとか、つい居睡りをして居ても讀み損つたとか、要するに此の國柱新聞の發賣禁止は間違ひであつたから取消す、斯う言つたら可いぢやないか、別に何も謝罪らなくても可い、謝り證文を取らうといふ譯ではない、取消さへしたら可い、だから取消したらよからう、こちらは發賣禁止をやられたに就て、いくらか金の損害もしたのだが、ナ

二もそのことで苦情を言ふ譯ではないが、政府がそれでは済むまい、さういふ過ちを犯して、至誠を以て國に捧げて居る人を、己れ等の讀み違ひのために、さういふけしからん難くせをつけたといふことは、ゆゑしき國政上の失態である、實に政府として済まぬことであるから、その過ちを改めて取消したらよからう、斯ういふ意味でかけ合つたけれども、『どうも同情はするけれども取消す譯にはいかない』といふ話で果てしが無い。『それでは己むを得ないから、内務大臣のしたことは間違つて居るといふことを、堂々と論辯するが可いか』『それは宜しい』『それぢややらう』といふので、仕方がないから内務大臣に對して、數十回に亘つてその取消處分の不都合といふことを述べた、それも發賣禁止をされるかとおもつたら、それはされなかつた。その時の警保局長が今の永田君だ。それは永田君が見たんぢやない、永田君の部下が見たんぢやない、とにかく警保局長だから、文句は永田君のところへ言ひに行つた、社員一人を警保局へ出頭させて、談判をしたら、その時に永田君が

「成程さう言はれて見るとさうだ、これはツイどうも澤山のものも閱覽するのだからうツかり見たんだが、精神はお説の通り、高遠な立脚地から發して居るといふことは、よく解つた。しかし、

それはさうだけれども、さういふやうにあまり高尚に深く宗教的に解釋するといふことは、吾々には賛成しない。」

といふ意味の事を言はれたさうだ。これが永田君の意見だとすると、それはかねての主張であるか、或ひはこの發賣禁止事件から急に思ひ立たれたのかは知らんが、その後間もなく書かれたのが、この「平易なる皇室論」である。讀んで見ると、果して吾々を教訓して蒙を啓いてやらうといふやうな所論も見える、それは餘り高遠な解釋を用ひてはならぬ、即ち宗教的に皇室を解するのはいかぬといふことが言はれてある、其點が不幸にして吾々と意見の異なる所であつて、尊王論の基準に於て、確かに一桁の相違がある。

然しそれは爾うとして、とにかく永田君の皇室論を讀んで見ると、その議論の決着は、日本人は日本の皇室であるから尊ぶのである、他の國のことには關係がない、縦しそれが間違つて居ようともかまはない、價値が有る無にかゝらず、國民としては一番尊ぶべきものであるから尊ぶのだから、それで可い、斯ういふのが先づ議論の骨子となつて居る。それから其理由としては、やはり福澤翁と

同じことに、崇敬の中心といふことを土臺として居る、即ち感情本位である。理由はどうか知らない、知らないが、國民の感情といふ上に於て、帝室敬ふといふ考へが、日本民性の感情上に於て動かすべからざる傳統的感情であるから、それを傳へて行かなければならぬ、これが美風である。斯ういふ意味で、中心を茲に取るといつて居る、福澤翁の方は、避難所といふ意味にしてある。さうして特に宗教的解釋を用ゐるといふことはいけない、即ち常識本位でなければいかぬといふことを言はれて居る。

先づその宗教的解釋を非とする一條を除いては、永田君の此の『平易なる尊王論』は吾々が満足し難いものであるに拘らず、穩健平易にして所論剴切を極め、眞摯篤實なる、國民の好指針として、此の書物は普及して可いとおもふ。少くとも今日永田君の啓發によつて尊王に對するところの平らかなる思想を、國民に普及することは確かに出來るとおもふから、予は大いにこれに敬意を拂ふに躊躇しない。但この平易なる思想の上に、モー一捻しめて置く必要のあることを切言する。單に國民の感情に憑へてといふだけで、たゞ國民的の感情で我帝室は尊いものである、吾々のために

尊いのであるといふだけで押して行ては、萬古不動の道理とか、或は國境を超越した偉大なる、力ある眞理とかいふことにはならぬ、『お前の方はお前の方、こちらはこつちだけだ』といふ理窟になつてしまふ。此の意味に就ては、永田君にはちよつと濟まないが、もウ一桁を越えて、こゝに堂々と宗教的意義を以て解釋すべきことを主張せなければならぬ、即ち宗教的意義によらない尊王思想は、必ず「無因有果の邪見」に陥るものであるといふことを斷言する。『とにかく皇統連綿、萬世一系だ、二千五百何十年續いて居る、舊い』どうして舊い？』どうしてだか知らん、舊いから舊い、であるから尊い』といふことや、他はどうでも、日本人に取つては、これが感情的情操であるからといふ様な浮いた觀念の上に立つことは、基礎が甚だ脆弱である。さういふ皇統連綿、萬世一系といふものなら、取引所で相場を立てたならば、これは偶然の結果に過ぎないことになつてしまふ。『イヤくさうでない、御代々の天子が皆な徳政を行はれた』……それは何處の國だつて、徳政を行はれた天子はいくらもある、徳政を行つたから、それによつて人民が感服したといふくらゐのことであつたならば、若し徳政を行はれない天子が其の間に出たら、差引勘定どうする。日本の皇室とい

ふものはそんなものぢやない、徳政を行つたから……行はないから……さういふことによつて帝室の威嚴の尊重を進退するものぢやない、これは國の組織の上に於て、不拔の根據があつて、さうなるのである。であるから、皇統連綿、萬世一系を偶然の結果に押つけて、單に國民の感情の上に翹へて、「我が佛、尊し」とおもつて居る感情があるからといふので、それを煽り立て、ただそれだけできめて置かうといふならば、その感情を滅却するいろくな思想があらはれて來たならば、それは忽ち壞れてしまふ、危険千萬なものである。深遠なる意味に於ての尊王思想をば、等閑に附して、斯ういふ常識本位、感情本位のみのもので、尊王思想を普及しやうとすれば、此の應接に違あらざるところのいろく思想が、混亂状態を呈して居る世の中に在つては、危険此の上もないことであるとおもふ。此の際に在つては、一切を正直に露骨に大膽に徹底的に、無理でなく誇張でなく、深いものを深いと云ひ、高から高いと言つて、世界の闇冥を照らして人類に光明を與へなければならぬ、國史の命するところ、その通りに書いてあるのだから、その通り正直に、「道のために建てられた國」即ち「先天の王道を以て建てた國」であると、立派に日本の歴史が吾々に教へて居るから、その歴

史の通りに解釋をして、さうして世に臨むならば、此の堅固明快なる確乎不拔なる道理によつて建てられた日本の國家、その建國の上からあらはれて來るところの餘光として、二千五百年はおろか、實に天地と與に悠久窮りなきところの寶祚は、天地が無くなつたらいざ知らず、天地のあらん限りは、道と俱に存在を同じふして行くといふ意味に於て、此の日本の帝室の尊いことがわかる、その帝室によつて建てられた國であるから、その國は尊い、その事業を分擔するところの國民であるから、その國民は、帝室の尊いと同じく尊い、而してその建國の使命が、世界的平和のためであることに於て、日本國の存在が世界のためにも大事なものである。斯ういふことになるのである。然らば振り返つて、我が國民の天職使命如何と考へれば、斯ういふ撰ばれたる民、撰ばれたる國、斯の如き立派な目的を以て立つたものは、世界人類に向つて即ち一つの模範民族であるといふことの大責任を感じ、この大主張の下に立つて、我國の文化もそれにつれて進んで行つたならば、強きに阿り弱きを侮り、自分さへ好ければ他はどうでも可いといふやうな卑劣な根性や、外國人をごまかして金を儲けるナンといふ不都合な人間は、悉く底を拂つて無くなつてしまふのである。ところ

が、此の國體の自覺がないといふと、政治をする人も、法律をやる人も、教育をやる人も、商賣をする人も、誰もみんな目の前の慾ばかり考へて、自分の周囲を取り巻いて居るところに、自分の頭を中心たるところの此の「國」といふものを忘れてしまつて、さうして自己の僅かなる淺はかなる私利私益のために役々として、詐りを行ひ、利を貪るといふやうな卑むべき淺薄な考へばかり蔓つて、さまのな

い劣等國になつて了う、かゝる不祥な國情を醸した原因は、即ち此國體の自覺を失つたからである。此の意味に於て、予は宗教的意義を以て、建國の大精神を解釋して、國民に深い大きい自覺を與へて置かなければならぬといふを公々然と主張するのである。元來日本の建國が、高尚な意義を深遠の意義から來て居るといふのは、宗教的意義で解釋するのである。その宗教的意義の解釋によつてあらはれた尊王思想は、即ち國民の信仰的精神として、國民性を成立して來る。信仰といふものは、念佛でも題目でも、信する人が命懸けになつて信する、あゝいふ工合に確乎不拔な自分の心の指導標準となつて行くのであるから、國民精神はこゝに土臺を置かなければならぬ。そこで「平易なる皇室論」も尊王論の地ならしとしては必要であるが、しかし其の上にならぬ。其の平易なる皇室論を

充ててしまつた以上にならぬ、モウ一段昇つて深遠なる皇室論を一つ考へて戴かなければならぬ。凡そ事物は因果の法則に外れたものはない、斯ういふ原因があるから斯ういふ結果がある、皇統連綿、萬世一系といふことは結果である、その結果に原因のないといふことはない、原因なしでたゞ漠然と舊いといふことは、それは「無因有果」である、「因果撥無の邪見」である、種子が無いのに物の生える氣づかひはないのであるから、



即ち「道」といふものが土臺となつて建てられた帝室であるから、道の永久なるが如く皇祚も永久であるといふ、この正しい因果の律によつて成立するといふことは、常識の上から見たつて、ナニも常識はづれの狂人論といふ譯ではない。常識以上にあつて、さうして振り返つてその常識を潤ほすところの、常識のために滋養分となるところの立派な甘露味であるといふことを考へて、永田君に今一步を進めて戴きたいとおもふ。そこで此の筆記が印刷されたら、永田市長のところに之を贈つて、先生の「平易なる皇室論」のお禮を述べて、邦家のため更に一考して貰つて、此の深遠なる皇室論の方へ一つ改宗して貰ふことを、永田君にお勧めしようとおもつて居る。

(四) 宗教的解釋に依りて得る世界的價值

そこで全體「真理」といふものは包容性を有つて居る、「正義」も亦包容性を有つて居らなければならぬ。真理は如何なるものでも隔てない、「眞如界の中には生佛(衆生と佛)神と人といふ如きもの(の假名を絶し、平等慧の中には自他の行相なし)といつて、一切のものを統融するのが、「眞

理」である、その眞理を構成的に、組立て、吾々の行ふものとして仕立てたのが「正義」である。であるから「正義」といふものは「眞理」の出店のやうなものである、然らば此の「正義」にも包容性がなければならぬ。しかしながら、「眞理」は無條件の包容性があるけれども、「正義」は無條件で包容はしない、善いものは善い、悪いものは悪いとして、よなげるものはよなげ、こなすものはこなしてから包容するのが「正義」である。日本國體の構成は即ち「正義」である、かるが故に一切の萬物を統融して、皆これを統へるけれども、その儘では用ひない。「仁義」といふ教は支那から來た、けれども日本の國體を瀟過してよなければ使はない。「忠孝」といふことも大體支那から唱へられて居る、けれども日本の固有の忠孝性は、支那の忠孝性をその儘用ひない、即ち日本國體の消化液を加へて、消化させて用ひたから、この國體的忠孝の如きものが發揮したのである。佛教でもやはりさうで、佛教も印度から發して支那を経て日本へ來たけれども、日本の國體の消化液を瀟過してあらはれた、醇化され、精製された佛教は、日蓮聖人の所謂「日本の佛教」と言はれた佛教となつた、「日本の佛教」といふことを言はれたのは、「支那の佛教」といふものがあり、「天

竺の佛敎』といふものがあることを豫想してかゝつたものである。天竺の佛敎といふのは何であるか。即ち龍樹、天親の敎の如きものである、支那の佛敎といふは何であるか、即ち天台、禪宗の如きものである。日本の佛敎といふのは、即ち日本の國體を輔佐相扶の關係を以て立つた敎である、日本の國體と表裏の關係を以て、切つても切れないうりに出來上つた敎が日本の佛敎である。であるから眞の正味の佛敎は日本から出て、却つて西の國をば照すといふことを、日蓮聖人が豫言されてある、それは包容性である。先づ例へば天竺の敎であるとか、支那の敎であるとかいふものを、日本へ來てみな包容してしまつた。

日本には、日本固有の文化といふものが別に一つある。けれどもこそくした文化といふものは無い。伊勢の太神宮を見ても知れる、檜の白木で造つたところの社殿は、太古からあの通りで、あれは太古の文化がその儘存して居るのである、別にあれには鐵も銅も使つてない、金箔も塗つてない、陶器煉瓦も使つてなければ何もない、たゞ檜を持つて來てきれいに削つて、さうして極々清潔に質素なものを拵へてある、あれが太古の日本の文化が今その儘に存して居るのである。今の美術眼を以

てあれを見て何といふ、あれを低級なる藝術と考へるであらうか。いつぞや獨逸のコツボ博士が行つて、伊勢の宗廟を拜んで、『世界に超勝した立派な藝術である』といつて非常におどろかれた。日本人の癖として、西洋人がおどろくと、きつと後から尾馬に附いてやはりおどろく。けれどもおどろいたのは西洋人であつて、おどろかしたのは日本だ。その昔からある、あの伊勢の太神宮の質素なるところの宮殿、それがナンと二十年目二十年目にあれを新しく改造するといふに至つて、その日本の文化の如何にも精製されたものであつて、如何にも高潔な立派なものであつて、さうして氣前のいゝものであつて、生氣の横溢したものであるといふことは、世界のどんなものを持つて來たつて追つかない。二十年目に新しくするといふ恒例を千歳の今日まで履んで、あの太神宮の社殿がちゃんと日本の文明の氣高さを語つて居るといふが如きに至つては、實に日本固有の超勝した文化が茲に在ることを考へなければならぬ、しかし式も形狀も甚だ簡單である、簡單であると同時に簡潔である。此の簡單、簡潔といふことは何を意味して居るかといふと、即ち「醇化」といふことを意味して居る、一切の物を簡潔明淨にするといふはたらしきを有つて居る。

ところで一體が世界の文明といふものはすべて簡單でない、複雑して居る、複雑なものほど進歩するのである。生物でも、單細胞のものは進歩がおそい、複細胞のものはいろいろ進化が速い。それと同じことで、世界の文化といふものは、文化が向上すればするほど複雑のものである、その複雑な文明といふものに臨んで、之を處分し、統融し、さうして裁斷を下して行くといふものは、やはり同じく複雑であつたらうすることも出来ない。であるから、複雑といふものが被告人であるから、これを裁斷する方の裁判役は簡單でなければならぬ。しかしながら、其の簡單たるや、「原始的簡單」ではいけない、「根本的簡單」でなければならぬ。そこで之を「醇要主義」といふ。日蓮聖人も「日蓮は廣略の中に於ては要が中の要を取る」と言はれた、其の要である、物のかなめてである。それは一體日本の固有文化はこの「要」といふことに在る、これが日本の特有の文化である、他のいろいろ複雑の文化は從屬である、從屬の文化は日本にはない、それは方々で出來たのが日本へみな寄つて來る、さうして日本にこなされて人間の最後の用を整へる、それは寄つて來る理由がある。何故ならば、氣候から言つても、地位から言つても、老舗から言つても、日本は世界の一番中心だから、どうしても此處に聚まらざるを得ない。

今世界各国を通じて、あらゆる國の文化が怨ツこなしに聚まつて居るのは日本であらう。まあ吾々はじめ諸君の生活の上から考へて見ても、ちよつと斯うやつて使つて居る此の扇は支那の扇だ。戶外へ出るとき冠る帽子は西洋のものだ、着物は日本で織つたものも着る、洋服も着る、家にしても西洋間があり日本間がある。支那の文化もあれば、印度の文化もある。近々に至ては西洋の文明もある、かく埃及、印度、希臘、羅馬、三韓のいろいろの文明も、直接又は間接に聚り來て、みないゝあんばいに、さうして之を消化して居る。この位あらゆる人種の文明、あらゆる國の文物が怨みツこなく寄つた、博覽會みたいな國は、何處へ行つても無い。西洋人は此の頃、時々日本人の眞似をする様だけども、併ながらまた箸を持つて物を食ふことは出來ない、フォークを持つて斯うやつて突ついて食ふ、あれは獸が爪でつかんで物を喰ふ形をあらはしたものである。凡そ文化の程度を測るには、一番大事な人間の、一番大事な食物の道具から調べて見るのが一番はやい、日本人は箸ではさんで物を食べる、これはどうも狼やお猿には眞似が出來ない、斯ういふ微



妙な道具を以て、殊に芋の煮ころがしなどを此二本の箸ではさんで食ふなどといふ手際に至っては、實にどうも世界無比の藝術といつて可い。それから西洋人は足へ足形の袋をはめて之を靴など名づけて居るが、日本人は下駄といふものを拵へて、妙なからくりのやうなことをして、その上に乗って指の股へ之をはめて藝術的に歩くといふやうなあんばいである。いかにも器用なものだ、こゝに日本人の特がある、これは一切の事物を使ひこなす能力の表示である。

この能力は何を意味して居るかといふと、いろいろな國の文化を埒をあげるやうに、日本人の天性が器用に出来て居るのである。だから日本人は眞似が上手だ、模倣性に富んで居る、よく「日本人は猿の人眞似ばかりする」といふが、成程よく眞似をする、けれども此の眞似が上手だといふことは、或る意味に於ては物をつくり出すより以上の能力がなければ、眞似るといふことは出来るものでない。何故ならば、造る者は自分のものだけ造つて、他のことは知らない、自分の造るだけの物を上手に造るといふだけの力で済むが、眞似るものはいろいろの物を諒解し分解し再造する所の器用な頭がなければならぬ。これが即ちあらゆるものを包容するといふ「綜合能力」である。即ち正義の

包容性、批判性を代表したものである。いつれの國の文化でも包容する、佛教も包容力がある、日本國體も包容力がある、互に包容してその眞にかなふのが、即眞理であり正義たる所以である、即ち包容したものを又今度そっくり上から包容する。高山樗牛が或る時斯ういふを言つた、「日蓮は世界よりも大なり……世界中より日蓮一人の方が大きい……その日蓮を産める日本は實に世界よりも大なり」と、これは確かに至言である。天竺でも支那でも西洋でも、あらゆる文明を持つて來て消化するといふところに、日本が世界の一切の人文を統一する力がある。

一體世界統一といつても、他人の領土を奪つて來る統一といふことは日本では考へない。それは一體厄介なことだ、朝鮮や臺灣や滿洲だけのあれツばかりのものでさへ、可なり厄介だ。世界の大局から見て、平和の保證のために、あれをこつちへ押へて置かんといかんから押へただけでも、此の國からいふと、あんな面倒なものや脊負ひこむ必要はない。今の日本だけはいかにも斯う形よく出來て居るから、これ、嚙り取つて持つて行かれては困るけれども、外にあるものを徒らにほしがらる理由は少しもない。彼等に領土の慾があるならば、我等は即ち世界人類の胸臆の内を領土とすれば可

い。世界人類の精神を一つにして、宇内を一家としようといふ大きな統融性が、日本の統一主義である。それは何であるか、人間の思想の糧たる文化を統一する、この世界の文化を統一することによつて、世界の人心が一に歸する。であるから英吉利人は英吉利に居る、佛蘭西人は佛蘭西に居る、亞米利加人は亞米利加に居つて、さうしてワシントンに奉ずるなり、ロイドジョージを拜むなり、ナポレオンを戴くなり、それは向ふの勝手である、さうしてその精神の内容に此の正義が満ちて、皆な日本の建國と同じ意味になつてしまへば、世界中争ひなさいといつて奨勵をして、懸賞で争ひを募つても、誰も争はなくなつてしまふ。その時に日本の光は人の精神界を通じて、世界を維れ一つの國とする、それが八紘一宇、六合一都の神武天皇の思召である。

そこで佛教が印度の教であるから、日本固有の道と相容れないと言つて、偏狭なる國學者などがむやみに悪く言ふけれども、日本の本當の理想から見れば、印度でも支那でも西洋でもかまはない、世界中の文化はみな日本の用に立つやうに出来た文化である。それは、日本といふ國は、今言ふ通り、世界中の人類を救済して、その文化を始末づけてやらうといふ、醇要の光を以て、お

のくをして其の意義あらしめようといふ天職を有つた國々だから、何處の國の文化でも皆な差支なく受け入れるのである。それを、これは外國の教だからいかんといつて反撥するといふやうな、むかし偏狭なことがあつて、今以て其の傳習が脱けないて、儒者だの神道者が佛教を排斥するが、それと同じ様に、むやみに西洋の思想をも悪く言ふ。けれども西洋の思想が日本に来て、日本の思想界を攪亂したといふのは、それは西洋の思想の罪ではない、日本人がさういふいろくな複雑な文化にぶつかつて、これを同化するだけの準備のない内に、無茶苦茶に鵜呑にしたから、日本の思想界を亂したので、これは西洋思想そのもの、罪でなくして、日本人の周章てた罪である。佛教には本地垂迹の説があつて、あたまで以て、何とかの大明神は其の本地は觀世音菩薩だとか、大日如来だとかやつてしまふ、これは、佛敎家が、日本の神様を己れの勝手な方へ引寄せた狡猾手段だなどといふけれども、さういふ風に解釋してはいけない。日本の何々の神様が佛敎の何々の佛であるといつて、敎國の一如を示したのは、日本の包容性と佛敎の包容性との感應の具合を事實にしたもので、而かもそれが條理整然たる佛敎の理義を通じて、佛敎と國體との一致を道破したものであつ

て、佛教の大きいことをこれて考へなければいけない。吾々は耶蘇教を拒む、それは彼れにこの包容性を缺いて居ること、日本の包容性に同化され得ない特質のある點があるからである、それは耶蘇教それ自身が、排斥さるべき要素をもつて居るのである、佛教からいへば、法華勸請の「基督尊天」があつて可く、日本からいへば、「天ノ霧洲戸ノ命」があつても、聊か差支がないのである。佛教の本地垂迹論は實に大きいものである。それよりも大きくして、又一層精妙を極めたものが日蓮聖人の「三大秘法」である。この三大秘法のことをつぶさに話すことは、時間が大變かゝるか、今はその三大秘法といふものは法華經の原理からあらはれて、さうして日本の國體を照すべく、三つの備へをなしたものであり、併せて徹底的に世界文明を統一する組織的教旨であるといふことを簡単に話して置く。三大秘法とは即ち

- 本門の本尊 (綜合的世界統一觀)
- 本門の戒壇 (中心的世界統一觀)
- 本門の題目 (個性的世界統一觀)

といふ、日蓮聖人が法華經によつてあらはした三つの綱目で、ちやうど日本の國體の「養正」積慶「重暉」といふ三つの綱領と同じやうなものである。

そこで此の「本門の本尊」といふのは、これは世界を一つの道理、功德の中に綜合するといふ、即ち綜合的根本的から見て、世界統一觀をあらはしたものである。それから「本門の戒壇」といふのは、此の日本の靈士へ世界中の人の精神的の歸依所をつくる、それが本門の戒壇である、そこへ皆なお詣りに來て戒を受ける、世界中の人が頭を下げて戒を受ける處が、世界の中に唯一つ日本に出來るといふことを、日蓮聖人が言はれた。それは世界的の教であつても、世界中で「あちら」は「あちら」、「こちら」は「こちら」で勝手にやれといつたら、いつ迄もつはまりがつかない、その勝手に放任して置くことによつて、又いろいろな亂れを來すから、これは一つ中心へ寄せて、おのゝの存在を意義あらしめるやうにしなければならぬ、そこで之を國家に約して、日蓮聖人は特に日本に限るといつて、日本の靈地へ本門の戒壇を建てるといふ、これは中心主義から見た世界統一觀である。それから「本門の題目」といふのは、妙法蓮華經の五字を以てあらゆる吾々の心性、智性の

源として、これによつて吾等の固有の徳を發揮するといふところの教を立てた、これは個性から出發して世界統一をなすべき「個性的世界統一觀」である。この三つの道理は、法華經の理義からあらはれて、さうして此の日本を通じて世界を統一するやうに出來て居る。であるから本門の本尊——天地法界を統一するといふ本門の本尊の眞中に、日本の先祖をまつてある、これは即ち世界的に示した綜合的世界統一觀から出て居る。それから本門の戒壇は、これは日本へ建てるのだ、戒壇を方々持ち歩いて移動警察みたやうなことをやる譯にいかぬから、向ふからこちらへ來なければならぬ、それは世界の中、明白の理由があつて、日本へ建てるのである。

『勅宣並に御教書を中下して靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立すべきものか、時を待つべきのみ、事の戒法と申すは是れなり。』(三大秘法鈔)

日本の中でも、一番勝れた地へ、勅命及び協賛機關の一致命令を以て建てる、さうして世界の人が、みんな來て拜む、國王でも大統領でも、人民でも、

『三國並に一閻浮提の人の懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王帝釋等も來下して踏みた

まふべき戒壇なり。』(同上)

世界中の人間ばかりではない、天の神も來つて支配を受ける戒壇である、大梵帝釋も來つて踏むべき戒壇であると言はれた。それが日本でなければいけない、これは日蓮聖人が日本へ生れたから、『俺の生れた國だから此處へ建てる』といふ意味ではない、何處の國でも可いといへない、世界の中たゞ日本だけ之を建て、そこへ世界がみんな集つて來なければならぬ因縁理由を有して居るといふのが、本門の戒壇である。それから今度は國とか世界とかいふことでなく、その根源たる人間、人間の個性を發揮して行かなければならない道があるから、本門の題目を以て、一切衆生にみなおのく佛性があるといふことを説いて、今度は個性の方から世界統一觀を顯本せられたのが本門の題目である。かういふ風に、世界的に、國家的に、個人的に、この三方面から、圓滿に周匝に、此の人性を開發し、正義に依つて世を統一するといふことをは、法華經によつて立てられた。それは反面には日本國の建國の理想、建國の主義といふものがある、その建國の主義と感應作用して、日本國を通じて、此の法華經は世界に廣宣流布すべきものである、これが日蓮聖人の、他の佛教

家と異つた一種の特種な見識を持たれた理由である。即ち斯ういふ譯で、日蓮聖人が見出して、日本の國體を法華經によつて開顯して、一念三千の大理想を以て此の國體をみがき上げて、ますく此の國體が世界的に光つて來ることになつた。それは日本の國體の内に、それだけの價値を有つて居たのであつて、日蓮聖人があとから出て來て、無理にひつつけたのではない、加したのではない、本來有つて居る價値を日蓮聖人がひらき出したのである。かういふ深遠な底力ある解釋に基いた國體觀なり皇室論でなくては、萬代不易の眞價を擔保することが出來ないのである。

(五) 皇室の存在は直ちに日本の存在なり

此の意味に於て、日本の建國は實に世界的に大切なものである、であるから此の建國の使命を代表した日本の皇室は、日本の存在であるとともに、直ちに世界的意義を有つたものである。日本の皇室が斯うして存在して居るといふことは、さしづめ誰か一番深くこれに想を致すべきかといふと、むしろ世界の人が、此の世界の内に日本といふ國がある、「世界に日本あり」、「我が世界は日

本を有せり」といふことに於て、世界の意義が尊くなる、斯う考へたならば、日本皇室の存在は、即ち世界に意義の存在であるといふことが言へる。

斯ういふ深重なる意義によつて皇室を尊ぶ尊王思想は、たゞ人民を卑くして奴隸的にするのではない。如何となれば、此の皇室、帝室によつて代表された吾々の眞の價値である、その尊いところの皇室を尊敬することは、同時に吾等の自己の尊いことを尊ぶのであるから、「尊王」は即ちこれ一面に於て「尊民」である。

そこで予は此の『天業民報』に、斷えず尊王の大義を格言的に鼓吹して居る一文がある、創刊以來今日までに八百二十四號になつて居る、さうすると發刊以來八百二十四回、此の新聞の「はしら」に一回も缺かさずに始終「はしら」を居る、

『凡そ國民は、皇城及び皇陵前を通行する時は、敬禮を行ふべし、君を敬ふと共に自己を正しくする所以也、此正しく整へる形に百千の道義は宿る。』

斯ういふことを始終モットーとして世に示して居る。それからこれは序だからいふが、これに伴つた、國

民的指針が、これとも四つある、その二は

『途中若し葬儀に逢はば、其何人たるを問はず弔禮を行ふべし、人情の敦厚禮儀の肅整よりして個人の情誼も整ひ、社會の秩序も立つ次第なり。』

その三は

『汽車電車に乗りては、先づ老人弱者に席を譲るべし、交通機關にありての推讓は、それやがて社交の整齊たり、亦及ぼしては國際の親善たる也。』

その四は

『火事に遭はば、逃げるよりも荷をかたづけけるよりも先づ其火を消すべし、火に對して戦ひ得ざる程の人間は、世のすべてに對しての敗者なり。』

葬式の通行をポカンと見物的に見て居たり、電車や汽車ではびこつたり、火事といふと消さないですぐ逃げる様な非日本の民俗を矯正したいと思つて、口を酸くしたり筆を坊主にするまで絶叫するのは、一に國體心の充實をはかりたいといふ切なる愛國の心からして、此の四ツのことを、まアこ

れは新聞の欄外ではあるが、創刊以來始終毎日々々獎勵宣傳して居るのである。

だから吾々同志者は皇城の前を通過しても、皇陵の前を通過しても必ず敬禮をする、電車を通る時でも必ず敬禮する、ところがどうも世間には敬禮する人が少い。いつか私は桃山の明治天皇の御陵に行つて甚だ慨いたが、これはまだ御陵墓が出来上つた初めの頃であつたが、どこか在郷の方の若い者で、つまらぬ身装をした者であつたが、二人やつて来て、さうして御陵の前へ來るといふと、脊負つて居た風呂敷包を卸した、私は一體何をするのだらうと思つて見て居つた、すると其の風呂敷包から洗ひざらしたのはあるけれども羽織を出して、足には草鞋を穿いて居る、身には洗ひざらした浴衣を着て居る、その上にその羽織を着て、それから其の風呂敷をかたづけて、手水を使つて御陵に參拜をした。どうも風采から見るとよほど貧乏な水呑百姓のやうな態度の人である、これを見て實に私はどうも崇高森嚴なる感に打たれた。さうすると皮肉千萬にもその時に、立派な風采をした一人の紳士が、煙草を燻らしながらズツとやつて來て、帽子を冠つた儘で、御陵を仰ぎ見て居る、そばに居つた巡查が見兼ねて『コン、帽子を取んなさい』と言つて制した、そう言はれて不精

ぐな面をして帽子を取った、その風采と着物とによつて占なつて見るのに、まア相當の教育を受けた人である、相當の資産を有し、相當の地位を有つて居るらしい。ところが一方は洗ひさらした浴衣を着て草鞋を穿いて來た水呑百姓だ、その水呑百姓には斯ういふ尊嚴なる禮儀があつて、さうして此の文化的空氣に觸れた教養を受けた者にして、巡査に叱られてやつと帽子を取るといつたやうな不都合千萬な状態になつたといふことは、これは國民の覺悟の根本に於て要領を失したところから來たので、實は國體に對する無自覺な政治や教育の缺陷が因を爲し、無考察な文藝などがこの縁を爲したものだと考へて、甚だ憂いべき現象であるとおもつた。

そこでどうか此の尊王心といふことは、たゞ形式的でなく、本當の精神から行くやうにしたい。伊勢の大廟は天子様の御先祖である、けれども人民はこれに『お伊勢様』と名けて早くから參拜をして居る風習がある、半ば迷信的ではあるけれども、國民が天子の御先祖に接近するといふ親しみは、茲に於ても明かである、これは即ち任運に傳統的に斯ういふ風になつて居るのである。しかしながら國家の自覺といふものはまだ十分に無い、無いから、天照太神と同じくお扱ひ申さんければならない

神武天皇の御陵墓には、從來誰も參拜する者が無い。のみならず明治維新のついで前までは、御陵の所在さへもはつきりわからなかつた、柴野栗山が探しに行つた時に、近所の百姓に聞いたところが、『俺等はそのものは知らぬ、ナンでも此の先の方に「神武田」といふのがある、多分それであらう』といふことで、やつと尋ね當て、涙をこぼして拜んだといふ位だ、それからうつつやつて置けないからといふので、川路聖謨戸田忠至などいふ人達がいろいろ奔走をして、漸く御陵の修築をした。日本の御先祖、たゞ此の國を開いただけでも實に尊い、その神武天皇、斯かる世界を救済すべきところの偉大なる光をつんで此の國を開かれたといふところの、高貴尊嚴なる國體の開創者としての、建國の御先祖であるにかゝはらず、國民が國家的自覺といふものがないために、上、政府の役人から、下、萬民に至るまで、此の神武天皇の御陵の所在さへも近年までわからなかつたといふのは、何といふ事だらう、況して榎原神宮などは跡形もなかつたのが、明治の聖代に於て、初めておまつり申したのである。それで居て、一方には、藤原氏の先祖大織冠鎌足のためには、多武峰神社といふものが立派に建てられてある、徳川家康のためには日光廟といふ世界に輝くところの立派な建築も

ある。先祖を崇ぶのは可い、けれども徳川氏がその先祖の家康を尊ぶと斯の如くなるならば、日本國民の先祖たる神武天皇の尊はんければならぬことを何故忘れたか。藤原氏の鎌足に於けるよりも、神武天皇は、それ以上に尊い譯である。單に貴族としての藤原徳川でも爾うである、況や彼等は苟くも國政の衝に當て、國民の儀表たるべき統卒者ではないか、こんな見易い道理に暗くて、何て天下を治める事が出来よう、徳川光圀が湊川へ行って、楠正成の戦死の跡を弔し、慚然として彼の忠魂を慰すべく、「嗚呼忠臣楠子之墓」と題して碑を建てるほど風教の任持者であつた憂國者でありながら、なぜ神武天皇の山陵を捨置いたであらうかと思議に思はれてならない。是れ畢竟國を擧げて國體の眞自覺を缺いて居た證據ではないか。

そこで予は前年『太廟太陵參拜新議』といふものを書いて、全國の市長町村長、及び學校長等へ幾萬部を贈り、尙別に朝野の諸名士千人ばかりに送つて意見を聽いた、百餘人から返事が來た、その中で二人ばかり不賛成の人があつたけれども、あとは皆賛成をして呉れた、中には之を議會の問題とするならば、自分は粉骨碎身して盡すといふことを言つて來られた議員もあつた、まだ實

現の運びには至らんけれども、それは伊勢の宗廟と敵傍とへ、小學兒童を必ず尋常六年の時に、國家的の仕事として大舉參拜をさせるが可いといふことを主張したものである。近時に至つて吾々の微誠も終に達する時が來つたか、大分學校の生徒が敵傍の神武天皇の御陵に參拜するやうになつて來た。まア御陵へ參拜するしないは第二として、神武天皇といふことをば、國民のあたまから寸時も離れないやうに、忘れないやうにしなければならぬ。

何故ならば、神武天皇は國の御先祖であるばかりではない、吾々のあらゆる思想の淵源が此の神武天皇に在る。幸に日本の歴史には、それから後の綏靖天皇以後崇神天皇までの間は仄びて傳はらないけれども、『神武天皇紀』だけは儼存して居る、此の『神武天皇紀』は、わづかな紀載ではあるけれども、此のわづかの間に、天皇みづから仰せられたこと、行はせられたこと、或はお詠みになつた歌のすべてを綜合すれば、燦然たる萬古不磨の大明が茲に存して、世界の大空に輝いて居るといふことを、去る明治三十七年以來予は盛に唱道して、『世界統一の天業』といふものを書いて、それに國體の「三綱」といふものを提示した。三綱とは、前にも述べた「養正」と「積慶」



と「重暉」の三大勅語である、

「正を養ふ」「暉きを重ねる」「慶びを積む」此の三つのことは、神武天皇みづから仰せられたお言葉で、「正」の一字に眞理を攝し、「慶」の一字に諸の徳教を攝し、「暉」の一字に諸の文化を攝して、五分でも隙のない行届いた大文明を顯示して居る、それから「正」には「養ふ」といひ、「暉」即ち「ひかり」の智慧には「重ねる」といひ、「慶」即ち道徳には「積む」といふ、此の「養ふ」「重ねる」「積む」といふことは、前にも言つた通り、國民性の積極的文化を意味したものである、これを「三要」といふ。此の三綱三要を以て、養つて行く、重ねて行く、積んで行くといふところに、吾々の津々として盡きざるところの向上的文化の光があるのである。これによつて世界の人文を先づ統融して、統べくもつて融通して、さうしてほどよく處分する、世はおのゝその處を得て、人には怨みも争ひもないやうにすることが、即ち此の日本の建國の主張たる絶対平和的世界統一觀であつて、決して干戈を以て他國の領土を奪るといふやうな、そんな卑屈な劣等な世界統一ではない。

「神武天皇に還れ!」、この一語をかざして、國民の大自然を喚起し、この明確な建國精神に基いた尊王思想を發揚して、國を護らなければならぬのである。

さういふわけであるから、吾々の「尊王」は、尊王によつて直ちに此の國は護られるのである。軍人が天子に專屬して居る、吾等は即ち天子の家來である、天子の命令ならば水火の中にも入つて命を捨てる、斯ういふ覺悟を以て軍人の精神とする、それはそれで可い、別に「國」と言はなくても、その陛下の中に即ち「國」がある、陛下は即國である、國は陛下である。これは西洋の或る王様が言つた「朕は國家なり」といふのとは譯が違ふ、日本の、「天子は即國家なり」といふのは、國家と帝室と國民とが一つであるから、一つのもを一つのもが護るのである。であるから此の尊王心が基礎となつて、即ちこの尊王心を通じての「護國」でなくてはならない。だから軍人はサウ考へてよろしい。けれども軍人以外の者はそれではどうだ、商人はどうだ? 百姓はどうだ? 百姓でも商人でも、これは皆な陛下の土地を耕すのである、陛下の國物を保護するのである。その陛下の國といふことは、陛下によつて代表せられた我等の使命(即ち天業)である、斯う考へたなら

は、米一粒でも、リンゴ一顆でも、皆な國體の精神が宿らんければならぬ、そろばん一つ弾くのも、權衡一つ動すのでも、此の尊王思想が漲つて居らねばならぬ、この正しい觀念の光と力との下に於てこそ、必ず正しい商賣、所謂實業道德の横溢した、立派な文化的商業が營まれる。其他軍人のサーベルも尊王心で光り、學者のペンも尊王心で走り、のみもかんなもそろばんも鋏も、悉く尊王心で動かねばならぬ、これを忘却すれば誦詐百端、詐りに踵ぐに偽りを以てして、さうして世の中を混亂に導いて、怒つたり、怨んだり、争つたりして、終にはその争ひを極度までに進めて、階級闘争などといふことを言つて、反抗をしなければ人間でないやうに此の頃の人は考へて居る、それは人間を驅つて禽獸と一般ならしむるものである。

かういふ意味の尊王心を通じての護國でなければ、眞の護國でなく、又世界に對する日本の使命を全ふし得るものでない。「舉國すべて是れ君」である所の皇室を尊崇することに於て、「舉國すべて是れ民」である所の民命を果し得るのである。「君中、民あり」「民中、君ある」圓妙融一の國相は、必ず先づこの徹底的尊皇心から發生するものであることを知るべきである。

一粒の米の味にもすめらぎの

恵やどれと耕せや人

### 第三 履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし

(一) 外來思想の履霜

〔其一〕 階級闘争説

是れから、専ら現代のいろくな思想の潮流に對して、吾人の取るべき思想解決の覺悟を話す、即ち「履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし」といふ意味を述べる。これは「易經」の坤卦を明かした中に

履 霜 堅 氷 至

といふ言葉がある。「坤爲地」の「初六」の言葉である。「霜を履んで堅氷至る」霜が降つたといへば、そちこちするうちに、今に氷の張るといふ時が来る、霜の時にウカクして居て、急に氷に驚いてはな

らん、物事はその初めに慎しまなければならぬ。どんなことでも、必ず突發的に來るといふことはない、漸々に來るものである、その原因はズツと前にあるのであるから、その原因をよく考へて慎しみ誠めなければならぬ。「坤」はすべて物をつしむといふ義である、「乾」は君の徳、君の性をあらはしたものである、「坤」は民の性、民の徳をあらはしたものである。そこで「易經」の言葉には、

『臣其の君を弑し、子其の父を弑するは一朝一夕の故にあらす。』

と孔子が「文言傳」に斷はつてある。子が親を殺し、家來が主人を殺すといふことは、容易ならざる大逆で、容易にあり得べからざることであるが、そのあり得べからざることが稀にもあるといふことは、實に人心の變である、大變である。その人心の大變といふものは、決して突發的に來るものでない、それは前からさういふ原因がだんく積り積つて、勢ひ茲に勃發するのであるから、臣其の君を弑し、子其の父を弑するは一朝一夕の故ではないと言つてある。即ち「霜を履んで堅氷至る」、霜を見たならばモー今度は氷の用心をしなければならぬといふ、此の易經の言葉を籍りて、茲に世相の波瀾を一考して見る必要がある。

履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし

現代は、即ち此の「履霜」の爛熟した時である、或は「堅氷」にも至らんとして居る、であるから決してグツ／＼して居られない、さりとて周章して始末を誤つてはならない、要するに行届いた觀察を以て、明快な判断を以て、あはてず自然に敏活に、紊れずぬけぬけなく、其れで鷹揚に、時世の進退を考へて、良斷しなければならぬ。

モ一、大分霜が濃くなつて来て居る、先づその「霜」としてはどんな「霜」であるかといふことを、近代思想の方から考へて見るといふと、近くはフランス革命以來、一時に醸發した様な革命思想も、基く所はその前から催して居たのである、故に前の因から生んだ果であつて、それが又後の因となつて近代思想を濃厚に染め出した、所謂「一朝一夕の故にあらざる」で、だん／＼過去からやん／＼となき、ぬきさしのならない理由があつて茲まで来て居るのである。獨逸の帝國が滅びた、露西亞の帝國も滅びた、あれだけの立派な帝政がいかに脆く覆へつた、露西亞の如きは實にどうも物の美事に覆へつてしまつた、あれにしても、革命黨が出ていきなりボンとやつて、それで直ぐ埒はやくやつたものとはかりは言へない。やはり彼の峻烈なる革命を成就するには、その又漸々に積み來つた原因が

あるに違ひない。今又近代思想のすべてが、非常に危いやうな毒素を大分持つて居るが、これも一朝一夕のわけではない、だん／＼に茲に來つたものである。まア最近には、自由平等の思想といふやうなことが熾んになつてから、今日の思想を多く馴致したけれども、彼の佛蘭西革命といふものも、突發的に起つたものではない、前からだん／＼その不自然なる社會組織といふものが、ハチ切れさうになつて茲に及んで、終に貴族に反抗をして、民意の暢達をはかるやうになつた。それは何百年何千年前から、特權者が不自然にその民を壓迫して居たために、斯うなつたのである。けれども先づこの佛蘭西革命といふことが動機となつて、近代思想のいろ／＼なものは其の餘波を受けて居るから、近代思潮の源頭は、佛蘭西革命がいろ／＼のものに波及して來た、その餘波と見て可いとおもふ。

これと前後して、彼の『共産黨の宣言』といふものが、マルクスとエンゲルスとによつて發表された、これは有名なものである。此の『共産黨の宣言』といふものが出たために、世界各國の労働者は皆な覺醒めて一齊に起ち來つた、『世界の労働者、團結せよ』と叫んだ此の強い響きは、ちやうど東郷

大將が『皇國の興廢此の一戦に在り』といつてバルチック艦隊を全滅した時の信號のやうな、甚だ悲壯にして峻烈なる韻を帯びて居るといふことは、これは必しもマルクスの刀ばかりではいとおもふ。それは何れの國も皆なその社會 状態といふものは缺陷だらけなものであつて、不自然なことが多い。古へは特權階級が人民を壓迫した、その人民が今度は特權階級 滅ぼして、さうして民主の世になるといふと、今度は民主が又その組織に缺陷があるから、終に資本主義のやうなものが出来て来る、今度はその資本家が横暴を極めて一般の無産階級を壓迫する、たゞ名前が變つただけで、やはり壓迫をする者は始終壓迫をして居る、壓迫をされる者は年中壓迫をされて居る、壓迫されて居る方の不平は、いつの不平でも同じことである、ただ名前が違つて相手が違ふだけのこと、年中世の中は不平といふものが絶えない。これはマルクスを俟たず、佛蘭西革命を俟たぬ、過去遠々劫來、人間に元品の無明があり、人間にいろくな慾張りの根性がある以上は、それは始終くつついて居るのである。それが或る機會にだんく成熟して來て、茲に勃發するのである。勃發も或は時の機運であらう、斯ういふものがあつてそれが内訌して居たのであるからして、どんなところに噴火

するかわからぬ、先づ噴火は多く大抵山の頂上とさまつて居るから、山の頂上なら可いが、東京の眞中の日本橋あたりで噴火されてはたまらない。噴火もよろしい、噴火してそれがあらはれると同時に、ちやうどいふあんばいに之を處理する思想も出て來る、恰も承久三年に北條義時が國體を顛覆して國史に空前の一線を劃したやうなことがあると、その翌年には日蓮聖人が生れて、又日本國體を根本から開顯するといふやうに、天の配劑甚だ妙なる哉である。斯ういふ勃發性のものであらはれて、ドシ／＼今までの不合理、不自然の状態を一遍にバツと總勘定をして、又その跡を處理する者が出るやうになる。さうして一つづつあらはれては一つづつ解決されて進んで行くのであるから、私は之を進歩の意味と考へる。たゞマルクスの「共産黨の宣言」はあまりに峻烈であるからといつて、それを以て呪ふべきものとのみ考へて、これを解決することを考へなかつたならば、一時的に押へても、やはり何處かに何かになつて 進り出るやうになる。そもく彼の「共産黨の宣言」の骨子とする所は、「人類の過去の歴史は階級闘争の歴史である」といふ觀察である、であるから此の階級闘争といふものが、今日の現狀に於ても、これが今の世の中の相である、同時にこれが今の社會の問題で

層霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし

ある、此の階級闘争を無くすには、社會の根本、世界の根本を改めてしまはなければならぬと、斯ういふことになる。けれどもこれはマルクスの此の宣言書によつて見るといふと、闘争した結果はやはり又闘争するので、どこ迄も闘争はついで廻る。人間は闘争性を有して居るものである、資本家に對して争はなければ、何かに對して争ふ、資本家を滅ぼしてしまひ、政府を滅ぼしてしまへば、今度は人民同志で又争ふ、男と女と争ふか、男と男と争ふか、何かで争ふ、何にしても人間は、闘争性を有つて居るものであるといふ。爾うして只闘争の爲めに闘争するといふわけなら、風車みたやうなもので、いつまでも果しがつかない、いかにも情けない馬鹿らしい世の中といふことになつてしまふ、それだけでは甚だつまらぬ、闘争も可い、闘争性！結構!!、それを闘争の爲めの闘争でなく、そのモ一つ上のものゝ爲めに之を開點する、そこに闘争の妙機がある、即ち此の闘争性を程よく整理し開會する方法がなければならぬ、開會する方法を考へないで、その闘争性をその儘に、人間は争ふべきものであるといつて、それを金科玉條とするといふことは、それはマルクスがまだ本當の圓融の道理に接着しないからさうなつたのである。

しかし、此の「共產黨の宣言」に

「萬國の勞働者團結せよ、團結によつて汝等の失ふところのものは鐵の鎖のみ、而して得るところのものは世界なり。」

實に悲痛なる言だ、これはたゞ筆の先で考へて書いたものではない、やはりマルクスの眞の信仰である。世の中の状態といふものは、斯ういふことを言はなければならぬやうに、餘儀なくされて來て居る、全く資本家はたゞ己れの利益ばかりを考へる、その利益をはかるがために、機械を拵へて、人間の勞力を少く使つて生産物を多くしようといふことを考へる、さうして只富の上に又富を増さうとする。その富が何になるか、富むといふことは差支ないが、富んでその富がどうなるか、ほとんど此の富は、或る少數の例外者が、社會のために何とかするといふ、これは所謂申譯的公共事業、過激的慈善事業をやるくらゐのものであつて、その實はみな一個人の私腹を肥やし、一個人の驕奢を増長するといふやうな、不自然なることのために用ひられて居る、さうして社會の多くの者は、皆これの犠牲となるといふところから、社會に不平が起る。これはしかし、資本家のみが悪いのではない、資本家

履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし

なり、労働者なりが、さういふ状態になるやうに、世の中の組織をしてあるの罪である。日蓮聖人によれば、「一人二人の善人をつくるよりは、人間がどうでもこうでも善人にならなければならぬやうに國をつくり直せ」といふ大思想が必要となつて來て居る。

此の意味からいへば——標準は違つて居るけれども、マルクスも日蓮聖人も、やはり社會を改造するといふことの意味に於ては、輪廓は同じである。けれども流石に西洋人は、「道」といふものに對する觀念が、宗教家の半迷信的のものを除くの外は、どうも堂々としなない、男らしくない、感情的に何かをやるのが多い。マルクスでも他の人でも、感情的に何かをやつて居る、何とかの壓迫を受けたからその反抗的にやるといつたやうなことが多い。感情的、個人的、自我的は、往々復讐的破壊的になり易い、根本に公明な圓融理想を缺いて居るところへ、感情的で押し通すから、事が騒々しくなる。マルクスは非常に氣に入つた細君があつて、その細君が死んだら、それで懊惱悶亂して間もなく跡を透うて死んでしまつたといふことだが、随分感情的の人であつた様だ。然しえらい細君ナンだらうけれども、しかし、いくらえらくても何でも、細君よりはマルクスの方がえらからう、否、

彼れが抱持して居る理想の方がえらからうと思ふ、それが細君の死を哀しんで、懊惱悶亂して死ぬといふやうな感情的思想から割出したことに、健全なる道理といふものは決してある譯のものではない。所謂 隔 歴思想に感情の衣を着せたものに過ぎないとおもふ。

それから此の階級闘争といふことに就ても、今日の世の中は階級闘争の世の中である、だから闘争しろといふやうなあんばいに言つてある。けれども此の階級闘争といふことは、階級といふものが闘争の原因になるといふことは出來ない、階級が闘争の因をなすのは、階級が病的なのである、若し階級が闘争の因をなさないで、これが歡喜の因をなすやうに出來て來れば、その階級は決して害はない、むしろ階級といふものが無ければいかぬことになる。上來述べた日本の君民關係の如きは、これは劃然たる階級である、貴族だとか金持だとかいふ方は、前にも言つた通り、これは贅肉みたいなものだけでも、此の君臣の二つは、大秩序の上に於て成立つた堂々たる階級である。道の上からいへば、弟子師匠といふものはこれは一つの階級である、家族的でいへば、親子といふものはやはり一種の階級である。此の階級は、いくら劃然としてあつても、争ひの因とはならない、「日本は階

履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし

級あれども闘争なし』である。此の階級といふものをば、皆な闘争の因とするといふことは、その根本に於て圓融理想を缺いて居るからである。

人間の身體に五體六根四肢百骸の種々複雑なるものがあつて、おのゝ地位が異り、おのゝ職能が異つて居る。眼は上に位して居る、だから物の大事なことを「眼目」といふ、或は鼻は斯ういふ突端に出て居る、或は手は左右に分れて居る、足は體軀を支へるやうに下に付いて居る。斯ういふあはいにいろいろな構造がある、これは一種の階級である、そうしておのゝ分業的にやらなければならぬから、その爲めの階級である。かく階級はあるけれども、これに争ひはない、若し有るとすれば、其れ病的の場合である、此の階級によつて人間のからだといふものは微妙に働かされて行く、潤ひを受けて行く、であるから階級はあつても争ひはない。此の通りの關係が社會にあつたならば、階級ますます可い。これを滅茶目茶にしてしまふといふと、却つて甚だ不都合である。これはモウ彌が上にモツと階級を明確にして、八萬四千の法門といふから、八萬四千も階級を拵へて可い、さうしていろいろな階級があつて、分業的に交換的に、反映的に相扶的に智識の方面、技藝の方面、

資料の方面、運営の方面と、そのおのゝの發達を併せて一つの道の上に朝宗して行きさへすれば、階級百萬ありと雖も、それは皆一道を莊嚴するところの光とこそなれ、決して争ひとはならない。そこで等が少しマルクスにしてもクロボトキンにしても、ラッセルにしても、まだ此の東洋の哲理とか、宗教とかいふものをよく研究しないからして、——東洋の中でも此の日本、日本の中でもまるで何處に在るかかわらないくらゐに隠れて居る此の日蓮主義の、一念三千の教理の如きものは、一般に認められないくらゐのナンであるから、無理はないけれども、惜しいことには斯ういふ人々をしてはやく此の一念三千の眞理に接觸し得て、此の圓融思想に洽はしめたならば、彼の所謂宣言は、モツと立派な、モツと輝きのあるものになつて、日本の國體と合致することであつたらう。

〔其二〕相互扶助説

その他いろいろな改造論者の説もあるが、サウ一々煩雜に、裁判所で證人でも訊問するやうなあはいにやることは出来ないから、まア其の大體の骨子だけを言ふと、クロボトキンは「相互扶助」と

履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし



いふことを言つた。この「相互扶助」といふことは、確に一應佛教の道理にも適つて居る。けれどもそれと同時に、彼は又「生存競争」といふことも世の中に無くてはならぬといふことを言つて居る。此の「生存競争」といふことは、佛教でいへば「假觀」にあたる。「相互扶助」といふことは、佛教でいへば「空觀」にあたる。「空諦」は物を平等ならしめる、「假諦」は物の差別を意味する、今の階級闘争の如き、此の差別といふ考が順當を誤れば、其の差別は世を累する。けれども此の差別が眞の秩序の意味の差別ならば、差別ますます結構である。それから平等も亦その通り、平等も此の法界圓融の道理から派生して來た平等ならば、平等によつて眞を得るけれども、それが今の菽麥をも混淆するやうな意味の惡平等であつたならば、平等によつて却つて世は煩ひを受けなければならぬ。であるから平等に即して差別、差別に即して平等といふ、此の空假の二諦を常に統一して、常にその非分を否定して、常にその是なる部分を應用して行くといふ統一性なければならぬ。その場合の「空」は「即空」であり「假」は「即假」であつて、それをよく統一して行くのを「即中」といふ。その統一性は法華經の中堅思想であつて、それを「即中」といふ。即ち「中道王三昧」の法である。

即 空 (開顯されたる相互扶助)

即 假 (開顯されたる生存競争)

即 中 (法界圓融一念三千)

「即中」は「法界圓融」の道理、すなはち「一念三千」の眞理である、此の法界は一つのものであるといふ、法界圓融の根本智から發せる圓融理想からあらはれて來た生存競争、それからあらはれて來た相互扶助、いよく結構である。

此の見地から考へて見るといふと、此の「相互扶助説」でも、「共產黨宣言」でも、一たび法華經の統裁を受ける時は、立派な文化となるべき性質を持つたものである。殊にマルクスの「唯物史觀」は、日蓮聖人の主張の一たる所謂、物質を閑却しないで、物質の上から成佛を觀察するところの大哲理に、聊か吻合するところがある、末法時機相應の思想現象として、大いに採るべきものがあるとおもふのである。けれどもその相互扶助といふことをやるには、此の今の世の中が不完全であるから、これを此の原則によつてやるには、政治的の仕事では競争はとも出來ないから、世界

が根柢から深くその謬りを知って、永久の忍耐と勇氣を以て、直接行動によつてすべてを打ツ潰してしまはんければいかぬと、斯ういつたやうな煽動的の狀態になつて、頗る不穩化して來て居る。半分焼け氣味で出發したことは、やゝ感情的のところがあつて、生のまゝでは用にならぬ、然しその思想の根元を考へて見たならば、一般かいなどの盲目的愛國論者よりは、よほど取り柄があるとおもふ。

それは何故かといふと、今日の缺陷ある社會を根本より匡正しようといふことは實に吾々も同感であるのである。或は日蓮聖人の社會改造主義などは、クロボトキンよりも、マルクスよりも、モ一層猛烈なものであるかも知らん。「眞理にしたがはざる國家は亡びよ」といふことを明言されて居る、眞理にしたがはない人間ならば存する必要はない、眞理にしたがはない國ならば存する必要はない、梵天帝釋にむかつてさう禱つたとまで言はれたから、これを考へ違ひをして、日蓮は國亂を惹起して國を呪咀するものであるといふやうな讒言をした、所謂「七大寺を焼き拂つて彼等が頸を由井ヶ濱にて斬らずば日本國必ずほろぶべし」といふ言葉を聞いて、日蓮聖人は寺を焼き坊主を殺せといッ

たから惡黨であるといふやうなことを言つたのである。實にそれだけの言葉を用ひなければならぬほど、社會改造に對して眞面目を注がれた日蓮聖人の眼から見たならば、今日の此の社會改造論を主張する人々は、憐れむべし、圓融思想の根源の第一着を謬つたから、まづたくの危険思想となるのであるけれども、若しこれに入眼するに法華經の圓理を以てして、眞理正順の社會改造を論じたならば、そんな直接行動などをやらなくとも、さういふ危険性を帯びなくとも、立派な教化事業として通るのだ。たゞその根柢に一着を失脚して居ることを警告して、これに根本的開顯を與へたいと思つて、所謂「大論」の『大藥師のよく毒藥を變じて藥となすが如し』といふ大感化を唱導するのである。元品の無明を斬る大利劍、生死の長夜を照す大燈明といふ、此の超越した大眞理の光によつて、これ等の混亂せる世相をばよく捌いたならば、その「履霜」は、轉じて皆な吾々に最上なる注意となり、世を沾ほす文化の泉となるであらう。

唯心と言つて物を忘れたのが非である如く、唯物と言つて心を忘れたのも同じく非である、物心は一元であつて、體用相依つて現象し作用して居るのである、故に「物面心裏」で觀察する場合と、

履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし

「心面物裏」て觀察する場合とある、歴史でも經濟でも偏して見ることは出来ない、それが圓理である、生存競争でも相互扶助でも爾うである、法華經で相互扶助を判ずれば、現象の末を見る前に、先づその本から觀察してかゝる、即ち一切衆生の恩といふことから來て居る、「一切衆生は互に皆な恩あり」といふ觀察は、社會現象を「一たび根本に還元し溶解して見た根本觀察である、一切衆生は、過去遠々劫り、又現在目の前にても互に恩を受け合つて居るのである、それであるから相互に扶助すべきものだといふ道理が成立つのである。たゞ勞力の交換といつたやうな意味の淺薄なものでは、根柢が空疎だから、感情次第で、どうぐらつくか判らない。

〔其三〕 衝 動 説

それからラッセルは、これは又ズツと進歩したことを考へた人である、流石に彼はその祖父さんが英國の首相であつた關係からだか、よほど鷹揚なところがある。彼は、此の世の中の文化といふものは、大抵衝動によつて成つた、衝動性のものだとして居る。即ち「所有欲の衝動」か、「創造の衝

動」かの二つである、さうして此の創造的衝動を閑却して、みなが所有的衝動によつて居るから、世が亂れるのであるといふので、一切を創造的衝動に改めなければならぬといふことを主張した、であるから所論が往々藝術的に傾いて居る。成程これも一理あるのだけれども、その所有欲の衝動といふものも、ラッセルが忌み嫌ふが如く——彼はほとんど刑法の如きものは防禦的であつて、犯罪人は即ち侵略的である、さうして國家とか財産とかいふものは皆な此の所有欲の偉大なる形體であるといふやうに、非常に捨て鉢になつて居るやうな氣味があるけれども、此の所有欲も開會すれば、所有欲ますますよろしい、此の所有欲をしてその處を得せしめるといふ途を、圓融思想によつて啓きさへすれば、世の中はそっくりその儘皆な用をなすし、それが同時に又ラッセルの所謂創造的衝動に符合するやうになつて行くのである。

總じて斯の如きことは、皆な隔歴の思想を主とするが故に、その唱ふるところのあらゆるものは、往いて還らざる不器用な偏狹思想となつて、世の紛亂状態を醸すやうになつて來るのである。

これに對抗する者の方もやはりその通りであつて、クロボトキンがどうだ、ラッセルがどうだ、マルクス

履霜の誠に寒心せざれば堅氷の侮に泣く時あるべし

がどうだと、それを火の玉の如くに排斥するものも迎合するものも、俱に隔歴觀て扱うから、恐怖して居るが。いつまでも埒があかない、勿論今日の社會の現状でいきなり其を直譯的に振舞はされては恐怖すべきであるが、實は徒にそれを恐怖するよりも、進んでこれ等をは開會し入眼して、それを畢竟して成佛させる法を考へなければならぬ、怖がって居るよりか、相手を處置しなければならぬ。ちやうど今火事が起つたソラ火事だといふと皆んな自分の荷物を持つて逃げる、あちらでも逃げ、こちらでも逃げる、火事はひとりて横暴を極めてズンク焼け擴がる、それよりは自分の荷物を持つて逃げることを後にして、あらゆる者が皆な氣を揃へて、火を消す方が早い、火にまけないで火に勝つのである、今日はいろいろの思想がもえ盛つて世を毒して居る、勿論この思想そのものにも毒があるけれども、それよりは此の思想を扱ふ扱ひ方にも毒がある。醫者の藥局にはモルヒネがある、それを服んで死んだ人があつたとしたら、醫者の罪であるか、服んだ者の罪であるか、劇藥毒藥には、その扱ひに夫々の方法がある、その方法にかまはず、無茶苦茶に服んで置いて、罪を醫藥に歸することは出来ない。『甘露人の命を害ふ』といつて、甘露のやうな尊い良い藥でも、用ひ方が悪ければ人の命をそこな

ふといふことがある。であるから此の社會改造論者の種々なる議論も、その所論に間違つたところはあるとしても、全體此の世の中といふものは、どのみち改造しなければならぬものであるといふことは、社會の現状が、それを要求して居るのである、故にこの缺陷に皆が目覺めて、どうかして世の中に不平のないやうにしようといふところから心配し出して起つた改造意見なのである。吾々もやはりサウおもつて居る、どうしても今日の社會は根本から整理し廓清しなければならぬ。但し吾々の主張は、眞理正道を標準として、還元的に整理しようといふのに在る。

『汝早く信仰の寸心を改めて、速に實乗の一善に歸せよ、然らば則ち三界は皆佛國なり、佛國其れ衰へんや、十方は悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや。』

此の理想境を建設するために日蓮聖人は「立正安國」と絶叫した、正法を立て、國を安んずるといふ、其の正法とは即ち圓融思想である。その圓融思想の磨きかけた日本の國體が、あらゆる世界の文化を統融するといふ中には、マルクスも入つて居れば、クロポトキンも入つて居れば、ルーンも入つて居れば、孔子も老子も、ソクラテスも耶蘇もみな入つて居る、あらゆる世界中の聖人賢

人、種々の先哲が考へた、凡そ世の爲めにした議論は、皆なその一分の利益があるから、根本の精神さへ入れば、其の足らざるところは補はれ、その枉れるところは直つて、みな日本の國體を莊嚴し、讚歎するところの滋養分とならざるものは一つもない。斯ういふ大きな包容性を有つた日本の國體であるから、一切の思想觀念を開會し善用して、萬物おのく其所を得せしめて、渾然たる一大圓理の下に世界を救ひ取つて行かうといふのである、又その位の働きがなくて、世界統一も出來まいてはないか。

今や世界の大戦によつて、それが吾々にいろいろな精神的波瀾を惹き起して、世の中の思想にいろいろの紛亂を起した。然し元來が此の大戦の期待したところは、「世界平和」といふ事であつた、平和のために戦つた、正義のために戦つたといつて居る、けれども其の彼等の考へて居る所謂「平和」といひ、所謂「正義」といふものが、根底のない一時的のもの浮つたものであるから、平和の爲に平和を紊す様な愚な結果を來して居るのは、根元の思想が低級であるからである、そんな安價な平和や正義のためには、この戦争は随分と高い犠牲を拂ひ過ぎてある、拂ひ過ぎてあるければ

ども、今度はその犠牲のあまりに高すぎたのに懲りて、それに依つて聊か世界が覺醒めて、いよく本當の平和をととなつて來た、この眞の平和を求めようといふ聲は、やがて世界の總勘定に對する決算を促かす聲である。即ち戦争の後に於て來るべき最大問題は、世界の文化を根本から統一するところの方法、即ち日本國體に向つて世界が聚り來らんければならないといふ運命を、世界みづから切り拓いたものである。

この意味に於て、日本人はその覺悟を以て掛らなければならぬ、あらゆる世界の文化思想に對しては、これを攝取すべきものは之を攝取し、陶冶すべきは陶冶して、所謂明治天皇の御製の如く善きをとり惡きをすて、外國に

劣らぬ國となすよしもがな

といふ公明正大なる精神、『廣く智識を世界に求め、萬機公論に決する』といふ包容偉大なる態度によつて、あらゆる世界思想に對し、これに嚴密周到なる國體的批判を加へた上、それを國體的に消化して應用自在に大文化を建設しなければならぬ。然し包容自在だからと言つて、これに國

履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし

體的批判を加へないで、たゞ鴉呑にしてはならぬ、用おれば用ゐるほど、いよくこの「能判」を閑却してはならぬ、現代の大弊は、西洋思想の輸入に在るのでなく、その鴉呑に在るのである。いさゝか構はず鴉呑にするから、それほど危険な思想でないものまでも、これが危険化して来る様になつてしまふ。鴉呑にすれば釋迦孔子でも害がある、消化すれば幸徳秋水にも楠氏と同じ性分は存して居ることがわかる、そこを覗うのが法界圓融の大思想である。

現代思想の第一の缺點は、理義の考察が周匝でなくて、よろづ感情的に流れる事にある。今の文藝美術を見ても、大むね薄ッペラな感傷的なのが多い、これは個人主義のいきみ出した弊竇であつて、義理の學問を閑却したたゞりである。こんな片々たる小規模な頭では、世界も人生も解るわけのものでない。

社會の改造でも論じようといふには、猶の事、雄大の着想から出發した圓滿理想を有たねばならぬ。マルクスでも、ニイチエでも、大抵感情家であつた。クロボトキンも、彼の一八六六年の波蘭獨立軍が、シベリヤ流刑の慘況を目撃して革命思想を起したのだといひ、又ラッセルも、一九一六

年九月の禁令迫害に憤懣しての反抗しての反感的思想だといふのに徴すると、若しも自己に平らかな社會に居たら起らなかつた所の思想であつて、感情的に孕生された反抗思想だから、要するに破壊的に流れて、攝取包容 陶冶整齊の器宇に缺けたところがあるのである。こんな非常性の思想に動搖されて、それを金科玉條として居るから、その説く所、心常に憤懣あり、その聲は常に怨みを含んで、平和の氣象が少しもなく、快活 光明の情操を缺いた困冥闇澹たる、今にも降り出しそふな險惡な陰鬱な、而も事々物々に反抗氣分の漲つた風潮を爲したのである。

此頃謠うものを聞いても、劇や繪畫彫刻を見ても、カラリとしたものは殆どない、裸躰の婦人がうつむいて何とかの悩みなぞいふ様なものや、震へ聲の歌や、腸をちぎる様な哀音悲歌か、然らざれば「カラマゾフ」や「幽霊」の様な陰慘な藝術、聖者親鸞が遊女の戀を讚美するのや、お定まりの戀愛の三角關係とか、まるで土窖でウオツカーに泥酔して、ブルドックに口をなめられる様な滅亡氣分破壊氣分が藝壇を支配して居る惡潮流は、みなこの公明の理義を缺いた隔 歴 偏僻の感情から生れたものである。

履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし

(二) 吾國過去の社會的變遷に於ける履霜

それから、吾國の過去に於ても、國體思想の明滅變遷に於て、幾層の霜を履んで來て居る。それは日本の社會的變遷として、先づ初めは君民一致の國體であつたのが、だんく貴族といふものが膨張して來て、固有の國情を變形せしむる様になつた。第一に先づ蘇我の一族が僭上なる振舞をして、自分の種族をさかんにした。それからこれに續いては藤原氏が專横を極めた、「此の世を我が世とぞおもふ」などといふくらゐに專横を極めた。それから續いて平家が驕暴を極めた、それから源氏であるが、賴朝に至つて霸業化して來た所謂武門政治は、名分上勿論變形ではあるが、必しも横暴でもない、僭上でもない、全く眞面目に天子様から此の國を預つて、さうして最善なる政治をしようといふ意味でやつて來たのであるから、政治的には進歩したと言ひ得るけれども、どうも日本の國體からいふと不自然であつて、純眞なる固有の君民關係を離隔し國體的政治を無視するに至つたのも是れからである、即ちその俑を作つたのは源氏であつた。けれども大義を亡する様

なことは決して無かつたのである。然るにその後北條氏に到つて、北條義時のやうな所謂背本主義を行ふやうになつて、立派な反國體思想を樹立して、古今の間に太い一線を劃したのである、そのあとが一層淺く輪をかけた足利の跋扈となり、それから織田信長は僅かの間たつたけれども、これは王室の式微に乗じて、政策的に勤王を賣物にして功を收めた、次に豊臣秀吉に至つては、倨傲にして尊大を極め、氣前のいゝ驕奢に、天下を一吞にした様な道樂氣分の勤王と、所謂外征の雄圖（その實は武を瀆したのだが）とによつて成金政治で世を賑やかしたり騒がしたりして、その次が徳川氏これは霸業がモウ一層進歩して霸道となつた、所謂道の形式を以て、もろくの學問を以て莊嚴するやうになつて、とうく立派に霸道を大成した。けれども日本の國體に於ては大分達さるやうになつた。帝室に於ては非常に此の徳川氏のやり方に御不満であつて、後水尾天皇の如きはあし原よしげらばしげれをのがまゝ

とても道ある世とはおもはず

といふ御製を遺され、或は月に對しての御感想を

履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし

月を友といはんもやさし雲の上に

住むが住むにもあらぬ吾身は

と御製遊ばされた、斯ういふ非常な御不満の状況があつた結果、歴史の上に於ても既に徳川氏は天皇の廢立をはからうとして、秀忠が承久の故事を以て陛下を隱岐の島へお流し申さうといふやうなことを主張したのを、家光が諫めて纔かに沙汰止みになつたといふことがある、随分思ひ切つた壓迫を朝廷に加へた。義時イズムの成功者として、政治的手腕を存分に發揮したのは、世のあらゆる學問宗教技藝を興黨として勢力を成したところに徳川の覇業が、霸道化した特色がある。政治家としては實に手腕のすぐれたものである。又三百年の間あんな泰平を築いたといふことは、世界の何處の歴史にもあまり無い。さういふ此泰平が痲痺性を起して、いよく君民の間が離れた。其上流れの底をくぐつた暗流の中に、覇業を覆へして、元の王政に復古すべき僭勢力が段々と芽を出して、明治の維新を現出する様になつたのであるが、此「中間國勢」は、蘇我氏以來千有餘年の永い間だ、國體の明月、一時雲間に隠れて、その本來の圓かなる光を失つたのである。君民

の如法關係が途切れて、國體本然のまことの姿があらはれないで居たのは、マ一國が病にかゝつて居たわけである。

此の中で一番病毒の中心とすべきものは、北條義時が三院を三島に流した根本思想の謬りである。それがつもり積つて終に日本人に國體心の自覺を喪はしめた、斯の如きことを平氣でやらしめたといふのは、國民に堅實なる國體的良心の存して居なかつた爲である。然しときく建武の中興とか、王政維新の時とかいふと、何處からか勤王家が出て來るけれども、多くは一時的の性質を帯びて居て、特殊階級的であるから、それでは頼みにならない、武士道的であつて國民的でないから、それではいけない、これは濟し崩しに、平時に普遍的に、尊王思想が國民性の中に充實して居らんければいけない。

(三) 現代思潮の諸缺點

外來霜や、國內の霜や、古今に亘つて、いろく舊い「履霜」と、新しい「履霜」とがあるわけ

履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし



であるが、今日日本の現代に於ける思想の混亂は何から来たか、内に醸した謬見と、外來の思想とに動搖されて、いつとなく國體心を自失した所から來て居る。それから捏し上げたり模倣したりして出來上つた所謂近代思想、個人主義やら、刑名功利の思想やら、本能主義は道德を攪亂し、權利思想は犠牲的の道念を冷却し、其他いろいろの解放思想、かういふ風な近代思想は、大率不平的態度と、反抗的氣分を以ていつも社會に臨んで居る、これに就ては政治家にも教育家にも責任があるが、先づ第一に學者により多くの責任がある、むやみに西洋の眞似をして、西洋の事でもさへあれば何でも善いと考へて、無條件に、無茶苦茶に、備へのない者に之を教へ込むといふことが、そもそも思慮を缺いて居る。その旗頭が加藤弘之の『國體新論』である、此書は、専ら西洋主義を金科玉條として、吾が皇室の尊嚴を無視し、甚だ日本の國體を侮辱した、實に驚くべき議論である、それを而も政府で出版して居るに至り、特に驚くではないか、尙政府はルーソーの『民約論』も官版で出したほど、國體の破壊に努力して居たのは、何とも奇怪千萬である、よく今日まで事が無くて居ると私は不思議におもふ。尤も加藤弘之の惡論は、さすがに後年に至りて取消を

たといふことになつて居るが、それでも男爵になつて居る、國體新論取消の功によるのかも知れない。それから朝鮮の獨立黨とかいふ日本國家に對する謀叛人を、内務大臣がワザく招待して、御馳走をしたり、離宮を拜觀させたりするといふ様な、雅量だか放漫だか、無定見極つたことを平氣でやる様な非義非名分の愚見が、一國を風靡して、どの位一國の思想を淺薄化したか知れない、國論も紛淆しそくなわけではないか。國論紛淆の一面には、又常に昏々として舊夢を食つて少しも時世を顧みない偏狹固陋の、「御國體論者」などがあつて、陛下とか帝室とかいふと、只々畏れ多いの一點張で、拜めば眼が潰れるやうに言つて、人民を無理やりに帝室と隔離させる様な一類が、可なり反感を起させて居たのも、國體思想の健全な發達に少からず邪魔になつたのである、官僚の一部に、この頑迷思想のあつた事は、眞接民衆に反感を激することが多い、予も先年大船驛で、今上陛下の東宮時代に、その還啓を拜した節、驛外に放逐されようとした、その理由を糺したら、殿下のお目障りだからといふことだ、當時予は羽織袴で、外套は既に脱いで、今や御車が來るのを待ち奉る敬虔な態度で居たのである、此時外に一人の洋服着た中老紳士が居た、

履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし

二人とも驛吏から放逐を命じられた、予は殿下を拜む必要があるから出ないと抗議した、すると今度は警官をよこして退去しろと言つて来た、なぜ吾々が拜んでは悪いのかと質したら、これは驛長からの依頼で退出を命じに来たのだといふ、その理由はといふと「お目障り」だといふ、忠良なる臣民の敬虔なる拜禮が、何て殿下のお目障りだらう、況んや吾等は合掌敬禮の制規を以て至誠に拜するのである、國體宣揚の張本が、この不逞漢披ひを受けた滑稽状態は随分皮肉ではあるまいか、こんな事が積り積りして民心にどういふ響を與へるとおもふ、官僚の呪はねるものは、こんな點からも原因して居るのであらう、こんな事も、明かに君民隔離の病を煽して、自覺を疎遠せしめて居る。

(四) 偉大なる忘れもの

それからモー一つ大きな原因は、この國に取つて一番大切な恩人を忘れて居たことである。『日蓮によつて日本國の有無はある』と名乗つて、根本的に日本の使命を正説し、世界最後の運命と歸着から結論して、これを世界的に闡明された日蓮聖人を閑却した一事は、國體自覺上の一大

違算である。國體尊嚴の内容を根本から教へたといふ、これほどの大い問題を、日本國民として何等無關心で居たといふことは、甚だ國民の用意の缺けて居るといふことを斷言するに憚らない。

『善につけ惡につけ法華經をすつるは地獄の業なるべし。』

『日蓮によつて日本國の有無はあるべし。』

『我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん。』

といふが如き、洪大な宣言を聞いて、その縁つて來るところを究めないですまして居るといふのは、あまりに人の親切を無にするの甚しいものである。絶大の内容と甚深の忠實とを以て、命かけて唱導された叫びを耳にしたにもかゝはらず、『あゝあれは法華のお祖師様だ』『あゝ日蓮上人か、あれは日蓮宗の開山だ』斯ういつて片隅へ押つけてしまつて、何等この叫びに應答しないで居ることは、小にしては國の損害、大にしては世界人類の災禍である。七百年の永き、國家としてもこれ程日本の

履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし

ために骨を折つた方に冷淡であつたといふことは、冥利のほども恐ろしい次第である。然るに時世は怖いものだ。茲に大正聖代の一大光彩として、前に日蓮聖人に對して「立正大師」の諡號を勅賜されたことは、全く時世の必然が喚び起した感應の聲で、たしかに國家的覺醒の第一歩を宣言されたものと言つて可い。上人曾て平頼綱に對して

『法を知り國を思ふの志、尤も賞せらるべきの處、邪法邪教の輩譏奏譏言する間、久しく大忠を懷いて未だ微望を達せず』

と慨かれた此の「大忠」は、和氣清麻呂や、楠正成の如く、部分的の「忠」ではない、日本の大精神を宣明し、建國の大使命を完全に遂行して、全世界の人類を救つて、この人間の世を眞の常寂光土にしようといふ大規模なる「大忠」である。齋然や月照の様な内職的勤王でない、日本國の死活に關する根本大事を設定した絶大の忠勳である、それが吾々日本國民の血を享けた吾天業民族の一人から出て來て居るのである、吾々國民からいへば、日蓮聖人は祖先の一人である、又陛下からいへば即ち陛下の臣民である、その日本國民の中から、日本よりも世界よりも

大きいといふ此の大理想を持つて世にあらはれたのである。『明かなること日月に如かんや、淨きこと蓮華に過ぎんや』といふ抱負を以て、日の如く明かに、蓮華の如く淨く、世を照し世を淨めて、世の中を覺醒しようとした日蓮聖人を閑却して、他人の如く疎み、繼子の如く隔て居たといふことは、たしかに吾國民が、明確なる國體自覺に縁遠かつた一つの理由である。依て予は茲に改めて、國民に最大限度の叫びを以て勸告する、『古今を通じて唯一人たる「知法思國」の導師日蓮聖人を研究して、眞面目に日本國家の世界に於ける大因縁を知られよ』と。

(五) 霜の後氷の前寒心すべき古今の三兇

それから其の次に附屬の點としては、惡思想を助長するいろいろの缺陷が、諸方にある。政治も、法律も、文學も、藝術も、いづれも國體心の無自覺から、不知不識、惡思想の助けをして居る。教育も社交も、就中、新聞が一番ヒドイ様だ、尤も新聞の立場として、社會現象がその儘反映するのだとは言へ、隨分惡思想を鼓吹するやうな傾向がある。例へば他の一

履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし

般人士に對するの比して、社會主義の人には、多く何々君と言つて敬稱することや、會社や學校の騒動でもある場合、大抵は反抗者に肩をもつ様な傾向が見える、何がなしに勞働運動だとか、裁判所で革命歌を高唱したとか、法官に楯をついたとかいふ類の記事に、半ば好奇的ではあらうが、何かえらいもの様に書き立てる。これに慣らされた社會は、自然何事にも反抗でもすれば何でもえらい者のやうに考へ出すに至る、此の頃學校騒動が方々に起る、教へを受ける身分として、教へるものに對して反抗するといふことは、その理由のいかに拘らず、大々の曲事である。若し校長や教師に不都合があれば、それ相當の手續を以て意思を表明すべきであつて、學生が長上に直接反抗するといふ事は、教育そのもの滅亡である、然るにも拘らず、騒ぐものに何か理分があるやうに思はせるといふやうなことは、やはり可くない。それから社會記事の中でも、犯罪記事などは、あまり書き立てない方が可いとおもふ、二人斬よりは三人斬、五人斬よりは八人斬の方が社會の注意を惹く様だが、こんな血腥いことを、無關係の讀者に知らせて、餘計な頭痛を感じさせても、別に世の爲めにならない。孝子貞女の記事は、五號字か六號字で片付けて、惡人惡

事には一號字や初號活字を氣張り込むといふのは、何か惡人獎勵の様にあたつて、甚だ妙でない、眞面目な立派な事柄は、随分隠れて傳へられないで居るのが多い中に、知らんでもいゝ出齒龜の細君が洗濯して居る寫真を見せられたり、兇賊の何とか小僧の御直筆を拜ませられたり、芳川鎌子の負傷姿を載せたり、白蓮女史の腹の子がどうしたのといふ事を熟知させられることは、この用の多い世の中に、可なり迷惑を感じるはまだしも、これが及ぼす社會の感化に至つては、實に寒心すべきものであるとおもふ。故に新聞紙としては、是等の點を一考して、社會指導の責任上大に筆を慎んで貰はなければならぬ。

それから又文學なども此の惡思想を鼓吹するのが多い、法律なども、すでに權利思想を基礎として居るから、いやとも國民に權利の思想を教へるやうに出來て居る、政治もさういふ風だ。皆な斯ういふ缺陷があつて、各方面から國體思想の自覺を妨げて居る。

かういふ工合で、いろいろの缺陷が、誰れするとなく、いつなるとなく、自然と國民の性情を荒化して、傳習的やら外誘的やら、次第に染めあげて、何時か反國體の思想や行動を現出する様

履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし

になつて来る、それが氷の前に来る霜である。全く一朝一夕の故にあらざるである、サアこの「霜」だ、今これを約めて見ると三つになる。議論などはしばらく別にして、直接行動の方で見ると、古來大逆の行動や背本思想の顯著なものが、歴史上左の三つある、即ち

悪心的大逆 (弓削道鏡等)

見計的背本 (北條義時等)

見計的大逆 (幸徳秋水等)

一つは悪心から起つて大逆を企つる者、一つは見計から起つた背本思想、一つは見計の上から大逆をする者と、斯う三つある、これを先づ「古今の三兇」と名けて置く、そこで第一の悪心から大逆を起した「悪心的大逆」といふのは、弓削 鏡とか平 将門の如き(将門は實は悪心でないといふ説もある)それから眉輪王が安康天皇を弑したといふが如きは、(これはまだ年のいかない人で、事情が他から煽動されて起つたことであつて、まア論外であるが)。或ひは直駒が崇峻天皇 弑した(これは蘇我馬子の罪となつて居るが、これには別に議論がある)などの類は、逆は則ち逆だが、そ

の動機が只の慾とか虚榮とかいふやうな悪心から大逆を行つたものである。それから悪心でなく、善良なる意味で、天下國家のためにこれが必要だと考へたといふ、一種の思想、見識の上から來た所謂「見計」から發した逆心(「見計」とは佛教でいふ、思想上の計着)、その見計の上からして背本的思想を起した「見計的背本」、大逆ではないが背本の行動を執つた者、即ち北條義時が三院を三島に流し奉つた如きこれである。臣民が天子を處罰するといふことは、日本では實に容易ならざることであつて、國家組織の根本を覆したものである、三上皇が若しお悪ければお悪いやうな處置の執り方がある、臣民として之を處罰して遠嶋に流し奉るといふことは、下尅上の甚しきものである。それから次には見計の上から大逆を行ふ者、悪心からでない、邪見の上から大逆を企てた「見計的大逆」、これは日本開けて、唯一つ彼の幸徳秋水の類があつた。斯う三種類ある、これを今「古今の三兇」と名ける。幸徳秋水の如きは、弓削道鏡と北條義時を一緒にしたやうなものである、「見計」にして「大逆」だ、これは最も恐ろしい大罪である。しかしながら此の見計の上から大逆を行ふといふ、幸徳秋水のやうな者が假令出ても、國民の用意が周到であれ

履霜の誠に寒心せざれば堅氷の海に泣く時あるべし

はその害をなすことは出来ない。であるから大逆者の出ることよりも、國民の用意の行届かぬことを恐れなければならぬ。この大逆も、根源は背本思想から醸出するのであるから、この尤も恐るべく忌むべき大逆よりは、むしろ防ぐに捕捉し難い思想が一番危険である。表にあらはれる大逆は、どうでも防ぎがつくけれども、人の心の中に蟠る思想ばかりは、いつ何時どんなところへ、どんな形で顔を出すかわからない。ところ嫌はず産み着けた幸徳秋水の卵である。革命も破壊も大逆も、皆な此の見計の誤りが本となつて發生して來るのである。これを洵治し善化するには、あらゆる法に超勝して、正しく之を批判する力と、これを還元して活す力と、この活殺の全能力を有した大道でなければいかぬ、殺しつ放しぢやいけない、殺せば化けて出る。處分はする、處分はするけれども活かしてやる、叱言はいふ、叱言はいふけれども資本金は出してやるといふ道でなければいけない。即ち批判嚴正にして包容廣大なる法華經の圓理にあらずんば、完全に之を導き得る法はない、即ち

『善惡不二の南無妙法蓮華經なれば、惡人も必ず成佛す、邪正一如の南無妙法蓮華經なれば、邪見いよくたのみあり。』

といふ超絶能力を有した大統領、所謂『毒藥變じて藥となる』といふ此の法でなければ、此の毒思想旺盛の世の中を教化することは出来ないのである。

先づこれを譬へて見るといふと、近火のやうなものである、今近火があつて半鐘がジャンク鳴つて居る、三ツはんだか、スりはんだか、とにかく近火があるとす。その近火の中でも、向ふ河岸の方の火事は、川があるからちよつと焼けて來ない、けれども近いからとにかく用心しなければならぬ、飛火することがある、これはまア今日の獨逸や奥、太利などは、對岸の火事である、それから隣家の火事となると、これは棟が續いて居るから險呑だ、よほど用心しなければならぬ。これは赤くなつてしまつた露西亞、黄色くなりかゝつた支那、此の赤露黃支の二つは隣家で、今可なりひどく燃えて居る、これはよつほど氣をつけなければならぬ。それからモウ一つは屋根の上の飛火だ、これはよほど警戒しないと、知らぬ間にどんな遠方から飛んで來て燃え上るかわからぬ、これが赤化宣傳である、露西亞が大金をかけてしきりと日本に對して赤化宣傳をやるといふことは、隨分と大きなお世話だが、見込れたのが災難、此の屋根の上の飛火に對しては、特によほど警戒しなければならぬ。とこ

ろが又此の屋根の上の飛火よりもモツと恐ろしいのは、椽の下火だ。椽の下に廻つて居る火は實に油断が出来ない、これは即ち社會的不平等である。國民の社會的不平等といふものは、いつ何時どんなことになるかわからぬといふことは、爲政者たるもの一切に警戒しなければならぬ所である。しかし、予はこれを警察眼で言ふのではない、内務省のお雇的にいふのではないが、此の社會的不平等の聲といふものは、これは社會的缺陷の欺かざる叫びである。この社會缺陷の由つて來るところは何であるかといふと、今の圓融思想を閑却して居る、國體を知らないところから起つて來る。これを癒すには、國民の全體に、先づこの國體思想 普及を計れば、この火はおのづから消えるのである。

(六) 尊 王 護 國 の 體 驗

圓融思想國體觀念の充實したところには、水も漂はずこと出來ず、火も焼く事の出來ない安樂光明がある、議論よりも實例で示さう、我が國柱會の或る會員の關與して居る某會社に、先年労働爭議が起つた、どういふ争ひかといふと、職工が申し合せて會社に迫つて、賃銀を下げ

ろといふことを要求した。その理由は、『財界も追々不況で、會社の商賣も前のやうに思ふやうでないから、此の際高い賃銀を拂つたんでは、會社の存立上 甚だ危険だとおもうから、賃銀をいくらか下げて呉れ』といふのだ、斯ういふことを職工が聯合して會社に迫つた。會社の重役の方では、能く熟考するが可いと言つて、空はづみに解決しないで、相互の間に善良の結果を以て解決したといふ、なんと面白い話してはないか、労働爭議も數多いけれども、此のくらの不思議な爭議はない。それは何だといふと、國體主義の感化を受けた職工たちが、斯ういふ神々しい振舞に出たのである。これで労働者は尊いとされる、どうですか？ 諸君、それはよく考へて見れば全く道理だ、一時的に高騰した不合理な不自然な高い賃銀に安んじて居るといふことは、會社の存立を危くするものであるから、それがため 今の内に賃銀を下げて、さうして會社の安全を圖らうぢやないかといふことを、優しくも職工が考へ出したといふ、國體觀念の教へる所は、斯く理義が正しい、それが職工即會社、會社即職工の圓融思想から出た光輝ある叫びである、労働者から斯の如き叫びが出るといふことは實に日本國家の譽れてはならないか。

履霜の誠に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし

此の思想を天下に普及するのである、これで國を固めようといふのである、労働者も、資本家も、政治家も、學者も、異體同心で、此の國體の尊嚴を維持するやうになつたならば、眞の靈山、事の寂光は招かずして来る。吾輩は必しも赤い色を恐れぬ、決して恐れない、赤でも紫でも黒でも青でも、なんでも來いだ。天、日はあらゆる色を統括する、一切の色は却て皆天日の光を受けて彩華を放つのである、青黄赤白黒、相手嫌はず世界中のあらゆる思想を醇化して、これに能判能開圓理開顯の妙を加へれば、どんなものでも皆な華咲き實が成つて用をなすといふことが、此の國體に合致するところの、即ち日蓮主義の教へた國體開顯の眞理である。此の眞理の光明によつて照せば、過去の闇でも、未來の闇でも、即施即廢して一燈よく千年の闇を破る、舊い思想も新しい思想もない、この燈がバツと一つ點けば、千年の闇でも百年の闇でも一遍に闇は破れて立どころに解決してしまふ。社會主義でも、共産主義でも、國家主義でも、泥の儘では何だつて食へない、國體主義でも、泥の儘では食へない、みな此の圓融理想の消化を経なければ、料理をしなれば決して食膳に上せられない。今日までさまざまと、國家主義だとか、忠君愛國だとかいふやうなものを

いくら唱へても、これは皆な料理をしない、泥のまゝで食つて居たのだから、國家の精神によく消化れて居ない、消化れて居ないら、其の唱へる聲のみ熾んにして一向その實が舉らないのである。此の微々たる國柱會の如き、吾々のやうな微力の者でも、この根柢ある正義團結の力、即ち異體同心の會員等が、たとひ少數であつても、殆ど一國の休戚に關する一大事を、脊負つて居るのは、根の深い尊王護國の忠誠から發して居るからである、一指をあげれば、この通り千里を遠しとせずして集り來て國事に盡すとか、労働者でも理義整然たる報恩觀をもつて居る美談があるのは、即ちこの法華經の圓融思想の大光明によつて照された、その光の及ぼすところの感化である。かういふ明確な國體の自覺から出た尊王思想の普及を圖つて、國家の意義を明かにして、世界に與ふる光輝としたのである。

本論はまだ説き盡せないのだが、御覽の通りの病氣で、前後四時間以上の講演で、モハヤ七時も過ぎてこの通り晩くなつたから、あとは又何かの機會に申上げることとして、今日の奉弔講演はこれで終ることにします。實は弔祭のことであるから、祝ひの言葉は避けなければならぬのであるが、し

履霜の賦に寒心せざれば堅氷の悔に泣く時あるべし



かし、いかなる場合でも、陛下の萬歳を奉唱することは、それが直ちに尊王思想の精神的充實で、その聲の中には故殿下の御尊靈も御満足あるべき御手向の意味も籠って居るから、此の意味に於て、特に深く、厚く、諸君の尊王心を鼓舞して、謹んで陛下の萬歳を三唱したいと思ひます。諸君起立！

天皇陛下萬歳

萬歳！

萬歳！

萬歳！

(終)

#### 第四 濁亂の世に放つべき光輝

##### (一) 荒蕩濁亂の世相

佛陀は現代末法を濁亂の世と名けて、それに適應すべき教法は、ひとり法華經だとされてある。何故に法華經が濁惡世の教であるかといふと、一には法華經は人生事物の根本を究めた事と、二には人生事物の開發整理に要を得る方法を示したからである。即ち濁亂といふぐらゐたから、間違つた上に其れがこんがらがつて頗る紛亂を究めた世相である。これを始末するには、よろづ根本的に解決しなければならぬ、そうするには整理的立場として、一切を醇要的に捌かねばならぬ、要するに複雑なものに臨む簡單法である。而して此法華經は、「根本主義」であると共に「醇要主義」である。「久遠實成」といふ根本理法で、「一念三千」といふ要約觀法を剔出して、末法濁惡の大紛亂を、一刀兩斷して快刀の亂麻を斷つが如く處分して行く教であるから、應時の法といふ

のである。

そこで其の濁亂のありさまは、どんな風かといふと、佛陀はこれを五通りに觀察して「五濁」と言つた、即ち

- 劫濁 時全體の濁化
- 煩惱濁 煩惱による濁化
- 衆生濁 境界による濁化
- 見濁 見計による濁化
- 命濁 生活による濁化

時の流化で、周圍のいろ／＼が悪化して來るから、イヤとも濁化せざるを得ない様になる。時代促進の濁相が「劫濁」、時のにごりである。その上人々の持ち合はせた煩惱（欲や執着）が人を濁化する本能的情性が「煩惱濁」、濁るべく脆く造られた生物的缺陷が「衆生濁」、それへ散漫な經驗や無秩序の内省で築き上げた種々の思想見計が、「時惡」「人惡」を煽動して裏書をつける「見

濁」、生命の惡奔流をその儘に放任して、苟くも活きんと跪く爲めに捲起す生活苦の「命濁」。この五つが萬字巴と渦を巻いて、どちらからも世を濁亂してとめどのない世の中、これが末法の相である。扱てこの五濁が、銘々孤立的に起るのか、又は夫からそれと生出して起るものかといふと、それは別々にも起るが、末法の現象としては、互に相關聯して、次第に生起して同時に存在するのである。

そうして五つちやんと互に抱き合つて、具さに備はつて、惡世の色を濃く染出して居る、それを五濁の惡世といふ、今その生起と關聯を示すと

- 劫濁 時代の惡が煩惱を促し起し
- 煩惱濁 煩惱の毒が社會を煽り
- 衆生濁 社會の惡化が思想を混亂し
- 見濁 思想の紛糾が生活を不安にし
- 命濁 生活の苦惱が時代惡を生み起す

濁亂の世に放つべき光輝

といふ順序になるが、然しその一濁ごとに、他の四濁を煽り立て、互に扶け起して、濁亂を旺盛にして居る、即ち

- 劫濁が家の四濁は 時代的に悪化し
- 煩惱が家の四濁は 本能的に頹敗し
- 衆生が家の四濁は 社會的に紛更し
- 見濁が家の四濁は 思想的に昂奮し
- 命濁が家の四濁は 鬭争的に荒亂し

て、イヤとも悪くならざるを得ない様になつて居る、その中で「劫濁」は土臺で、「見濁」が時代の特徴とされて居る。

『諸佛世尊は五濁の惡世に出たまふ』とあつて、佛陀の捨置けない時代としてある、その中でも正像末の三時を進行期と爲し、別して第三の末法（釋尊滅後二千年の後）を五濁の爛熟期としてある、病ていへば第三期症である。それ故此惡世を救うことに重きを置かれた佛陀は、一切の

化導の力をこれに集中して、最上無比の法を、此時代の爲に残され

『是好き良藥を今留めて此に置く、汝取て服すべし差へじと憂ふること勿れ』

と告げて、「法」は法華本門の大法、「人」は本化別頭の菩薩、「場所」は閻浮提の中心地、「時」は末法第五の五百歳、鬭諍堅固白法隱没の時代と指示されて應時の教を垂れた。

故に佛陀と五濁は、てうと醫者と病人の關係だから、病が重ければ重いほど、良き醫者と良き藥を要するわけであるから、最上の秘法たる法華經を、しかも醇精化して、單刀直入、人の根本心へ直感すべき様、その精髓を留めて、この大惡世救濟の唯一憲教としたのである。

### (二) 濁亂の世を救ふべき唯一の法

#### 其一 醇精簡要の法

面倒なものを處置するのだから、簡單でなければいかぬ、原始的簡單でなく、醇化的簡單でなくてはならぬ、八萬四千の法門、一代五時の經說、大小權實本迹等の種々廣汎な法を淘汰

して、經中の王たる法華經に歸着し、更に又その法華經の精髓を取つて、妙法の五字に醇了して、末代に残した、即ち

「諸の經方に依て、好き薬艸の色香美味皆悉く具足せるを求めて、擣漚和合して、子に與へて服せしむ」

とある、この擣漚和合。擣いたり漚つたり、和したり合したりして仕上げた良薬とは、佛陀の手で特に末法的に精製された五字の大法は、擣漚されたから是れ精中の精、良中の良であつて、和合されたから、あらゆる萬善萬徳を包含して、小粒で峻烈な効力のある、一つで一切のラチのあく至醇至要の法である。

### 其二 即妙の圓益

峻烈銳利の殺菌力があつて、あらゆる不純不精のものを成敗して、餘瀝をあまりさざる批判力があると共に、又一切の事物を活かし養つて行く所の營養力がある。

要するに克く物を判ずることは、終に克くそれを活かす爲めなくてはならぬ。若しも所謂批判が、只批判のために批判するといふ意味にすぎないとならば、その批判は結局破壊である、現代のあらゆる評論が、徒らに世を紛亂して、何の結論をも與へ得ずして、世間をさがして居る様なものである。法華開會の前提としての「能判」はそんなものではない、今の世の新人などいふ手合は、ナト落付いて、かういふシンミリとした學問をしたらどうだ。

その嚴密至公なる能判を透して仕上げらるべき「能開」の圓理は、一切の事物に存して居る根本性用を摘發して、その假相を脱いて實相に還らしめるから、破壊せず其當體を活かす、これを「本位不改」といひ「當位即妙」といふのである、かういふ活用能力がなければ、世の中や人生の整理は出来ない。

この即妙能力は、根本法であること、それから其れを醇要した所の簡單法でなければならぬ、故に佛陀は此法を末法の爲めに留めようといふ付囑の宣言に

「要を以て之を言へば、如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力、如來の一切の

秘要の藏、如來の一切の甚深の事、皆此經に於て宣示顯説す」

と言はれて、古來これを「結要付囑」の文と稱して居る、日蓮聖人は「廣略を捨て要を好む」といひ「要中の要を取る」と主張されたのはこれに根據したのである。

この根本的であつて醇要的なる法華本門の圓理から照らして、先づ第一にこの光りを受けるものは、一番高い山が一番早く旭日の光に照らされる様に、この世界中のあらゆる精神的物質的の中に、尤もこの光りに近い日本國體が、この圓理に相應する可能性をもつたものであるから、佛陀も「閻浮提内」と指し「後五百歲中」と示して、その時と處とを擧げられた、日蓮聖人は

佛弟子としての立場から見ても、日本の成立組織性格が、吾法華經に契應した國であるから、日本を以て法華經の發祥根據地としなければならぬと考へ

日本國民としての立場から見ても、法華經一念三千の圓理こそは、遺憾なく吾日本の國體を證明し成就する所の至法なることを發見し、この法華經を以て日本國を開顯しなければならぬものと主張し

法華經の國、日本！

日本の心、法華經！

と判じて、こゝに王法佛法の冥合を提唱されたのである

其れであるのに日本の國論が之を閑却し、又日蓮聖人をいふものにして此點に留意せず居る様では、兩方ともに死んでしまふ。

法華經も根本的意匠、日本も根本的意匠、法華經は醇要主義、日本も醇要主義、その根本的にして醇要的なる理法でなくては、到底この濁亂の世を理めることは出來ないから、法華經も日本國體も、俱に現代解決の唯一使命を以て居るものなのである。

一口にいへば、人文の最上根本としての忠孝、そのまた根本が一念三千の圓理、この圓理の保證のない忠孝(月並の忠孝)では、徒らに世を紛糾しないまでも、世を沈滞せしめて、腐ッてしまふか後戻りをするが關の山である。

故に今日に在て、世界の最善の方法は、日本國體を通じて法華經の圓理を證する事と、法華

經の圓理を通して日本國體の内容を合點する事である。

世はこの通り亂れて居る、行詰つて來て居る。それで之を救うべき法と國とが、この通り相手を待てる、大病人が大良醫に逢つた様なものだ、なぜ治療を受けないのか、なぜ赴いて治さうとしないのか、元品の無明を斬る大利劍！、生死の長夜を照らす大燈明！。この濁亂の世を救うべき唯一の道は、日本國體を如實に研究し、如法に實現することの外はない。平和會議も世界聯盟も、軍備縮小でも國防充實でも、この第一義を閑却して居るうちは、トテモ人間の始末はつかない。

### 第五 世界的覺醒と國民的覺醒

(一) 世界を擧て日本國體を研究せよ

世界の運命は、全く行詰つた、世界大戰が急にかうしたのではない、漸々に積み來つた違算の破綻である。根本正道の立たない悲さ、佛國革命が高調した三大標語も、實は根のない徒花であるのに氣がつかず、やたらに自由だ平等だ博愛だと、名前はかりて取引したのだから、段々と世が不自由になり、不平等になり、殘忍になつて、今では世界中まるで地獄の豫備學校見た様なありさまである。平和も安穩も快樂もない處に、眞理も正義も行はれるわけのもてない。「永久に平和なき國」と宣告された歐羅巴が、自分の病を外へもうつさうとして居る、餘計なお世話に東洋までも攪亂して居る。そうして得るところは何かといふと、ヤハリ嫉妬と猜疑と不安とで、畢竟顛亂の上塗りである。支那朝鮮をもバルカンの出店にして、そんなにも争ひがしたいものかと思議てならぬ

い、謙遜も禮讓もない頭には、正義も眞理もわかる筈がない。利害の觀念以外に人生を知らない世界各國の政治家は、深更空澄んだ時、天の星でも見て世界人類の行末を靜かに考へて見るが可い。資本主義でも共産主義でも、歸する所は絶対平和がめあてではなくてはならぬ、それには絶対の正道を得なければならぬ。その正道を求めるときをせずに、上はツつらの文化にのみ汲々として居るのは、なまじ物質文明が累を爲した一種の野蠻思想である。

圓理を閑却して種々の論議を放言するものは、甚だ危険である。西洋の諸學說も、概して此圓理を缺いた一種の隔歴思想が土臺となつて、いろくに頭を替へたまでだから、究竟して世を治め人を度する所以の道でないのは悉く同一である。

物を離れて心の存立せざる如く、心を離れて物は無い、然るを偏よつて、心とはかり物とはかり執するから、物も心も俱に乖角して亂れに終る、それを隔歴の偏理といふ。この偏理で押し通さうとするから、世がガタビシして治りがつかなくなる。マルクスを祖述したレーニンの治績はどうであるか、「土地可樂の處なし」と説いた地獄の現相に墮して、萬民その抑壓と飢餓に惱んで居るではない

か。最初「無抵抗主義」を主張したトルストイも後にそれが惡を助長するものと心付いて、解釋を改めて「暴力を以て惡に抗する勿れ」と言つて、教會に反抗し國家を否認するに至つたが、是れは「頭隠して尻隠さず」の愚痴論に過ぎない。凡そ惡を對治することは、力の極度應用である、惡そのものに無制限な力の濫用があるから、これに對してその相應點まで力を用ゐるのである。武力の已みがたき所以は、世に惡の力の存在する限り、その對抗法として必要なのである。故にこの場合の力は、決して暴力ではない。病者に對する對症療法の様なものである、惡に對しては「抵抗力」正義に對しては「營養力」である、譬へば人體の唾液が毒虫類に對しては攻撃力ある毒素を有し、人體に對しては無上の營養力となつて居る様なものである。この道理に暗くして、何の準備もなく「無抵抗」だの「博愛」だのと言つても、徒らに人の苟安心不平心を激するばかりで、何等圓滿解決を世に與へない。トルストイを擔いだ露國の現狀は、今はた如何と顧るが可い。クロボトキンはトルストイを評して、「彼れは問題の解釋者にあらずして、問題の提供者なり」と申したそうだが、問題と解決とを混同するのが今の世の通弊だから、火元を見ないで早鐘をつく様な世間騒が

せばかりで困る。

然し、レーニンでもマルクスでも、圓理から判じて、その成分を淘汰溶解したら、その中に含む若干の眞理は、「正判」「正解」を経て一乘に歸入するに相違ないから、世界文明の行詰ったトムの詰りは、是非ともあらゆる思想學見の整理をつけて、當然落着くべき所に落着いて、モ一決してガタつかない、あと戻りをしない大理想の下に還元復活して、はじめて眞の平和即ち予の謂ゆる絶對平和を現出すべく覺醒して來なければならぬ。世界の過去は、隔歴思想のたゞりて、長い苦惱の歴史を経て來た、モ一此上は何とか理りをつけねばならぬ。此頃西洋では、追々と東洋文明の研究に志して來たといふ話だ、とりわけ儒教に就ての研究が旺盛だといふ、ソロク近くなつた。西洋人は事物の研究がねつゝいから、この儒教研究から口があいて、忠孝信義の具體發現者たる天業民族の儼存せることに心づき、その由て來る所の天業の宗主たる日本國體に氣がついて、一返に夜のあけた様な覺醒をすることであらう。そうなる人眞似好の日本人が、西洋の大學へ出掛けて行て、日本國體學の講義でも聞いて、彼の國から日本國體學博士の免狀でも貰つて歸つて

來て、教育勅語の讀み直しでもすることであらう。

時は刻々に迫つて來て居る。神武天皇建國史は、二千五百年もあくびをして待て居る、世界をあてにして出來た國だ、世界中の人が研究して呉れなければ、日本の歴史は犬死だ。今の世界に向て、「日本國體を研究せよ」と喝破するのは、空腹の人に食事の報告をしてやる様なものである、世界の文化人どもは、久しく自由平等博愛の膺物で惱された。その有名無實から目覺めて、本當の自由本當の平等本當の博愛が、日本紙の書物に隠れて居たことを知つて、叩けば本當の音の出る眞の平和の光りに接することであらう。

この事は既にスタイン博士も言つた、グランド大統領も言つた、波蘭の詩人も謠つた、ボールリシャル博士も讚美した、是等は前驅である。世界の大戰は、彼等のこれまでを結論したものである。戦後の思想激動は、任運に日本國體を探し出すべき聲である。予は明治神宮の御遷座を紀念して、「世界を擧げて日本國體を研究せよ」と宣言して、世界中に此光を投じた。今その英譯文をこゝに掲げて參照に資するとしよう。



Japan alone is the pioneer to transmit it to posterity, having championed it as the representative of the world. Therefore, although it is called the Japanese National Principles, the path is the path of the world.

Essentially man is the vessel which contains the moral path and not the vessel of nutriment. Therefore, to comprehend man from the point of view of food, is as erroneous a view as to look upon a man as a beast. All the horrible, combative and bloody happenings from which the world has suffered throughout history, are but the reflex of an erroneous idea whereby the moral path was supplanted by food, making a beast of a man. Must we be scared by errors of thought? Surely human beings have now become tired of strife after the evil consequences of Wars. "How then to live right" and "how to dwell in safety" are henceforth the problems to solve. The path which abandons food is the only key. Food can be found in the moral path but not the moral path in food. If we give up the path, food will die, if we abandon food, the path will prosper and food will co-exist. There will no longer be strife, if the material and spiritual are united within internal life, and then peace will exist when everything is in order externally. This path has been awaiting man from eternity. The Ancestor, the Sun-Goddes handed

## DECLARATION.

(Concerning the Publication of "The Study of the Japanese National Principles.")

By

CHIGAKU TANAKA (The Founder and The late President of the Kokuchukai, Tokyo.)

Translated into English by KISHIO SATOMI.

.....

On a fortunate day of dedication of a shrine to the Great Emperor Meiji, I declare to make public "The Study of the Japanese National Principles" which is the production of my thinking and researches during these forty years. Ah! the time has come! All ye nations, study the Japanese National Principles.

Without doubt, the Japanese National Principles are the moral path. The path means the practice of truth. We call it Truth in theory, and Righteousness in a practical path. "Cultivation of Righteousness" is this. The path unites all goodness, hence "Gathered Happiness," and the path implies wisdom, that is to say "Achieved Glories" These are the justice of the universe which all human beings shall trust;

章  
王  
正  
義

一八二

will make rank the cause for strife, but the cause of this strife is food and not rank. The rank which was submitted to the world by Japan at an early age, is the form which is armed with truth for the purification of human beings and for the sake of the protection and assurance of the true value of equality. True equality consists verily in equitable rank. Probably the solution of human life culminate here.

The defect of modern civilization lies in ignorance concerning the origin and end of the material, and in reversing the order of morality and food. Surely, the collision of material and spiritual produces destruction and degeneraton while the unity of them brings about a settlement and an exaltation. The Keeping of a perfect union of the material and spiritual, the path of "Sovereign and Subjects" which is the outcome of the Japanese National Principles, alone can endow mankind with eternal life. Methinks, this is the new and unique lesson for the modern world which is gradually awakening from the deepest dream of intricacy and wildness. Ah! the time has come! All ye nations, make a study of the Japanese National Principles."

—End—

down this Law and proclaimed "It shall prosper like unto Heaven on Earth," and the founder of the Empire, the Great Emperor Jimmu, succeeded to the Law and declared "The Eight cords shall be covered so as to form a roof." How great the divine task! There have elapsed 2600 years since these announcements were made on the earth. The practice of the moral law is shown in the form of "Sovereign and Subjects." The thing which is the highest standard of human cultivation, through sentiment and reason realizing perfect morality, is the form of the "Sovereign and Subjects" of Japan. The Heavenly "like gods," "like sages," and the brilliant characteristics of "Emperors of one and the same Dynasty throughout the ages" and of "The whole nation of one mind" produced the unique civilization and the nature of "Loyalty and Filial piety" owing to "Wide and profound merit and deep virtue." In substance, the emperors and subjects are one body and equal; in efficacy, orders of Society between the two are distinguished by the observance of dignity. This mysterious order coincides with true equality. Such a civilization is tranquil and brilliant. Therefore in Japan there exists rank but no class-antagonism. Some there may be who

世界的覺醒と國民的覺醒

一八七

Powers in granting me the Kingdom, and below, I should extend the mind will foster (or cultivate) Righteousness throughout the line of the descendant.

Therefter the capital may be extended so as to embrace all the six cardinal points, and the eight cords (both mean the universe or the world) may be covered so as to form a roof (or family). Will not this be well?"

(3) The Sun Goddess, the Ancestor of Japan made the following Edict when She granted the Grandchild the Kingdom together with the Three Divine Treasures, the Signs of the Imperial Throne. (The Three Divine Treasures are the Mirror which symbolizes Wisdom or Truth, the Sword Courage, the Gem-Peak Humanity.) "The Reed-plain-1500-autumns-air-rice-ear Land (Japan) is the region which my descendants shall be lords of (Note: correctly, "shall act the Emperor-Path") Do thou, my August Grandchild, proceed downwards and govern it. Go! the Imperial Throne shall prosper like unto Heaven on Earth."

(4) "The whole nation of one mind," "Loyalty and Filial Piety" and "wide and profound merit and deep virtue," these phrases are the words in the Great Emperor Meiji's rescript of National Teaching.

TRANSLATOR'S NOTES.

.....

(1) The Japanese National Principles. Japanese term Nippon Kokutai implies the following meanings: National Teaching, fundamental character of the State, Ideal of the country, Spirit of the State etc. But this term is too preguant to be translated correctly into any foreign language.

(2) Cultivation of Righteousness, Gathered Happiness, Achieved Glories, these three terms are called "Japan's National Principles" which were announced by the Great Emperor Jimmu, the founder of Japan, in His rescript prior o His accession ceremony. Extract of the rescript runs as under:

"In this gloom, therefore, he fostered justice, and so governed this Western border (Kyushu). Our Imperial ancestors and Imperial parent, like gods, like sages, accumulated (or gathered) happiness and amassed (or achieved) glories. ..... Now if a great man were to establish laws, justice could not fail to flourish. And even if some gain should accrue to the people, in what way would this interfere with the Sage's action? Moreover it will be well to open up and clear the mountains and forests and to construct a palace. Then I may reverently assume the Precious Dignity, and so give peace to my good subjects. Above, I should then respond to the kindness (or virtue) of the Heavenly

尊  
王  
正  
義

一  
八  
六

右の原文は左の如し

### 宣 言

——日本國體の研究を發表するに就いて——

明治神宮奉鎮の吉日、我近く吾が四十年來の冷暁を経たる『日本國體の研究』を世に發表すべきことを宣言す。あゝ時は來れり！ 世界を擧げて日本國體を研究せよ。

惟ふに日本國體とは道也、道とは眞理の實行にして其の歸趨を定むるの謂也、理に在ては眞といひ、道に在ては正といふ、『養正の心』是也、道は諸々の善を攝す、故に『積慶』といふ、又諸の智を函む、故に『重暉』といふ、即天地の公道にして、人類の齊しく藉るべき

攸、但日本特リ世界に率先して之を傳へ、世界を代表して之を持す、因て稱して日本國體と曰ふと雖、道は則是世界の道也。

由來人は道の器にして食の器に非ず、而も食を以て人を解するは、是人を以て禽獸と爲すなり、凡古今世界の嘗め來れる、所有酸苦紛爭殺伐の歴史は、咸この食を道に易へ人を獸化したる惡解釋の反映に非ざるは莫し、慄るべきは思想の錯誤なり、人類は長き間の慘血と悶とによりて、既に争に厭きたり、今後の問題は、如何にして正しく生き安く住せん乎に存す、其の決は唯食を去て道に就くに在り、道下に食あり食下に道なし、道を離るゝ時、食は道と俱に亡し、食を舍つる時、道は食と俱に榮ゆ、物心内に融して争なく、秩序外に整ひて平和あり、斯の道久しく人を待つ。

天祖は之を授けて『天壤無窮』と訣し、國祖は之を傳へて『八紘一字』と宣す、偉なる